

美作國府跡

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第50集

1994

津山市教育委員会



美作國府跡

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第50集

1994

津山市教育委員会

序

美作国府跡の発掘調査は、遺跡の範囲と構造を確認する目的で行ってきたものであります。かねてから本委員会では、市内の遺跡の保存については、開発に対処しての事前の緊急調査だけでは不十分であり、特に重要な遺跡については今後の保全策をたてるべく、計画的な調査を行う必要性を感じていた次第であります。美作国分寺跡・同分尼寺跡に続く調査のひとつとして、昭和61年度から平成4年度にかけて、美作国府跡の確認調査を国庫補助を得ながら進めてきました。

美作国府は、いまから約1280年前、和銅6（713）年に備前國から6郡を割いて設置された美作國の役所で、現在の津山市總社を中心とする地区に置かれました。国府の設置によって津山は美作地方の政治・経済の中心となり、この津山の地位はその後も近世の城下町を経て現在につながっています。このように美作国府跡は、私たち津山市民にとって歴史の原点ともいべき遺跡であります、それとどまらず古代の美作地方を考えるうえで欠かすことのできない大切な遺跡でもあります。

本書は、7年間にわたる発掘調査結果について報告するものです。今回の一連の調査も、美作国府跡全体からみれば、その一部を調査したにすぎず、企画の解明は今後の諸調査にまつところが大きいのですが、美作国府跡の様相についていくつかの新知見を得ることができました。

調査にあたって有益なご指導をいただいた先生方、積極的なご理解と協力をいただいた地元関係者各位に深甚の敬意を表しますとともに、本書が美作国府跡の今後の調査と保存についての一助となれば幸甚に思います。

平成6年3月31日

津山市教育委員会

教育長 藤原修己

例　　言

1. 本書は、津山市教育委員会が実施した美作国府跡の発掘調査成果の報告である。
1. 調査は国庫補助事業として昭和61年度から平成4年度まで、7次にわけて実施した。
1. 調査は、津山市教育委員会文化課が担当し、山中敏史（奈良国立文化財研究所）、鎌木義昌・近藤義郎・水内昌康（岡山文化財保護審議委員会委員）、吉田　晶・狩野　久（岡山大学）、河本　清（岡山県古代吉備文化財センター）の諸氏の指導・助言を受けて、安川豊史が文化課職員の援助を得ながら現地調査にあたった。
1. 調査に利用した座標は、B=36°0'、L=134°20'を原点とする第V直角平面座標系である。本書で使用したX・Y座標の数値の単位はmである。実測図中に用いた方位は、本座標系の方位であり、したがってNはその座標北を示す。これはX-102835.272m、Y-30435.070mの位置で、真北に対しN-0°11'30"-Wの偏倚角を有する。高さは海拔高である。
1. 出土瓦の胎土分析を岡山理科大学白石　純氏に依頼し、報告文を頂き付録として掲載した。その他の執筆と編集は安川が行った。

目 次

I 位置と環境	1
II 調査の経過	5
1 従来の知見	5
2 調査に至る経過	6
3 調査経過	8
III 遺 跡	13
1 遺構の概要	13
2 上層遺構	13
3 下層遺構	18
4 国府期以外の遺構	19
IV 遺 物	22
1 土 器	22
2 瓦	38
3 砥	45
4 木製品	47
V 考 察	48
1 遺構の変遷と年代	48
2 遺跡の性格	50
付録 美作国府跡出土瓦の胎土分析	52

挿 図 目 次

Fig. 1 位置図	2	Fig. 14 土器実測図(SD503,SD309,SD102)	30
2 美作国府跡周辺遺跡分布図.....	2	15 SD320・721出土土器実測図	31
3 美作国府跡位置図.....	3	16 土器実測図(SK701,SK702)	33
4 S B 1 0 1 断面図.....	14	17 土器実測図(SK702,SE703)	34
5 S A 1 0 8 南北断面図.....	15	18 七器実測図 (SE703,SE704,SK705,SE708)	35
6 S D 5 0 3 北部断面図.....	17	19 土器実測図(SE708,SK709)	36
7 土坑・井戸実測図.....	21	20 軒丸瓦実測図	41
8 S X 6 0 5 出土土器実測図 1	24	21 軒平瓦実測図	42
9 S X 6 0 5 出土土器実測図 2	25	22 丸・平・道具瓦実測図	44
10 S X 6 0 5 出土土器実測図 3	26	23 瓦実測図	45
11 S K 7 0 6 出土土器実測図 1	27	24 木製品実測図	46
12 S K 7 0 6 出土土器実測図 2	28	25 土器内面に残る糸切り痕	47
13 土器実測図(SX707,SD503)	29		

表 目 次

Tab. 1 美作国府跡関連発掘調査一覧表	6
2 土器組成表 1	37
3 土器組成表 2	37
4 軒瓦一覧表	43

図面目次

P L A N.	1 周辺地形図	7 遺構実測図 5 (T11・14・15・26)
	2 発掘調査区域図	8 遺構実測図 6 (T25・30・34)
	3 遺構実測図 1 (T1・2・3・4・5)	9 遺構実測図 7 (T18・33・35)
	4 遺構実測図 2 (T3・6・7・24・28・31)	10 遺構実測図 8 (T9・29)
	5 遺構実測図 3 (T13・19・20・21)	11 遺構実測図 9 (T12・36)
	6 遺構実測図 4 (T10・20・21・23)	

図版目次

P L.	1 T31(空中写真)	P L.	26 構列・建物(SA108・SD102・105,SB601)
	2 遺跡(航空写真)		27 建物・溝(SB101・SD603・604)
	3 構列(SA108)		28 建物(SB101P16・18断割状況)
	4 建物(SB101)		29 建物・井戸(SB101・SX605)
	5 構列・溝(SD102・SA108)		30 溝(SD606・SD309)
	6 構列・溝(SA109・SD105)		31 T33(空中写真)
	7 T6・T7		32 建物(T33全景・SB710)
	8 溝・建物(SD102・SB203)		33 建物(SB710)
	9 T10全景・SD102		34 土坑(SX707・SK706)
	10 T11・12		35 土坑(SK706・701)
	11 構列・溝(SA108・SD320)		36 土坑(SK702・705)
	12 T16全景・土坑(SK310)		37 土坑(SK709・同坑底上器出土状況)
	13 T17全景・土坑(SK316)		38 井戸(SE703・704)
	14 SD309調査状況・T18		39 井戸(SE704木枠・SE708)
	15 T20・21・23・SD317		40 井戸・建物(SE708・SB711南側柱列)
	16 SD320馬鹿骨出土状況・T23		41 溝(T34全景・SD720・721)
	17 建物・溝(SB407北側柱列・T24)		42 溝・構列(T36・SA100P3・P4)
	18 建物(SC502・SB101)		43 道標・石碑(美作国府址道標・国府道辻碑)
	19 建物(T25全景・SB406)		44 小器(SX605)
	20 T26・27全景		45 土器(SK706)
	21 建物(T28,SB101南側柱・庇状造構)		46 小器(SK706・SD503)
	22 建物(SB101P9断割状況)		47 土器(SK701・702・SE703)
	23 溝(SD107・SD503,SD503・SD102)		48 土器・硯(SE708・SK709・陶硯・石硯)
	24 溝(SD503木撻検出状況)		49 軒瓦
	25 建物(T29全景,SB406西側妻柱穴)		50 軒瓦・木製品

I 位置と環境

美作国は、中国山地の脊梁を構成する標高1000m前後の山々と標高500m程の吉備高原との間に開けた盆地帯に位置し、東西80km、南北50kmの広がりをもつ。最大の津山盆地をはじめとするこれらの盆地帯には旭・吉井川の2大河川が貫流し、美作国府跡は津山盆地のほぼ中央部、吉井川流域に所在する(Fig.1)。

津山市内を東に流れる吉井川北岸に発達した市街地の北方には、南下して吉井川と合流する宮川が形成した幅1km程の平地が南北に細長く広がっている。その東側には中国山地から南に派生した、平地との比高40m前後の丘陵群が樹枝状に発達している。西側ではこれと対照的に標高308mに達する神楽尾山塊が南北4km、東西2kmの広がりをみせている。山塊の南東裾には周辺の平地との比高約10mの低丘陵が台地を形成している。台地周辺には平地に続く小谷がいくつかみられるものの、東西幅200m、南北300m程の比較的平坦な広がりをもつ。台地西側に存在する独立丘には總社宮が位置し、台地北端は津山市小原に、大半は總社に属する。この台地の中央部を東西に走る總社宮参道以北の200m四方の範囲が最も良好な平坦面を形成しており、美作国府は、この台地を中心とする範囲に位置する(Fig.2, PLAN.1)。

台地東方の平地は、近年宅地開発が進みつつあるものの、条理地割がなお良好に遺存している。台地北西端部をかすめて中国縦貫自動車道が北東から南西方向に走り、一帯は宅地化が進行しており、国府中心部と推定される台地上は特に著しい。

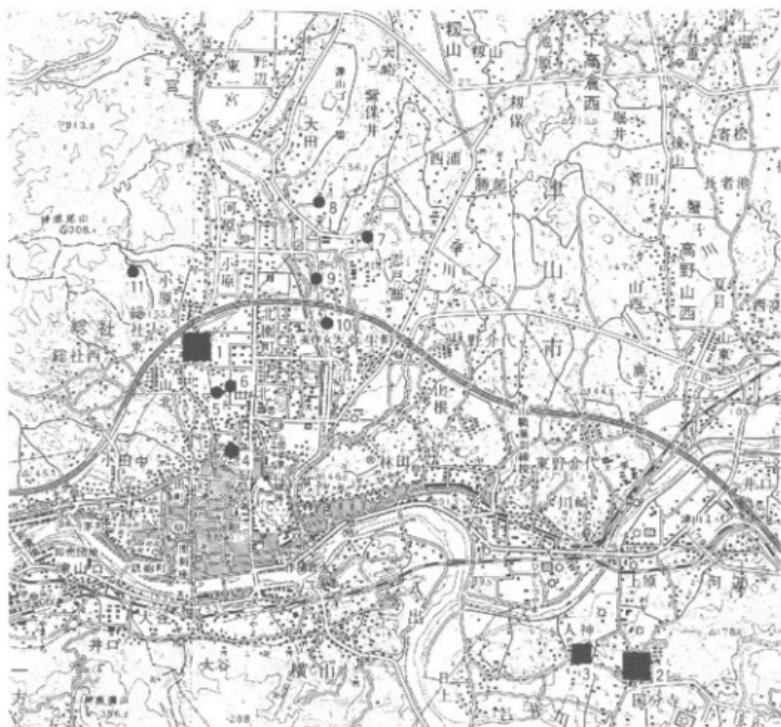
周辺地域には弥生時代Ⅰ期からⅤ期まで継続する一丁田遺跡・高橋谷遺跡(註1)が存在する。今回の美作国府跡の調査においてもⅢ期以降の弥生土器や遺構が検出され、古くから人々の居住のあったことを示している。

古墳時代においては宮川の上流東岸に前半期と考えられる墳長約46mの前方後円墳、上横野小丸山古墳(註2)が存在する。古墳時代後半期においては、上横野小丸山古墳の東方に墳長約25mの帆立貝式墳である大野本塚古墳(註3)が存在するほか、国府の南東に接する丘陵上に、円墳と推定される十六夜山古墳(註4)が所在する。これは美作では大型の円墳のひとつである。国府の位置する宮川流域には、こうした二三の首長墳がみられるものの、周辺にはめだった群小墳の築造は認められない。本地域は、古墳築造の面からみれば市内の他地域とくらべて特に際だった存在であったとはいえない。

奈良時代になり、713(和銅6)年に備前国北方の6郡(英多・勝田・若田・大庭・真鶴)を分割して美作国が設置され、しばらくして国府のほかに国分寺そして国分尼寺が造営される。国分寺跡(註5)は国府の南東約4.8kmの津山市国分寺の台地上に位置する。昭和51(1976)年度から54年度にかけて本委員会が4次にわたる発掘調査を実施し、方2町の寺域と主要伽藍の配置



Fig. 1 位置図



- | | | | |
|------------|-------------|---------------|--------------|
| 1. 美作国府跡 | 4. 十六夜山古墳 | 7. 沼遺跡(弥) | 10. 竹ノ下遺跡(弥) |
| 2. 美作国分寺跡 | 5. 高橋谷遺跡(弥) | 8. 大田十二社遺跡(弥) | 11. 下道山遺跡(弥) |
| 3. 美作国分尼寺跡 | 6. 一丁田遺跡(弥) | 9. 京免遺跡(弥) | |

Fig. 2 美作国府跡周辺遺跡分布図（国土地理院発行1/50000地形図「津山東部・西部」使用）

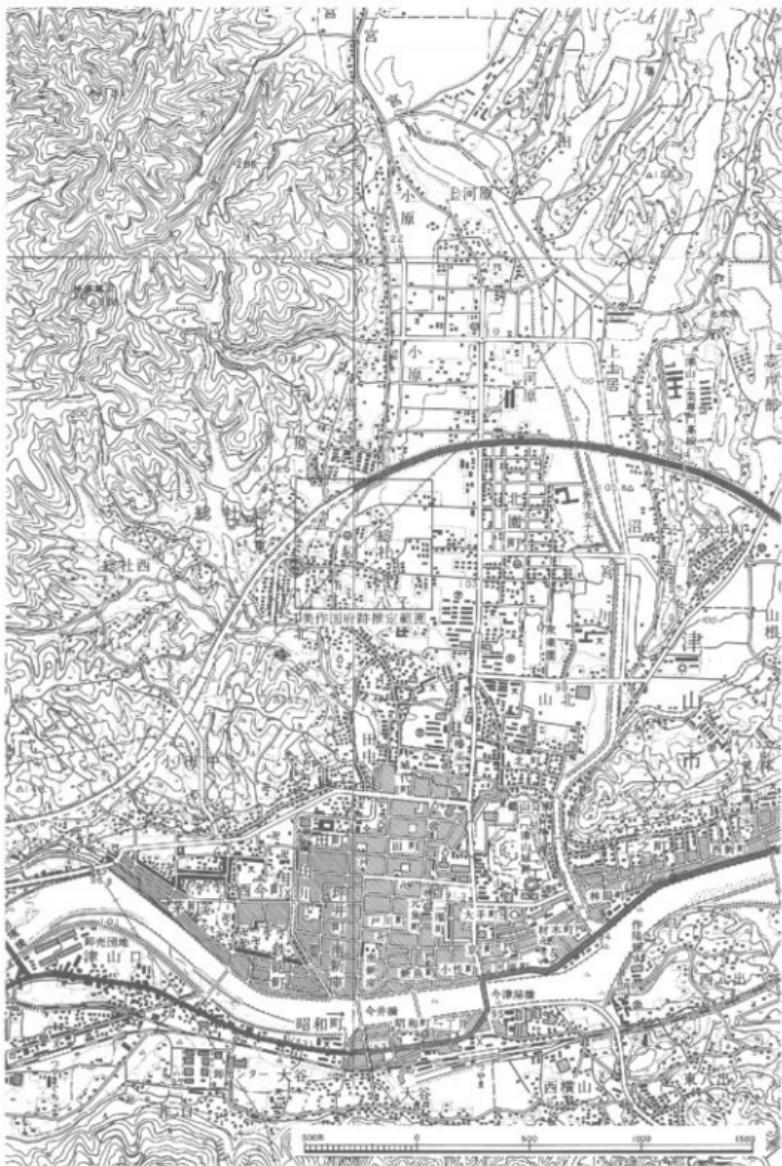


Fig. 3 美作国府跡位置図（国土地理院発行1/25000地形図「津山東部・西部」使用）

を確認した。その後、国分寺の西約300mの地点に所在する国分尼寺跡(註6)の発掘調査を1981年から翌年にかけて3次にわたり実施した。宅地化の進行に伴う調査地点の制約などから伽藍配置等は不明だが方1町の寺域が推定されている。これら国分二寺の発掘調査と出土瓦の検討を通じて、国府他との軒瓦の同範関係がより詳しく判明した。同範関係をもつ主要な瓦は、平城宮第二朝堂院所用瓦である6225型式および6663型式に類似するもので、美作國成立過程におけるひとつの特色として注目された。

美作國においては、大庭・真鶴の2郡および苦田郡については都衙の所在は不明だが、他の3郡については都衙あるいは関連施設と考えられる遺跡が確認されている。久米郡衙と推定されているのが久米郡宮尾所在の宮尾遺跡(註7)である。1971年から1973年までの岡山県教育委員会の発掘調査によって、Ⅰ期からⅣ期にかけての遺跡の変遷がとらえられている。そのうち、Ⅰ期(7世紀末から8世紀初頭)およびⅡ期(8世紀前半から中葉)においては、正殿・脇殿とともに長大な掘立柱建物が「コ」字形の配置をもつ。

勝田郡勝央町所在の勝間田遺跡(註8)からは、1973年に行われた部分的な発掘調査で桁行2間、梁行9間を主体とする掘立柱建物5棟が検出され、勝田郡衙あるいは駅家の可能性が指摘されている。7世紀後半から8世紀にかけての瓦や土器が出土している。同所在の平遺跡(註9)は勝間田遺跡の北方約200mの丘陵上に立地する。発掘された建物群はいずれも小規模で整然とした配置をとらないが、多量にみられる瓦の他に陶硯や「郡」などの文字を記した刻印・墨書き土器など官衙的な遺物の出土から、勝田郡衙の関連施設と想定されている。

英田郡作東町の高本遺跡(註10)は、1973年と1984年の2次の調査により南北200m、東西約140mの範囲におよぶ掘立柱建物の集中が認められた。全面の調査がなされていないので、建物配置の全体像はなお不明だが、「郡」銘をもつ墨書き土器や円面硯の存在から郡衙もしくは関連施設と考えられている。

註

- (1) 植月社介・近藤義郎「津山市山北一丁田遺跡」「津山弥生住居址群の研究－西地区－」津山市 1957
- (2) 津山市教育委員会「上横野小丸山古墳発掘調査報告」「年報津山市弥生の巻1」 1994
- (3) 津山市教育委員会が平成4年度に測量調査を実施。
- (4) 岡山県教育委員会が平成5年に確認調査を実施。
- (5) 津山市教育委員会『美作國分尼寺跡発掘調査報告』 1980
- (6) 津山市教育委員会『美作國分尼寺跡発掘調査報告』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第12集 1983
- (7) 岡山県教育委員会「宮尾遺跡」「中國縱貫自動車道建設に伴う発掘調査2」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告4 1973
- (8) 岡山県教育委員会「勝間田遺跡緊急発掘調査概要」「岡山県埋蔵文化財報告4」 1974
- (9) 岡山県教育委員会「平遺跡」「中國縱貫自動車道建設に伴う発掘調査5」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告8 1975
- (10) 岡山県教育委員会「高本遺跡」「中國縱貫自動車道建設に伴う発掘調査5」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告8 1975
- 岡山県教育委員会「高本遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告61 1985

II 調査の経過

1 従来の知見

美作国府跡の所在地については、津山市街地北方の台地中央部の地籍のひとつ、幸畠（こうばたけ）の「幸」が国府の転訛であるとする地名考証、周辺地域からの瓦などの出土の事実、そして高台からなる地形を根拠として、古くから本地域に比定する考えがあった（註1）。

この考定は、以降の国府城推定の際にねに積極的に評価され、現在まで受け継がれてきているといつてよい。藤岡謙二郎氏は、6町四方からなる具体的な国府城の試案を初めて具体的に示した（註2）が、この範囲には国府台守が北西隅に取り込まれている。この想定案の根拠としては、条理による整然とした方画地割の残存があげられている。しかしながら、氏自身も指摘したように本案はあくまでも暫定的な試案の域をでるものではなかった。その後の府城に関する研究の深化のためには、発掘調査の進展をまつ必要があった。

中国縱貫自動車道の建設に先立ち、1970（昭和45）年から72年にわたって台地北方の一角の発掘調査が岡山県教育委員会の手によって実施された。これが、美作国府跡に発掘の鍵の入った最初である（PLAN1,A）。調査では、井戸から出土した遺物に、国司を構成する官職名のひとつ「少目」が記された墨書き土器が含まれ、同時に掘立柱建物群や築地状遺構などが検出されたことから美作国府跡の存在はより確実なものになったということができる。検出された主要な遺構の方向は、周辺に現存する方画地割の方向と基本的に合致していて、特に「築地状遺構」は、以降の府城考察に影響をあたえることとなった。

一部南北方向に屈曲しながらも東西100m近い延長をもつ「築地状遺構」の評価については、これを国府域にあたる施設と考える立場と、国衙（国庁）城の示すものと考える立場がある。当初の発掘報告（註3）ではこの判断は控えられていたが、後に出版された調査報告補遺編（註4）では、本遺構を国府城を示す施設として評価したと思われる東西4町、南北4ないし5町の府城案が示されている。しかし、近年では本遺構が築地ではなく、道路であった可能性を認める意見もあるよう（註5）、評価は定まっていない。

1976（昭和51）年に津山市教育委員会が調査を実施した高橋谷遺跡は国府南東に該当する地点に所在する。平安末から鎌倉時代にかけての掘立柱建物3棟、幅3~4mの溝などを検出したが、官衙遺構とする積極的な根拠は確認されなかった（PLAN1,B）。

1982（昭和57）年から翌年にかけて同市教委が実施した市道拡幅に伴う発掘調査においては、以上の想定府城の東限にあたる箇所を東西に横切ることになった。この調査では、条理地割りに沿ったと考えられていた府城を示す遺構の検出と、条理地割自体の形成時期を把握すること

を目標とした。その結果、府域を画すると思われる遺構は少なくとも調査地区では全く存在せず、また地割の起源についても現状では鎌倉時代までしか遡れないことが明らかとなり、国府域を画する施設が本来存在しなかった可能性も指摘されるにいたった(註6)。

以上の他の小規模な確認調査も含めれば合計12回に達する美作国府跡関連調査がこれまで実施されてきた。これら一連の諸調査は、概して周辺部のものが多く、国府中心部の範囲や構造を明らかにするにはいたらなかった。

調査年度	調査次数	調査主体	原因	備考
昭和45年	第1次	岡山県教育委員会	中国縦貫自動車道建設	試掘調査
昭和45年	第2次	タ	タ	タ
昭和46年	第3次	タ	タ	本調査(註7)
昭和49年		津山市教育委員会	保育園建設	試掘調査(註8)
昭和51年		津山市教育委員会	中学校建設	高橋谷遺跡(註9)
昭和56年		津山市教育委員会	民間開発	(註10)
昭和57年		岡山県教育委員会	学校施設建設	山北一丁田遺跡(註11)
昭和57年	第1次	津山市教育委員会	市道改良工事	(註12)
昭和57年	第2次	タ	タ	
昭和58年	第3次	タ	タ	
昭和60年	第1次	津山市教育委員会	民間開発	樋ノ口遺跡(註13)
昭和61年	第2次	タ	タ	タ

Tab. 1 美作国府跡関連発掘調査一覧表

2 調査に至る経過

前述した美作国府跡一帯の急激な宅地化の進行にたいし、津山市教育委員会では今後の保存に向けた基本資料を得ることを目的とし、残された発掘可能な地区において緊急に確認調査を実施することとした。さいわい地元地権者の同意も得られたため、国庫補助を得て昭和61年度から調査を開始した。当初3年計画で調査に着手したが、調査可能な区域が限られるいっぽう、遺構の保存状態は予想外に良好であり、追加調査の必要が生じたため計画を延長して、7箇年にわたる発掘調査を実施した。調査地地番と調査にあたった体制は下記のとおりである。

62年度 第2次調査 総社24番地、33番地-1、34番地-1、59番地-1、115番地-1
63年度 第3次調査 総社36番地-3、44番地-1、49番地-1、59番地-1、
平成元年度 第4次調査 総社33番地-1、34番地-1、44番地-1、59番地-1
2年度 第5次調査 総社33番地-1、34番地-1、34番地-2、
3年度 第6次調査 総社34番地-1
4年度 第7次調査 総社36番地-3、44番地-1、山北3番地-10

調査主体 津市教育委員会

教育長 福島祐一(1-4次) 萩原賢二(4-6次) 森定貞雄(7次)
藤原修己(7次)

調査担当 津市教育委員会文化課

事務担当 社会教育課長 内田康雄 須江尚志 日下泰洋 森元弘之 榎山
三千穂

文化係長 森元弘之 榎山三千穂

文化財センター主幹 神田久遠

文化財センター所長 須江尚志

文化財センター次長 中山俊紀

発掘担当 安川豊史 小郷利幸 平岡正宏

整理担当 安川豊史 家元博子 岩本えり子 野上恭子 赤坂博子 岡田美
年子 高山敏乃 中谷幸子

調査作業員 宮本清次郎 浅村唯志 井汲 茂 岡本鶴雄 梶岡辰男 梶原良雄 加藤文平
重満岩男 高山安正 田外敦郎 中上達也 中野健一 永谷民次郎 平尾平八
郎 福田昌夫 福原勝巳 福原春夫 光井博文 河本久子 末広ミエコ 竹内
悦子 竹内里子 大郷貴美子 高谷久枝 日笠あさ代 松本富子

地元協力者

小川隆平 小川常一 小林正夫 小林敏隆 竹内悦子 長尾達夫 雜波秋夫
萬代敦士 高橋千歳 渡部アグリ

発掘調査の実施にあたっては、次の先生方の指導を受けた。

奈良国立文化財研究所 山中敏史、岡山県教育委員会 河本 清、岡山県文化財保護審議会委
員 錆木義昌(第1次-6次)・近藤義郎・水内昌康、岡山大学 吉田 昌・狩野 久

報告書の作成にあたり、奈良国立文化財研究所 光谷拓実氏に年輪年代測定を依頼したほか、
同研究所 西口寿生氏に出土土器について教示いただいた。

3 調査経過

昭和61年度から平成4年度まで、年度により調査面積の差はあっても基本的には継続して発掘調査を実施した。この間、調査地区を含む一帯の500分の1地形図を、津山市が作成済みであった市道管理用地図に追加・補正して作成したほか、平成2年度には前年度までの調査成果についての概要報告書を刊行した。以下、年度別に調査経過を述べる。

第1次調査 昭和61年12月4日から昭和62年3月31日まで実施。幅3mのトレンチ調査を主体とし、必要に応じて拡張する方法をとった。調査箇所はT1からT7までの7箇所で、調査面積226.4m²。調査区の名称は1から始まる通し番号を付すこととし、遺構番号は遺構の種類を示すアルファベット2文字に続けて、調査次数を百の位にとる年度毎に連続した数字で表すこととした。したがって、第1次調査では101から、第2次調査では201からそれぞれ遺構番号が開始することとなる。

調査予定地周辺に国土座標にもとづく測量基準点を設置し、南北方向に最初のトレンチ(T1)を設定した。T1の北端において東西方向に延びる溝(SD102)と、その南側に平行する東西横列(SA108)を検出した。さらにその13.5m南に大きな柱穴をもつ東西建物(SB101)を確認したほか、トレンチ南端付近でこれらの遺構とは方位を異にする南北の横列(SA109)を検出した。SB101の東西の広がりをつかむため、T1東西にT2・T3を設定しT2で建物東端を確認することができたが、T3内では西端を確認することができなかっただけで、この西側にT6を設置し、ここで建物の南西隅柱穴を検出して全形を確認することができた。その結果、SB101は梁行2間、桁行7間で南側に2列の庇状施設が伴うことが判った。

さらに、SD102とSA108の広がりの一端をつかむためT1の西方にT7を設定して、ここでも両遺構の存在を確かめることができたほか、SA108を追求するT1の拡張区としてT4・T5を調査した。

第2次調査 昭和62年12月16日から昭和63年3月31日まで実施。調査箇所はT8からT12までの5箇所で、調査面積219.3m²。

第1次調査で検出した建物SB101周辺の遺構配置をさぐるため、南方に南北方向のT8を設定したが、ここには国府関連遺構は存在しないことが判明した。また、南西のT9では新たに建物SB203の一部を検出したが、この建物方位はSB101とは異なっており、SB101と同時期の遺構は周辺には存在しないことが明確となった。このためSB101周辺の発掘をいったん中止し、SD102およびSA108のT7より西方の追求に調査の主眼を置くこととした。T7の西約40mに設定したT10でSA102とSA108を検出したが、さらに65m西のT11ではいずれの遺構も検出できなかった。いっぽう国府推定地の南方の状況をさぐるためにT12を調査した。この地点は、總社宮のお旅所として以前から耕作を免れていた地区であった。ここでは1.5mに達する中世の土盛りの下に国府期の南

北溝SD214を検出したが、調査面積の制約から性格については明らかにできなかった。

第3次調査 昭和63年11月24日から平成元年3月31日まで実施。調査箇所はT13からT19までの7箇所。調査面積308.1m²。

本調査ではSA108とSD102の西端の確認を目標とし、昨年調査したT10とT11との間にT13と、その西にT14を南北方向に設定した。T13では東西溝とその南に沿った柱穴列を検出した。これらはそれぞれSD102とSA108の延長と思われたが、溝の位置はSD102の延長線よりもやや南に寄っているためこれをSD320と呼称しSD102と区別することとした。また、SA108の柱穴列はちょうどトレンチの中央で南に折曲がっていて、ここが北西部隅である可能性とともに、柱筋を同じくする南北棟建物の可能性も考えられ、この問題は未解決のまま残された。T14ではSD320の延長を確認した。

T13の南西に設定したT15では南北の柱穴列と、やや東偏する南北溝SD309を検出した。SD309は出土土器からSA108やSB101などに先行する国府関連遺構と考えられた。このSD309はT15の北方に設定したT17でも検出され、さらに南北に伸びていると予想された。いっぽう、T15の柱穴列は現状で7間あるが、北端のみの確認にとどまり今回の調査では全体の確認にはいたらなかった。T15の柱穴列の西方を拡張し、さらにその西にT16を設定したが、この地点では国府関連遺構は全く検出されなかった。

T10の南方約50mの国府台寺南の地点に設定した南北トレンチT18では国府期の可能性のあるいくつかの柱穴を検出したが、調査面積の制約もあり、建物などを復元できるまでにはいたらなかった。

なお、T17から弥生時代IV期の井戸状土坑SK316を、T15の西端でも同時期の土坑を検出した。

第4次調査 平成元年11月27日から平成2年3月31日まで実施。調査箇所はT20からT26までの7箇所で、調査面積は256.5m²。

前年度までの調査で検出された国府関連遺構は、出土遺物と方位そして遺構の切り合い関係から上層下層の2者に分けられることが判明してきた。前回に引き続き上層に属するSD102とSA108の西端の確認のため、T10とT13との間にT20・21を設定した。その結果、SA108は前年度検出したT13の位置で南に折曲があることが確認された。

前回検出した南北柱穴列が南北棟の一部であったことをT22とT26で確認した。

SB101の南方の様子をさぐるために約50m南の地点に南北トレンチT25を設定した。ここで東西建物SB406を発見した。南北の一部を押さえただけで、東西の正確な規模は不明だが付属施設や柱間寸法など、SB101とうりふたつである。ただSB406の場合、北側に庇状施設をもつ点がSB101と大きく異なる点であり、この両建物がSD102およびSA108で囲まれた区画の中で、かなりの空間を間に南北に相対して位置する構図が浮かび上がってきた。

その他にT24でSB101と方位を異にして切り合う下層柱穴列を調査した。この柱穴列は南北

1間、ほぼ東西方向に延びるものだが、性格は不明であった。またT24南端で弥生時代V期の長方形住居状遺構1棟を検出した。

第5次調査 平成2年12月20日から平成3年3月31日まで実施。調査箇所はT28からT30までの3箇所で、調査面積は150.0m²。

前回、T24で調査した下層柱穴列の東側への広がりを確認するためにT28を設定した。その結果、南北1間、東西7間以上の東西柱列は、T28の西部南端で北方に直角に折れ曲がって8間分延びることが判明した。これを回廊状遺構SC502と命名した。ただし、SC502の東側の南北柱筋北方には柱列がさらに北に延びているものの、SC502との柱間間隔が広く、西側柱穴列が平行して延びていないことから、SC502北方には別の南北棟の存在が予想された。上層遺構ではSB101の排水溝とみられるSD107から北方に延びた排水溝SD503を検出した。SD503はSA108を横切りSD102に達する。

SB203の東端を確認して建物規模を把握するためにT29を設定した。SB203は、南側に庇をもつ東西建物で、第2次調査時にはT9の東方にかなり広がっているものと思われたが、本調査区ではSB203の続きと思われる遺構は存在しなかった。本地点が特に削平を受けた様相は認められないので、SB203はT29の西側にとどまるものと判断された。その場合、東西規模は3間の可能性が高いと思われる。

前年度に発見した上層遺構SB406は、その南北の柱列の一部を確認しただけで、東西の規模と位置は不明であった。しかしながら、柱穴の規模や北側の庇状の付属施設の形状がSB101と酷似することから両者の南北柱列が通っている可能性が高いと考えられた。その場合、SB406の東側はT25隣接の駐車場から既存建物の下に延びていることが予想されたため、西側妻柱の想定される僅かな空間をねらってT30を設定した。ここでは予想どおり西側妻柱の西半分を検出することができた。東半分は既設の水路によって切られていた。

本調査の結果、SB406の南北および西端の正確な規模と位置が判明した。すなわち、SB406とSB101の西側柱筋は一直線につながっていて、SA108に直交する。

以上の調査と併行し、第4次までの調査結果について概要報告書を刊行した。

第6次調査 平成3年11月16日から平成4年3月31日まで実施。調査箇所はT31の1箇所で、調査面積270.0m²。

第5次調査の際、T28で追跡した下層遺構SC502は、西側の柱筋が調査区の西端に半分かかる状態で、なおその西側にも柱列が存在する可能性があった。いっぽうで、SC502の性格は一定の空間を区画するものであると考えられたため、区画内の様相を知るためにT28の西側隣接地にT31を設定した。

T31からはSC502の続きと思われる柱穴列は検出されず、本遺構はこれまでに認められており、1間幅の回廊状を呈する長大な施設であることが確認された。また、SC502の北方

に予想された南北建物SB602は、桁行3間、梁行3間以上で調査区の北方に延びていることが判明した。

SB602とSC502の東側柱筋は一直線に通っていて、両遺構あわせて西方地区を区画していたものであったことが再確認された。T31の大部分を占めるこの区画内部には下層期の建物は存在せず、空間であった。ただしSB101の西側柱に先行する井戸状遺構SX605を検出した。上層遺構では、SB101とSA108の間に桁行2間、梁行4間以上の東西棟SB601を検出した。また、SB101北側の東西排水溝SD107に続く南北溝SD603およびSD604を検出し、SB101の周辺施設が予想以上に複雑であることが理解された。このことと関連して、今回実施したSB101の柱穴の断面によって、2回の建替があって、最後に礎石建物に変化していることを確認した。

第7次調査 平成4年10月19日から平成5年3月31日まで実施。調査箇所はT32からT34までの3箇所で、調査面積200.0m²。

前年度までの調査で、SD102およびSA108で調べられた空間中には、基本的にSB101とSB406の2棟の東西棟が南北に向かい合って位置することが判明している。両建物間の距離は150尺で規格性がうかがえる。両者の間の東西中軸線を想定した場合、区画西端付近では南北建物SB407の南辺近くを通ることとなる。このため、SB407の南方の状況を探るためにT32を設定した。区画内では、第3次調査の際にT18で検出した柱穴等の性格をつかむためにこの地点を広く調査することとし、T33を設定した。また、北端と西端が確認されている区画の東側の広がりを探るため、T34を設定した。

T32では調査区北方で国府期のものと考えられる東西に並んだ2柱穴を検出したが、建物ではなく横列の一部の可能性がある。この柱穴に先行するSD309がある。

T33では上層遺構SB711、SA712、下層建物SB710を検出した。その他にSB711・SA712に先行する土坑SK706、SX707を検出したが、SB710との関係は不明である。国府以外の遺構としては土坑4、井戸3がある。

T34からは東西溝SD720・721を検出した。SD720はSD102の続きと考えら、SD721は後にそれを掘り直したものである。このことから、溝は本地点まで延びているものの、SA108はT34までは達していなかったと考えられ、上層区画の東西規模について一定の知見を得ることができた。以上をもって、7次におよぶ総合調査を終了した。

なお、これら一連の調査に併行して、補助調査(T35)および開発に伴う緊急発掘調査(T27・T36)を周辺で実施した。

註

- (1) 津市社社南幸畠所在の国府台寺境内に現存する1881年(明治14)10月建立の「国府遺址碑」に矢吹正

則らによる美作国府跡探の様子が刻まれている。なお、国府中心部に現存する国府台寺は、もと正觀寺が1885(明治18)年に移転してきたものである。

- (2) 藤岡謙二郎『国府』吉川弘文館 1996
- (3) 岡山県教育委員会「美作国府」「中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査3」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告6 1975
- (4) 岡山県教育委員会「美作国府」「中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査(補遺編)」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告24 1978
- (5) 岡田 博「官衙」「吉備の考古学的研究(下)」山陽新聞社 1992
- (6) 津市教育委員会「美作国府跡発掘調査報告—総社・小原線道路改良工事に伴う発掘調査—」津市埋蔵文化財発掘調査報告第15集 1984
- (7) 訂3 文獻、PLAN1,A
- (8) 溝状遺構を検出、須恵器・墨書き土器等が出土。
- (9) PLAN1,B
- (10) PLAN1,C
- (11) 岡山県教育委員会「岡山県立津山工業高等学校プール建設に伴う山北一丁田関連遺跡の調査」「岡山県埋蔵文化財報告13」 1983
PLAN1,D
- (12) 訂6 文獻
- (13) 津市教育委員会「桶ノ口遺跡」津市埋蔵文化財発掘調査報告第20集 1986

III 遺 跡

1 遺構の概要

調査地点は、東にのびたほぼ平坦な台地上にあり、西側を除く3方にゆるやかに傾斜している。ほとんどすべての調査区では、遺構面は水田造成等による削平を受けていて、T1SB101での所見では国府期遺構削平の深度は50cm近くに及ぶ。したがって、おおくの場合は現在の水田土壤を除くと直ちに各時期の遺構が現れる。遺構の存在する基盤層は、台地表層を形成する黄色粘質土層からなり、これまでのところ無遺物層と思われる。ただし、南方に行くにしたがってこの黄色粘質土層上に黒色土層（黒ボク）の堆積が認められる。遺構面の削平に伴い、遺物の出土も溝や土坑といった遺構からに限られ、全体として遺物量は多くない。

現在までの調査で検出した遺構は、弥生時代、奈良—平安時代、平安末ないし鎌倉時代以降に属する3者が認められた。平安末以降のものはそれぞれのトレンチで検出された小柱穴や土坑、井戸があるが、現状ではこれらには官衙的な様相は認められない。

調査区は、台地上の東西260m、南北130mの範囲に及ぶが、官衙に関連した遺構が検出されたのはその中央部、東西110m程の範囲であった。T11・14・27といった県教委調査地区(PLAN1-A)との中間地区では中世から近世にかけての遺構だけで、国府期の遺物もほとんどみられない。

ここでは、まず国府関連遺構を説明し、次にそれ以外の遺構を時代順に述べる。前述したように国府関連遺構は新旧両者に大別され、それぞれ上層遺構群、下層遺構群と呼ぶ。ただし、実際の調査においては両者は同一遺構検出面において、切合関係で認識されるもので、両者の間に間層をもつものではない。まず上層の遺構群、次に下層遺構群の順序で説明する。

2 上層遺構

上層遺構群の方位は国土座標に対し、やや東偏していて、東西塙SA108の示す北方位は国土座標との間でN-1°58'5"-Eの偏倚角をもつ。その他の遺構もこれとほぼ同一の方位を示している。

A 建 物

S B 1 0 1 (PLAN3-4, PL.4-21-22-28-29, Fig4) SA108の南方に位置する桁行2間、梁行7間の東西棟で瓦葺きである。桁行、梁行とも2.7m(9尺)等間で、南側に庇状の施設が2列認められる。南側柱からの間隔は1.35m(4.5尺)および2.7m(9尺)である。

2回の建替が認められ、最後の建替で礎石建物となる。東側柱筋の断割りの際の所見では、最初の建替の時に柱芯の位置をわずかに西方にずらしている。庇状施設の柱芯位置は当初の柱筋に連なるので、これらはいずれも当初の段階に属すると考えられる。側柱の掘形は方形に近

く大きいが、やや小振りの円形掘形の床束をもつ。西から2列目の北側柱穴(P16)には1回目の建替の際に用いられたとみられるヒノキの柱根が遺存していた。幅37cm、高さ49cmをはかる。年輪年代の測定を試みたが、中心部はかなり腐食が進行していたため良好な結果は得られなかつた。

S B 4 0 6 (PLAN8, PL.19) SB101の南方に離れて位置する桁行2間(5.4m, 9尺等間)の東西棟。東西規模は不明だが、T30で検出した西側柱の位置はSB101の西側柱筋方向と一致し、SB101同様7間と思われる。形態・構造・寸法ともSB101に酷似する。異なるのは庇状施設が北側につくことである。

S B 4 0 7 (PLAN7, PL.17) SA108Aで区画された地区の西側外方に所在する南北棟。桁行7間、梁行2間で梁行は2.55m(8.5尺)等間だが、桁行は北から2.7m(9尺)-2.5m(8.5尺)-2.5m(8.5尺)-2.5m(8.5尺)-2.5m(8.5尺)-2.7m(9尺)-2.7m(9尺)である。北と西の側柱を確認したが南東柱穴の一部は未掘である。

S B 6 0 1 (PLAN4, PL.1) SB101北西の区画内に位置する東西棟。桁行4間(9尺等間)以上、梁行2間(4.8m, 8尺等間)で建物西部は未調査地に延びる。1回の建替が認められる。

S B 7 1 1 (PLAN9, PL.31) T33で検出した桁行5間(2.7m, 9尺等間)以上、梁行2間(5.7m,

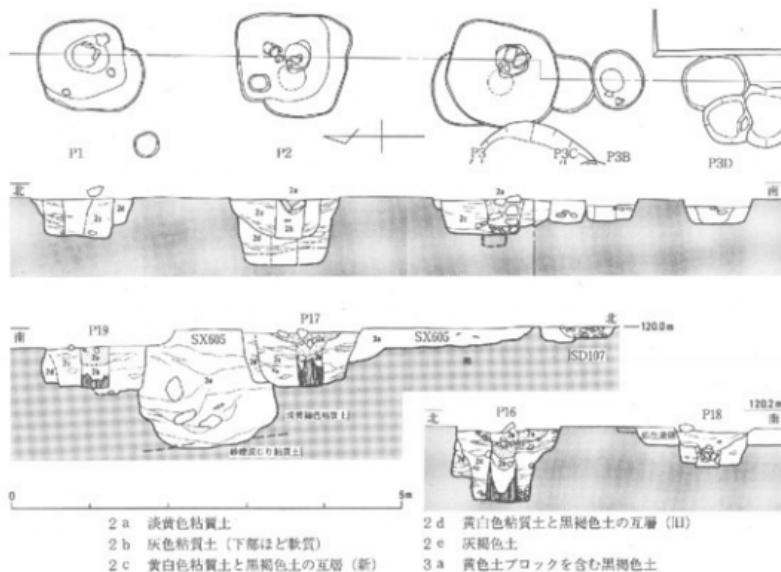


Fig. 4 S B 1 0 1 断面図(上段 東側柱列、中段 西側柱列)

9.5尺等間?)と推定される東西棟。南北両面に庇をもち、庇の出はいずれも3.6m(12尺)である。

B 構列

S A 1 0 8 (PLAN3-6, PL.3, Fig.5) T4からT13におよぶ東西塀で延長87.4mに達するが、東端は未確認である。西端はT13の地点で南に折曲がる。南北長は確認できていないが、SB406の存在するT25をはじめとする東側調査区の所見から約80m以上になるものと考えられる。

SA108はT13の南北柱列(SA108A)の他に、T20の西端でも南に折曲がついて対応する南方の1穴をT21東端で検出した(SA108B)。これら2列の南北塀の関係については、SD317との切り合いから、後に縮少したものと考えられる。柱穴の比較的遺存状態の良いT4・5付近では、1回の建替の後に抜取られた様子が観察されたほか、付近にはこの塀に使用されたとみられる瓦が崩落した状況で出土した(PL.5)。最後には築地塀に建て替えられたものと思われる。柱間寸法は9尺(2.7m)等間。

T1付近では、SA108およびSD102の設置に先立つ造成が行われていて、造成土中から須恵器片が出土した。

S A 7 1 2 (PLAN9, PL.31) 東西3間以上の西端で北に3間延びたL字を呈する柱列でSB711と重複するが先後関係は不明。柱間隔は6.5尺ないし7尺。

S A 1 0 0 4 (PLAN11, PL.42) T36で検出された東西柱列で柱間は2.65m(9尺)の等間とみられる。調査範囲の制約から建物であった可能性も残されているが、SD1001の南に位置し、これと一体となって南方地区を区画したものであろう。その場合、T12で検出されたSD214および北壁中央部の柱穴につながる可能性も考えられる。

C 溝

S D 1 0 2 (PLAN3-4-6, PL.5-8) SA108の北側外方を巡る東西溝で、西に行くほど後世の削平の度合いが大きい。残存状態の比較的良いT1の箇所で幅0.9m、深さは0.4mをはかる。SA108T20東端で南に折曲がりSD317となって南下する。北東隅付近に西から延びた東西溝SD320が取付く。現長は77mに達する。SD317とSD320はSA108の付替えに伴い新しく付設されたもので、本来はそのまま西に延びていたと考えているが、北西付近は残存状態が良くない。



Fig. 5 SA 108 南北断面図(T1東壁)

溝中からは奈良時代—平安前期にかけての瓦や土器が出土した。SA108とSD102の間はなだらかな斜面で一部犬走り状の平坦面が認められる。

S D 1 0 5 (PLAN3·4,PL.6) SA108の南側2-3mの所に位置する東西溝SA108の雨落溝とみられる。T4からT31にかけて認められる。T10およびT20東壁近くのSD206につながる可能性があるが、それ以西には存在しない。西方ほど後世の削平が強いことによる。溝内からは拳大の円礫や瓦が出土している。

S D 1 0 7 (PLAN3·4,PL.23) SB101北側の幅0.6m、深さ0.15mの東西排水溝。SB101の北側柱列から3.5m隔たり、雨落溝ではないと考えられる。東側の様子は不明だが、西側では南北溝SD603·604につながるほか、SB101の中軸線上で、北へ延びる排水溝SD503に連絡する。

S D 2 1 4 (PLAN11,PL.10) T12で検出した幅1.1m、深さ0.2mの南北溝。後述するSD1001につながる可能性もあるが、方位はやや東に振れている。

S D 3 1 7 (PLAN5,PL.15) SD102がT20の西端で南に折れ曲がり南方に延びた溝で、幅0.8m、深さ0.3mをはかる。T21の北東壁際でSA108の1柱穴を破壊している。このことから、本溝は南北衝列SA108Bに伴うものであり、SA108の区画の西側は後に縮小されたことが判明した。

S D 3 2 0 (PLAN5·7,PL.15·16) T14·13·21で検出され、SD317の北部につながる幅0.8m、深さ0.15mの東西溝。SD102に比べ、SA108に接近しているほか、やや蛇行気味である。SD317が上層区画の縮小に伴って付設されたものであることから、この溝も新しく付けられたものと判断される。上層の区画が造られた当初は、これに変わるSD102が西限は不明だが存在していたものと思われる。T21では溝内から馬の下頸骨が出土した。

S D 5 0 3 (PLAN4,PL.23·24,Fig.6) SD107から北に延びてSD102に至る幅0.8m、深さ0.5mの南北溝。SB101周辺地区の雨水を集めてSD102に注ぐ排水溝である。SA108の建替に伴う1柱穴を切っている。SA108を横切る長さ3m程の範囲には、溝の上半に特に念入りに暗渠状の土盛りをした痕跡が認められる。この土盛りは、SA108が最終的に築地壠に造り替えられた時に形成されたものとみられ、したがってSD503の形成時期もSA108の最終段階に特定することができる。このことを証明するように、本溝北端は、SD102がわずかに埋まった段階に形成されている。SA108以北の溝底から2枚の板材が出土した。腐朽が進んでいて元の形状は不明だが、木橋と考えられる。溝中からは、奈良時代から平安時代にかけての土器と、軒瓦を含む瓦が出土した。軒瓦はSB101に接近した南寄りに多く出土した。

S D 6 0 3 (PLAN4,PL.27) SB101の西側に位置する幅0.9mの南北溝。SD107西端よりさらに北方に延びるが、現存する深さは約0.1mにすぎず、後世の削平のため遺存状態が悪い。溝底には円礫が充満し、瓦片などが出土した。

S D 6 0 4 (PLAN4,PL.27) SD603の東側の南北溝。SD603同様、耕作に伴う現代の溝によってかなりの部分が破壊されている。溝北端のSD107との連結部では幅0.85m、深さ0.1mを

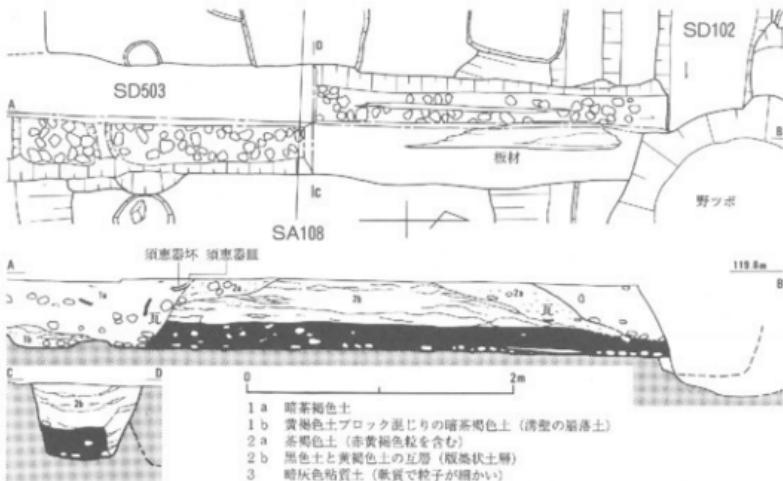


Fig. 6 SD 503 北部断面図(T28)

はかる。溝には円礫が充満していた。

SD 720 (PLAN8, PL.41) T34で検出した東西溝。幅0.9m、深さ0.4mをはかる。位置と形状からみて、SD102の延長と考えられる。遺物は出土しなかった。

SD 721 (PLAN8, PL.41) SD720の北方に位置する東西溝。SD720が埋没したあと新たに穿たれたもので、溝底から平安時代中期とみられる土器が出土した。現状で深さ1.4mをはかる。北側の立ち上がりは比較的なだらかで、断面形は大きく開いたV字を呈する。トレーニング北壁中に延びていて、溝幅の推定値は4mである。埋土中には砂層からなる間層をはさみ、埋没しつつもかなりの水流があったことをうかがわせる。埋土中からは平安末ないし鎌倉時代の土器が少量出土している。

SD 1001 (PLAN11, PL.42) SA1004の北方に位置する東西溝。現状で幅1.2m、深さ0.5mをはかるが、北側の立ち上がりは未掘区に存在するため、本来の幅は不明である。

D 土 坑

S X 210 (PLAN6) T10およびT20南端に広がる不整形の土坑。T23にも及ぶ。深さ0.6m。坑底近くの下層には地山の黄白色粘質土ブロック混じりの黒褐色土が、上層には木炭粒・片を含む黒褐色土が堆積する。坑内からは少量の須恵器片と縄叩き目の平瓦数点が出土した。粘土採掘坑の可能性もあるが、次のSK706と同等のものであった可能性が高い。

S K 706 (PLAN9, PL.31-34-35) T33の下層建物SB710中央に位置する溝状土坑。東西4.2m、南北1.5m、深さ0.2mの溝状を呈し、東側未掘区に延びている。坑内には焼土とともに

に奈良時代の須恵器、土師器、製塙土器が多く出土した。遺物の中には少量の瓦片があり、焼土中にはスサ入りの埴土も含まれる。

S X 7 0 7 (PLAN9,PL.31·34) SK706の西に隣接する不整形の皿状土坑。南北9m、東西5m、深さ0.3mをはかる。SK706とともに上層建物SB711に先行する。焼土、土器、少量の瓦が出土した。SK706とほぼ同年代とみられる。

以上の土坑群は造構の性格上、方位を主な特徴とする上層造構に該当するかどうかが問題となる。ここでは少量とはいえ瓦が出土していることから判断した。これまでに知られている下層造構からは瓦の出土はない。

3 下層造構

下層造構群のもつ方位は、上層にくらべ真北からの東偏の度合いが大きい。たとえばSA109の示す方位は、座標北とN-8°35'1"-Eの偏角をもつ。これらの造構群は、やはり同一方位をとっている。

A 建 物

S B 2 0 3 (PLAN10,PL.8) 南面庇をもつ桁行3間(4.8m)、梁行2間(3.46m)以上の建物。庇の出は約1.6m。西側を確認しただけで東西規模は不明。このため柱間寸法については明らかではないが、やや不揃いである。

S C 5 0 2 (PLAN4,PL.7·18) 南北1間、東西7間以上の建物造構。東端で折れ曲がって北に8間分(15.7m)延びる。直角に曲がった内外2列の柱列からなり、細長い東西棟と南北棟に復元することも可能だが、内外の柱列の位置は微妙にずれており、ここでは回廊状建物としてあつかう。東側2柱列間の寸法は2.4m(8尺)前後、南側2柱列間の寸法は2-1.7mと不揃いである。南側東西柱列の柱間寸法は、西から5間目までは1.94m(6.5尺)均等、以東はやや広がるようである。

S B 6 0 2 (PLAN4) SC502の北方に位置する桁行3間(4.5m)、梁行3間(5.9-6.3m)以上の南北建物。南側柱の3穴を検出したが、柱間は不揃いである。東側柱列の方向は、SC502の東側柱列に通っている。

S B 7 1 0 (PLAN9,PL.31·32·33) T33の北東隅に位置する東西建物。桁行2間(6.96m)、梁行2間(3.5m)以上で、東の木掘区に延びる。南北両面に庇をもつが、身舎の西側妻柱は検出できなかった。SK706によって破壊された可能性もある。柱間寸法は等間隔。

B 構 列

S A 1 0 9 (PLAN3,PL.6) T1南端からT2にかけて検出した南北横列。延長は27m以上に達し、南北両端は確認できていない。当初、中世に属する可能性も考えられたが、後の検討によって方位と掘形埋土の特徴から下層造構のものであったことが判明した。柱間は1.79m(6尺)

均等とみられる。

C 溝

S D 3 0 9 (PLAN7, PL.14・17) 幅1.4m深さ0.2mの南北溝で、SB407に先行する。T17からT32までの延長40mを確認したが、なお南北両端は明らかでない。埋土中から少量の土器が出土した。

D 井 戸

S X 6 0 5 (PLAN4, PL.29) SC502・SB602で囲まれた区域内の南東部に位置する井戸状遺構で、SB101に先行する。上層遺構の保護のため完掘していない。南北2m、東西1.5m以上、深さ1.5mの方形土坑を南西の隅として、西と北側に深さ0.3m程度の浅い土坑が広がる。この外側土坑の底はほぼ平坦だが、西側には一段低い幅0.8mの溝状落ち込みがみられる。方形土坑は淡黄色粘質土に掘り込まれているが、底近くは砂礫混じりに変化していく若干の湧水がある。底から木片が出土したが、木棒は存在しない。両土坑とも堆土上に基本的な変化はみられないで一体の施設とみられる。いずれの坑内からも7世紀後半から奈良時代にかけての土器が出土したが、瓦はみられない。

4 国府期以外の遺構

A 弥生時代

S H 4 0 4 (PLAN4, PL.18) T24南端に検出した住居状遺構。幅3.1m、長さ2.8m以上の長方形を呈すると考えられる。一部を現代の耕作溝によって破壊されている。後の削平により、壁の立ち上がりは0.1m程度である。床面中央部に0.4m×0.3mの焼土面がみられるが、柱穴は存在しない。壁溝中から小片の土器が出土した。弥生V期に属すると思われる。

S K 3 1 0 (PL.12) T15の東西調査区の南西端で検出した東西2m以上、南北1.5m以上、深さ0.6mの不整形な土坑。一部が調査区外に広がるが、主要部分を発掘した。器台、壺などの弥生IV期の土器が出土した。

S K 3 1 6 (PL.13) T17東端で検出した南北2.5m、東西推定2.2m、深さ1.3mをはかる不整円形の素掘り井戸。弥生IV期の壺などの土器を出土した。底から長さ154cm、幅10.4cm、厚さ6mmの板材1枚が出土した。この板材には直径2-3mmの2個1対の孔が5箇所、単独孔が1箇所に穿たれている。

S D 6 0 6 (PLAN, PL.30) T31中央北寄りの東壁近くで検出した長さ4.6m以上、幅0.4m、深さ0.3mの溝。周辺には同時期の遺構はなく、単独で存在する。弥生III期の土器が出土した。

弥生時代に属する遺構としては、以上その他にT1のSB101南東端やその南にも溝状遺構などが検出されているが、これらは国府遺構の保護のために確認にとどめている。また、T9のSB203検出時に周辺から弥生III期の土器が出土した。

B 古代末～中世

S K 7 0 1 (PLAN9, PL.31・35, Fig.7) T33北端近くの土坑。1.4m×1.25mの円形掘形で、深さ0.3m、坑底は平坦である。多くの円碟とともに多量の須恵器・土師器・中国製磁器および緑釉陶器小片1点、軒平瓦、軒丸瓦各1点が出土した。

S K 7 0 2 (PLAN9, PL.31・36, Fig.7) SK701の南に位置する直径1.2mの円形掘形をもつ深さ0.95mの土坑。SX707・SB711を切って造られている。自然碟とともに多量の須恵器・土師器・中国製磁器の他、緑釉陶器小片、石庖丁未製品、椀形漆各1点が出土した。

S K 7 0 5 (PLAN9, PL.31・36) T33北東部で検出した直径1.7m、深さ0.5mの土坑。SK706およびSB711を切っている。若干量の須恵器・土師器・中国製磁器の他に軒平瓦1点が出土した。

S K 7 0 9 (PLAN9, PL.31・37, Fig.7) SK702の東隣に位置する直径1.4m、深さ0.8mの土坑。第3次調査の際に東側半分を、残り半分を第7次調査で調査した。多量の須恵器・土師器・中国製磁器の他に瓦器が出土した。

S E 7 0 3 (PLAN9, PL.31・38, Fig.7) SK702の南方に位置する井戸。直径1.05mの円形掘形内に内寸0.65m四方の方形木組をもつ。木枠は、縦板組隅柱横桟止めに分類されるもので、坑底四隅に長さ30-20cm、幅10cm程度の自然碟を立てて基礎とし、その上に横桟を渡している。隅柱は残存しないが、この横桟の上に立てる構造となっている。以下の井戸も同様で、隅柱は上下に通ったものではなく、すべて横桟の間で完結する特徴をもつ。

掘形壁面下端は、木枠に接する。横桟の一部が遊離して出土したが、遺存状態が悪く棟同士の結合の様子は不明である。横桟と隅柱の外には、各面3ないし4枚の縦板を並べて側板としている。井戸枠内からは多量の須恵器・土師器とともに中国製磁器が出土した。その他の出土遺物には緑釉陶器の小片、陶硯1点がある。

S E 7 0 4 (PLAN9, PL.31・38・39, Fig.7) T33の北東隣に検出した井戸。掘形平面形は直径1.35mの不整円形で、木枠の構造はSE703とはほぼ同じである。異なるのは、横桟の基礎が本例では、8cm角、長さ18cm程度の不整角材を用いることで、最下段の横桟が残っていた。横桟の結合は両端に凸部を削り出した桟と、凹部を作り出した桟を組み合わせるものである。多量の須恵器・土師器に加えて瓦器2片、軒丸瓦1点が、また坑底では楕円形の曲物底板1枚が出土した。

S E 7 0 8 (PLAN9, PL.31・39・40, Fig.7) T33南西部に位置する井戸。直径1.5-1.35mの不整円形の掘形で、深さは2.3mと調査した井戸の中で最も深い。木組の構造は前2者と同じだが、最下部の横桟の基礎は存在しない。須恵器・土師器などの土器の出土量も最大で、枠内中段から漆塗椀、底から曲物がそれぞれ1点ずつ出土した。そのほかに多数の箸と石硯1点が出土した。

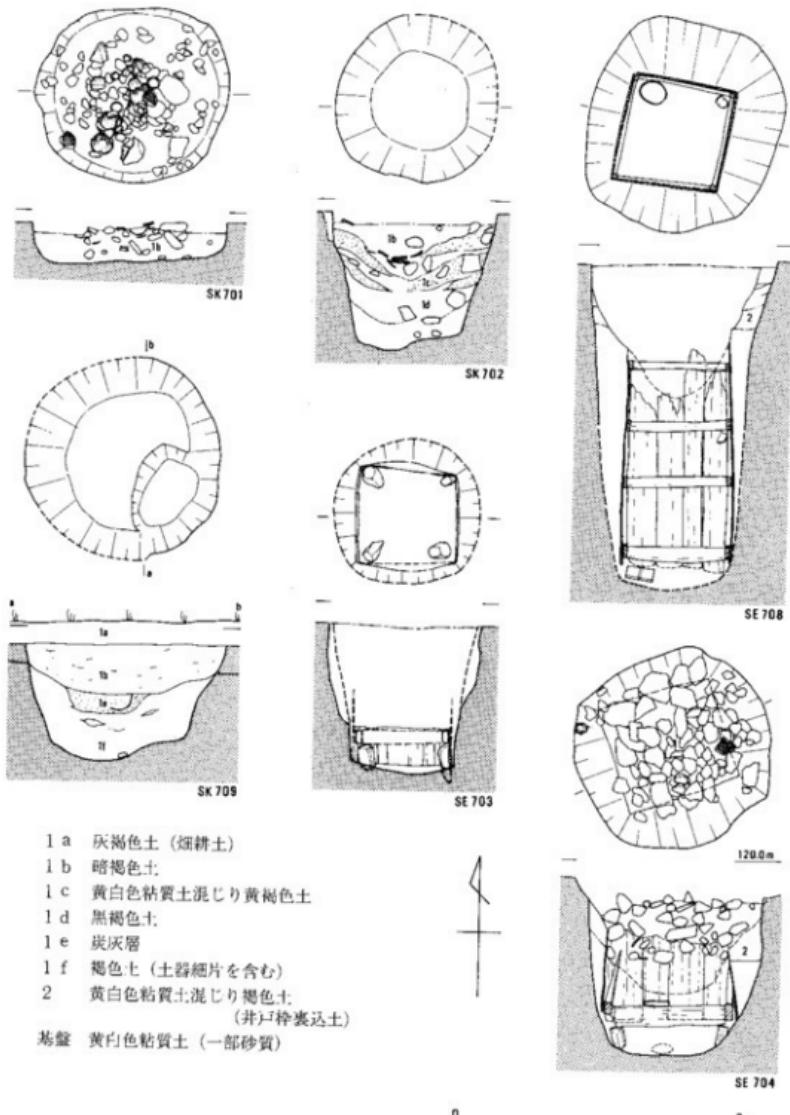


Fig. 7 土坑・井戸実測図

IV 遺 物

調査区のほぼ全域から、国府関連の遺物が出土した。これらのはほとんどは国府期以降の造成土や各種造構から出土しており、国府遺構に伴うものは比較的少ない。遺物には土器、瓦、陶硯などの土製品、石製品、木製品そして鉄滓や炉壁などの種類がある。土器、瓦、硯、木製品の順に説明し、取り上げる遺物は上層・下層の国府関連造構に伴うものを主体とする。それ以外の遺物については省略するものもある。

1 土 器

上層・下層造構に伴う土器で、ある程度まとまった量が出土した造構は、以下のSX605からSD102までで、これらについては実測可能なものはできる限り実測図を掲載するよう努めた。その他の建物の柱穴からは実測に耐える土器は微量しか出土していない。特に下層造構では時期を特定できるものは皆無といって良い状態であった。

S X 6 0 5 出土土器 (PL.44, Fig.8-10) 須恵器、土師器がある。須恵器には食器として坏G蓋(1-3, 19, 20, 30, 31)、坏G(11, 12, 56-59, 61)、坏B蓋(4-9, 33-39, 43-51, 95)、坏B(13, 18, 59, 60)、坏A(14)、高坏(16, 17, 66-69)が、貯蔵器として壺K(15, 42)、甕(63-65)、横瓶(32)がある。このうち42だけはSX605を破壊した現代の耕作溝からの出土だが、本来はSX605に存在していたものとみられる。土師器には食器として坏C(29, 40, 72, 77, 83)、坏A(73-76, 80)、坏または皿B(84)、皿A(26, 78, 79)、蓋(81, 82)、鉢(27)が、煮炊器として甕(21-23, 25, 28, 41, 85-89)、瓶(24, 90)がある(註1)。

須恵器は総じて焼成良好だが、5, 8, 13, 14, 18, 33, 34, 59は、胎土に縞を含まず、断口は灰白色、表面は黒灰色の瓦質に近い焼成をもつ特徴的な一群である。これらのうちの坏Bは、鋭利に外にふんばった高台と丸みを帯びて湾曲した体部をもつもので、体部外面の上半は横ナデ調整されるものの、下半は比較的凹凸を残したナデ仕上げである。

赤色顔料を塗布した土師器はない。坏・皿・鉢(27)内面は、正放射暗文、斜放射暗文を下から順に施した後、螺旋暗文を施す。外面は口縁部以外は不調整で、粘土帶の継ぎ目を残す。下層造構に属する資料である。

S D 3 0 9 出土土器 (Fig.14中段) 須恵器には坏G(188, 189)と坏B蓋(190-193)が、土師器には甕(184-187)がある。下層造構に属する。

S K 7 0 6 出土土器 (PL.45-46, Fig.11-12) 須恵器には、坏B蓋(100-106, 112-121)、坏B(107, 108, 122-126)、壺K(127)、甕(109-111)がある。

坏Bには口径15.5cm以下、17.5cm前後、20.5cmの三者が認められる。106は坏B(108)に伴

う蓋である。甕は、狭い頸部から矧く外方に開いて丸くおさまる口縁部をもつ甕A(111)と、大きく開いた頸部から上方に立ち上がる短い口縁部をもつ鉢に類した甕C(109,110)に分かれ、後者も口縁部のつくりには差異がある。110の肩部には取っ手の痕跡が認められる。

土師器には坏A(128-137,148)、坏E(138,139)、皿A(140-142)、皿ないし坏B(143,144)、甕(145-147)、瓶(158)、製塙土器(149-156,159)がある。

坏AにはⅢ(L径12.0cm)、Ⅱ(12.7cm)、Ⅰ(15-16cm)の3類がある。このうちⅠ類の128は縁を含まない精良な胎土を呈するが、Ⅱ・Ⅲ類はすべて赤色顔料塗彩で、長石礫を含む胎土も共通する。製作手法もⅡ・Ⅲは外面の底部から口縁部近くまで横ヘラ削りした後に赤色顔料を塗布して横ヘラ磨きを施すのに対し、Ⅰの底部外面は不調整のまま残され、横ナナ调整された体部との間に明瞭な段をもつという特徴を示す。内面の暗文についても、Ⅰは上下2段の右上がり斜放射暗文と底部の螺旋暗文との組み合わせであるが、Ⅱ・Ⅲは左上がりの斜放射暗文1段と底面の螺旋暗文の組み合わせである。口縁端部形態についてはⅠ・Ⅱはいったん外方に開き、さらに上方におさめて内面にわずかな段をつくるのに対して、Ⅲではその他に、段を形成せずそのまま丸くおさめるものとの両者がある。坏Eは厚さ2-3mmの薄い器壁のもので、片側だけに耳がつく。外面の口縁部近くまで横ヘラ削りした後、丁寧な横ヘラ磨きを加える。底部外面も一定方向のヘラ削りの後にヘラ磨きする。内面は横ナナ调整。2点の出土だが、白色砂を含む胎土で、赤褐色に焼成されている。坏Aにみられる2種の胎土とも異なる。皿Aは胎土、製作手法とも坏AⅡ・Ⅲと共に通する。内面には螺旋暗文が認められる。製塙土器は、いずれも薄手の逆砲弾形を呈するものだが、かなりの破片数の出土にもかかわらず尖底部の出土はない。このため、底部の形状は丸みを帯びていたと考えられる(註2)。器表に指先の圧痕や右上がりの条痕をもつもの(149-152,155,156,159)と、垂直ないしは左上がりの叩き目の可能性のある条線をもつもの(153,154)の2者に分類できる。両者とも内面はナナ仕上げで後者の量は少ない。細かく観察すると、前者の右上がりの条痕には平行する微細な条線が認められ、掌紋の可能性もある。

坏AⅢ(128)と坏Eは搬入品の可能性がある(註3)。128の底部外面に渦巻記号の墨書が認められた他、140および141の底部外面にも墨書文字が認められるが解読できなかった(PL.45)。

以上の土器は焼土と共に出土したが、土器にも2次的な焼成を受けたものが認められた。

S X 7 0 7 出土土器 (Fig.13上段) 須恵器には坏B蓋(93)、坏B(91,92)、壺K(94)がある。土師器には坏A(96)、皿A(97)、甕(98,99)がある。96,97には赤色顔料を塗布している。

S D 5 0 3 出土土器 (PL.46, Fig.13・14上段) 須恵器には坏B蓋(159-166)、坏B(167-169)、坏A(170,171)、皿A(173-175)、皿B(176)、壺A(181)、壺(177)がある。

坏B蓋には天井部のつまみをもたないもの(159)がある。口縁端部の形態が似ることから160,161も同様につまみをもたない可能性がある。天井部の形態は偏平なものが多い。皿B(176)

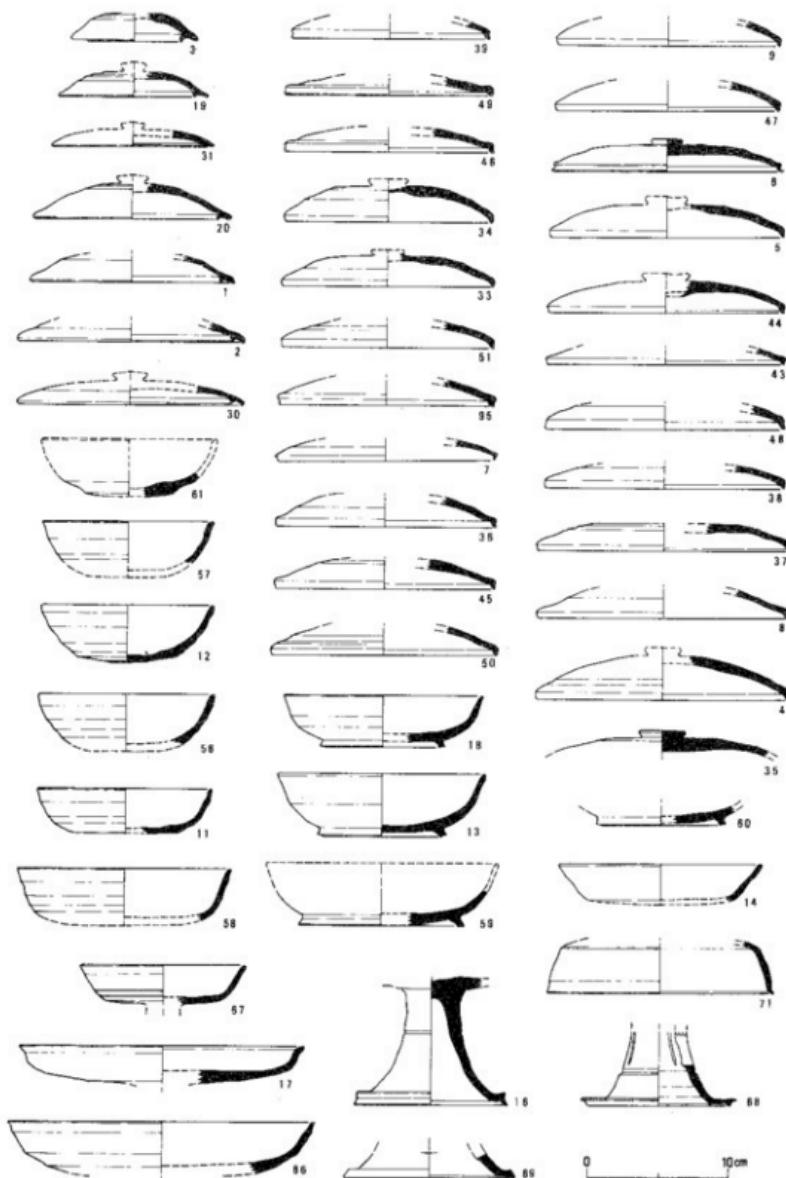


Fig. 8 SX 605 出土土器実測図 1

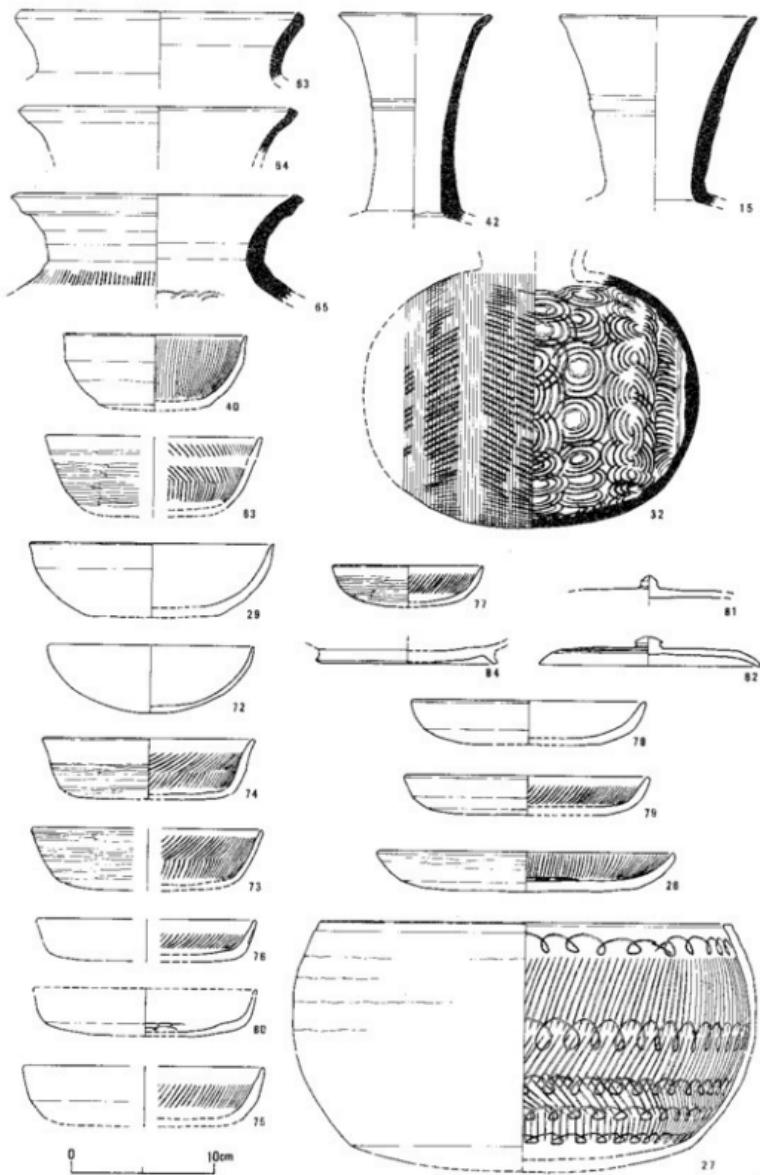


Fig. 9 SX 605 出土七器実測図 2

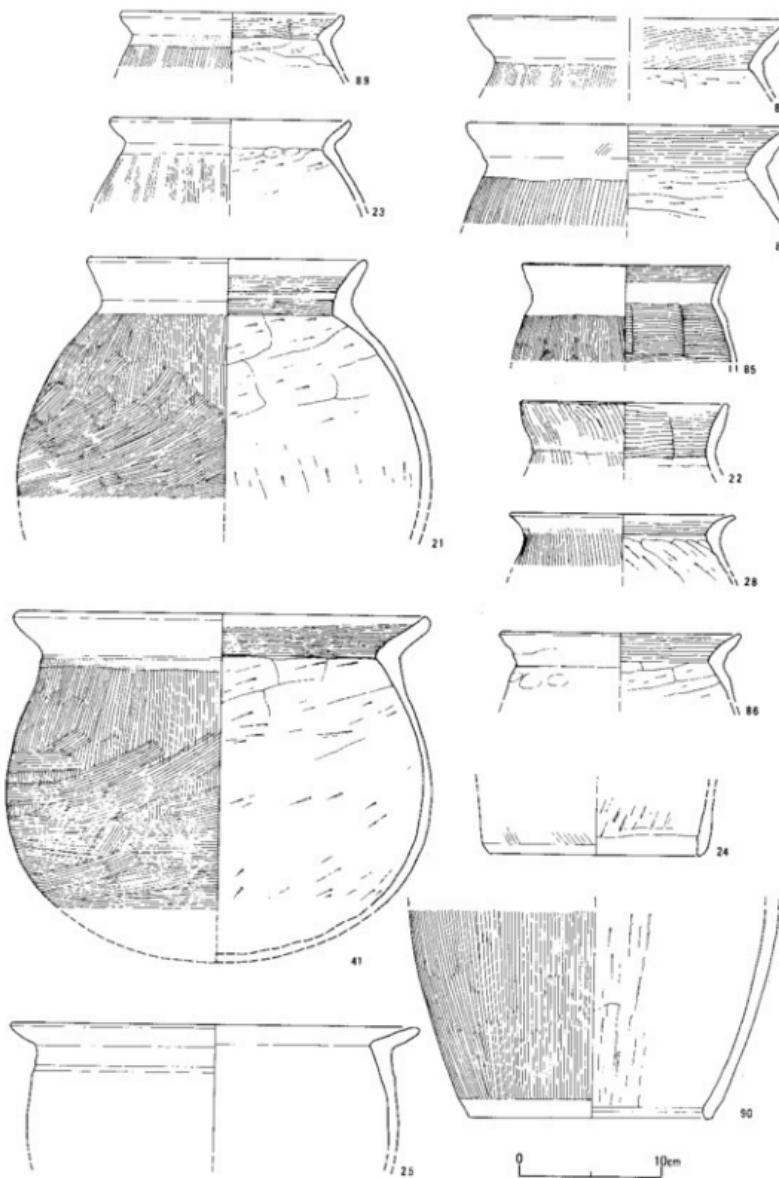


Fig.10 SX 605出土土器实测图 3

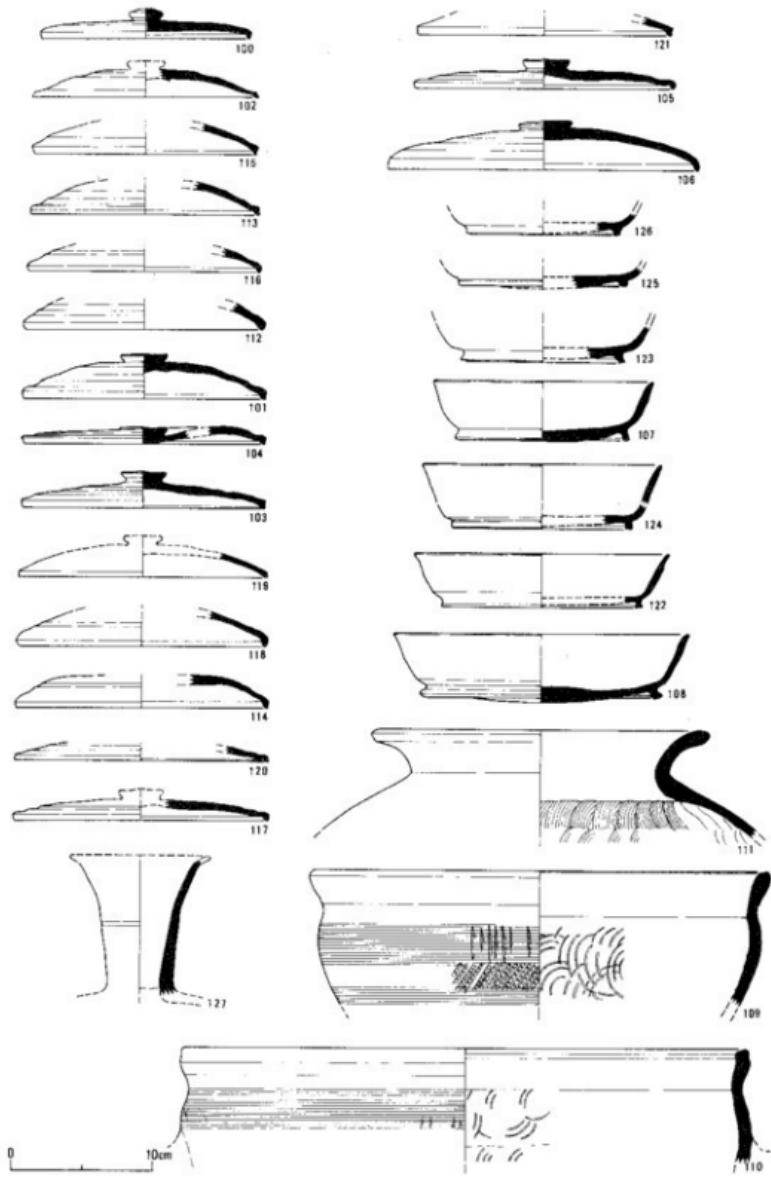


Fig.11 SK 706出土器実測図1

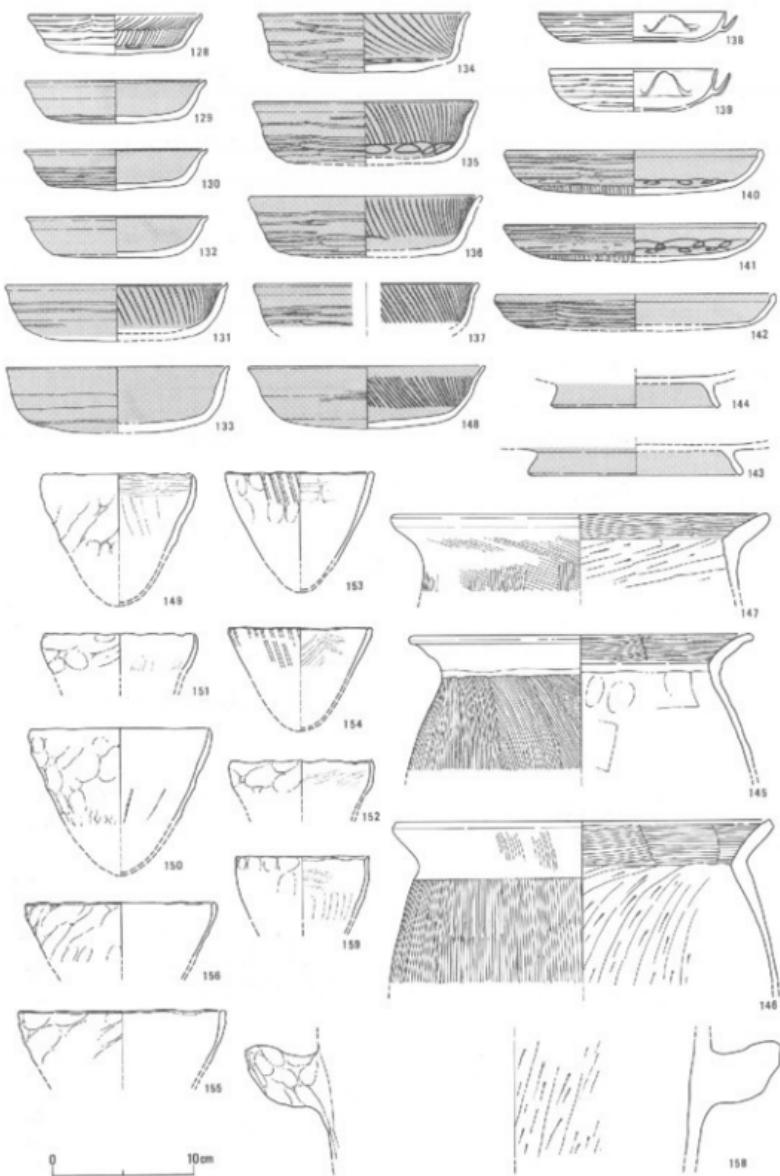


Fig. 12 SK 706 出土器実測図 2

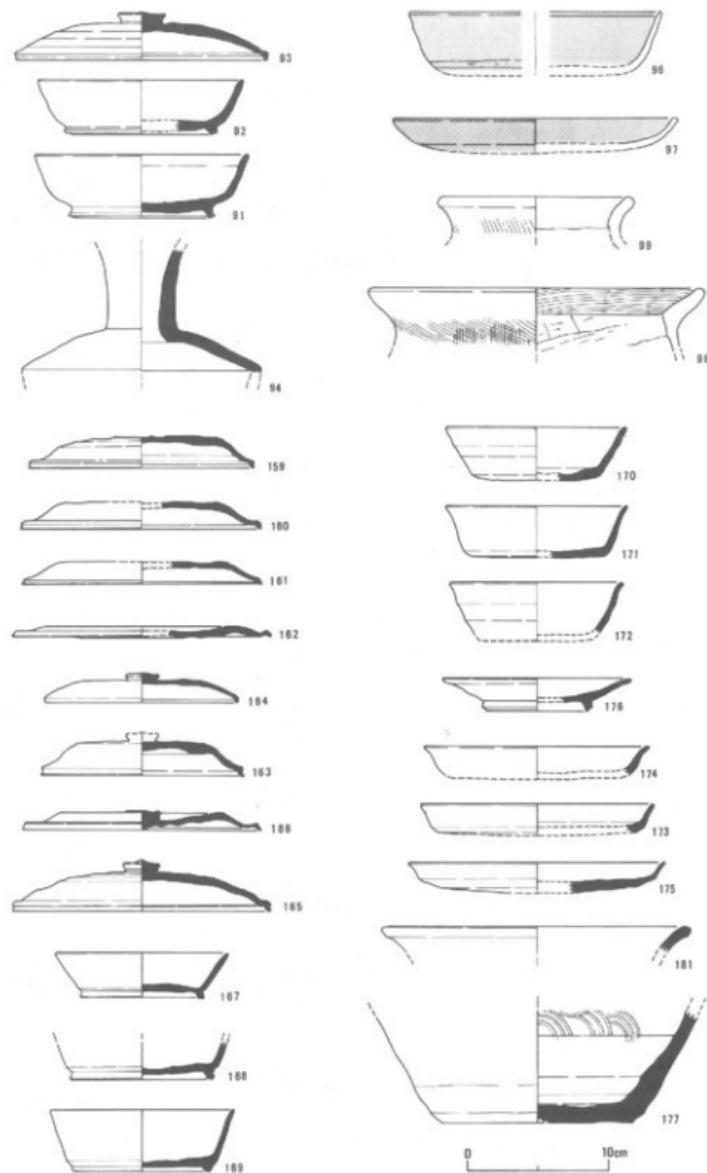


Fig.13 土器実測図(上段 SX707、下段 SD503)

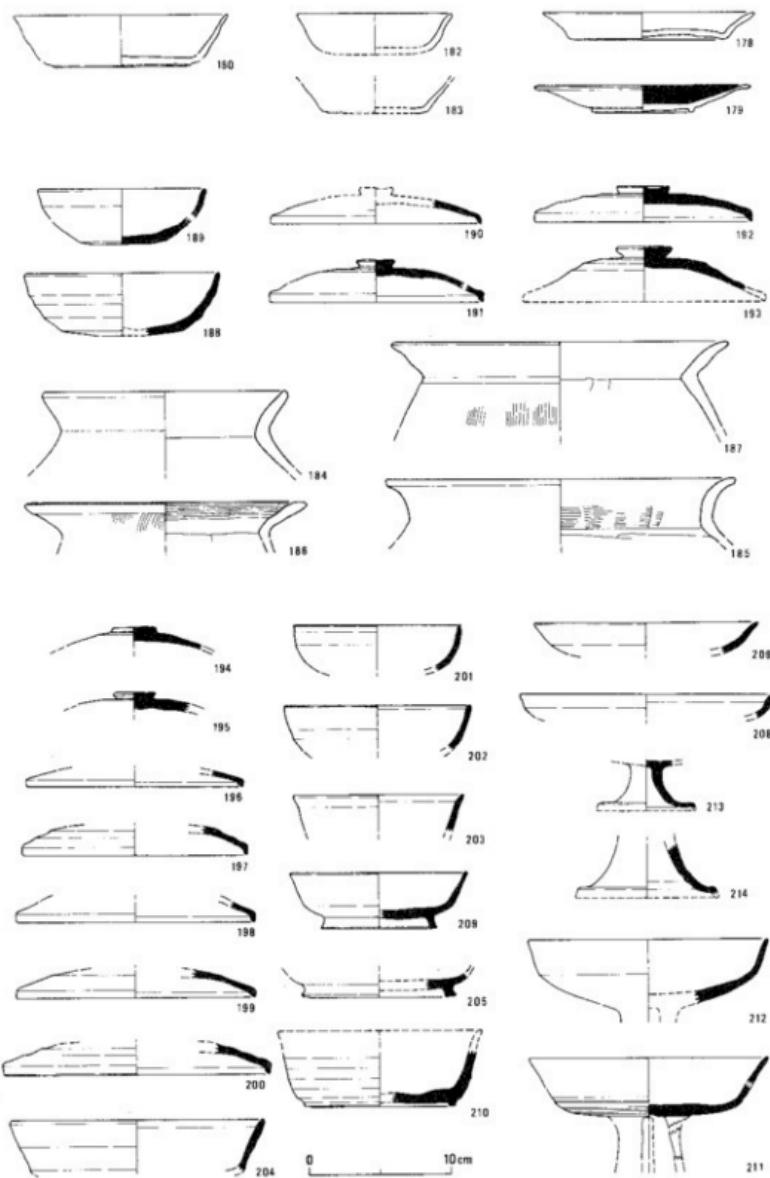


Fig.14 土器実測図(上段 SD 503、中段 SD 309、下段 SD 102)

は施釉陶器の模倣品と考えられるものである。

土師器には壺B(180)、壺A(182,183)、皿A(178)がある。180は痕跡程度の高台をもつもので、底部外面は回転ヘラ削りを施す。178は底部を回転ヘラ切りしてナデ調整を加えたもので、須恵器の生焼けの可能性もある。黒色土器の皿B(179)は内面黒色で、横方向の暗文状ヘラ磨きを加える。出土した土師器は少量で、いずれも溝上層部から出土した。182・183については混入の疑いもある。

S D 1 0 2 出土土器 (Fig.14下段) 総じて出土土器の量は少なく、図示できる土師器はない。須恵器には壺B蓋(194-200)、壺GまたはA(201,202)、壺B(205,209,210)、高壺(211-213)などがある。新旧の土器が混入した様相を示している。

S D 3 2 0 · S D 7 2 1 出土土器 (Fig.15) 216はT14のSD320から出土した須恵器壺Bで、底部糸切り後高台を張り付けている。本地域で勝間田焼と呼ぶものである。内外面ともに螺旋状のロクロ目を残す。

SD721の溝底から出土した土師器壺A(215)は、ロクロ土師器あるいは回転台土師器と呼ばれるものである。底部は回転ヘラ切り後にナデ調整を加え、乾燥時の板圧痕を残す。体部外面には螺旋に巡るロクロ目を残すが、内面は丁寧に横ナデ調整を施し平滑である。

以下の土器は、上層遺構の廃絶後に形成された遺構から出土したもので、主要なものを実測した。遺構別の組成表をTab. 2と3に掲げた。

S K 7 0 1 出土土器 (PL.47, Fig.16上段, Tab.2) 須恵器、中国製磁器、土師器がある。

須恵器には、高台をもたない壺A(800-805)、高台をもつ壺B、皿C(806,807)、壺(811)、甕、鉢がある。811以外の壺、甕、鉢は小片で全形は不明。壺Aおよび皿Cの底部は糸切りである。小形壺(811)は他の須恵器と異なり砂礫を含まない精良な胎土を使用している。半分ほどの破片で出土したが、頸部以下の内面に赤色顔料が付着していて、顔料の容器として用いられたものである。白磁碗(808-810)はII類(註4)に属するもので、口縁部は細い玉縁をなす。

土師器には、高台をもたぬ壺で底部を糸切りする壺A I (812,813)、底部ヘラ切りの壺A II、糸切りの底部に貼付高台をもつ壺B(814)、底部糸切りの皿A I (815-817,821-823)、ヘラ切りの皿A II (818)、高台をもつ皿で充填した台部の皿B I a、平底の底部がまっすぐ立ち上がる形態の中空高台をもつ皿B I b (820)がある。813と814内面には鼠と思われる動物の歯形がつけられている。

S K 7 0 2 出土土器 (PL.47, Fig.16下段・17上段) 須恵器、中国製磁器、土師器がある。

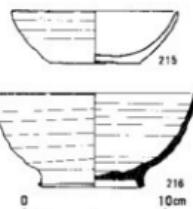


Fig.15 SD320-721出土土器実測図 (215 SD721, 216 SD320)

須恵器には、塊A(824-827)、皿C(828,829)、壺、甕(840,841)、鉢(837-839)がある。840には体部の格子叩き目以外に頸部付近に平行叩き目を施す。鉢は、平底で無調整の底部から外方に開き、湾曲しながら口縁の直立するもので、口縁には片口がつくと思われる。内面下半は使用のためよく摩滅している。

白磁には碗(830-836)と平底皿III(846)がある。

土師器には坏A I(842-845)・A II(847)・B(852-854)、皿A I(848-850)・A II(851)・B II(855-859)がある。皿B IIは、皿Aに高台を張り付けたもので、本例の場合、底部成形は糸切りのようである。

鉢(860)は瓦質のもので、内面は丁寧にヘラ磨きし、外面は横ナデ後、幅5mm前後の横ヘラ磨きを間隔をあけて施している。器表外面は暗灰色、内面とヘラ磨き部分は銀灰色で光沢をもつ。断口は灰白色で須恵器に近い緻密な焼成である。

S E 7 0 3 出土土器 (PL.47, Fig.17下段・18上段) 須恵器、中国製磁器、土師器がある。

須恵器には塊A(861)、塊B(862,863)、皿C(864-866)、皿D(867-869)、壺、甕、鉢がある。塊Bはいずれも焼成が良好で、胎土も精良なものを使用する。内面に同種の塊を重ね焼きした痕跡が残る。皿Dは、やや大形の皿Cの底部糸切り痕をナデないしヘラナデによって消したもので、胎土焼成とともに坏Bと共に、他の勝間田焼とは異なる特徴をもつ。

白磁には碗(870)、と皿(871-873)がある。

土師器には坏A I、皿A I(874-878)・A II(879,880)・B II(881)、鍋B(882-884)がある。鍋Bは平底気味の底部からやや外方に開きながら立ち上がった大部に外に開く口縁部を付けたもので、口縁端部のおさめ方には変化がある。口径30cm前後のものと43cmのものに分かれる。

S E 7 0 4 出土土器 (Fig.18中段左) 須恵器、中国製磁器、土師器、瓦器がある。

須恵器には塊A、皿C(885-887)、壺、甕、鉢(888)がある。磁器は白磁碗の小片である。

土師器には坏A I・A II・B、皿A I(891)・A II(892,893)・B I a・B II、鍋B・Cがある。鍋Cは小片のため図示できないが、口縁部が湾曲して立ち上がるものである。

瓦器塊(889,890)が2点ある。いずれも小片で、口縁部を丸くおさめている。

S K 7 0 5 出土土器 (Fig.18中段右) 須恵器、中国製磁器、土師器がある。

須恵器には塊A・B、皿C、がある。

土師器には坏A I・A II・B、皿A I(933)・A II(934)・B I a、鍋Bがある。

933は精良な胎土を用い、形態、焼成とともに他造構で普通にみられる皿A Iとは趣を異にする。口縁部に煤が付着し、灯明皿に使用されている。鍋F(935)は内湾する口縁部外面に、やや立ち上がった鍋状の受け部を付けた瓦質焼成のもので、内面および口縁部と底部の外面は横ナデするが体部上半の外面は不調整のまま凹凸を残す。

S E 7 0 8 出土土器 (PL.48, Fig.18下段・19上段) 須恵器、中国製磁器、土師器、瓦器がある。

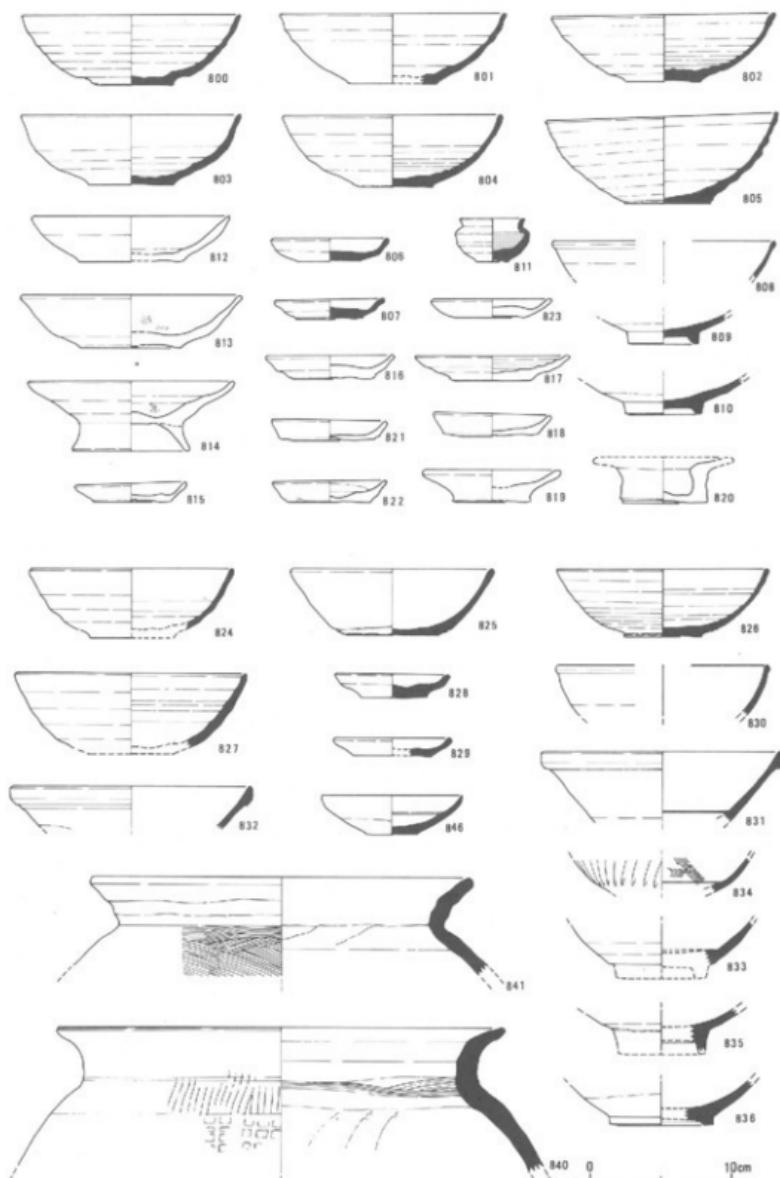


Fig.16 土器実測図(上段 SK 701、下段 SK 702)

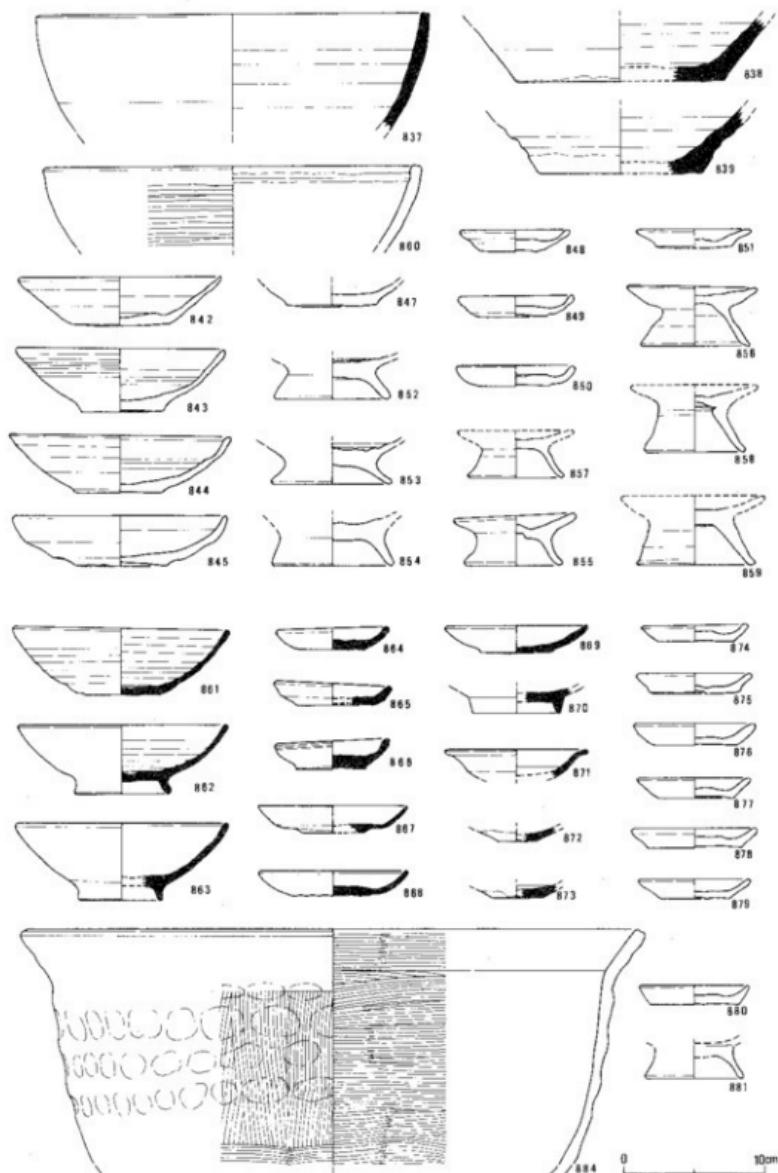


Fig. 17 土器実測図(上段 SK 702、下段 SE 703)

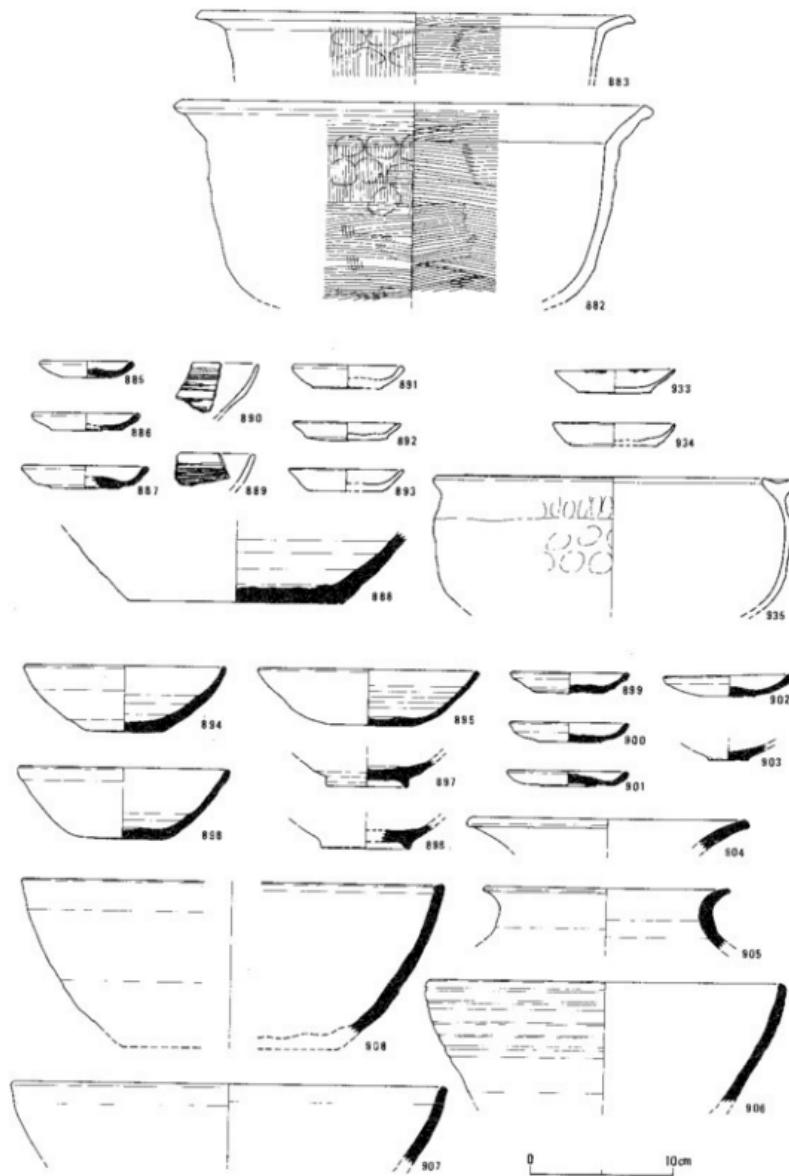


Fig.18 土器実測図(上段 SE 703、中段左 SE 704、中段右 SK 705、下段 SE 708)

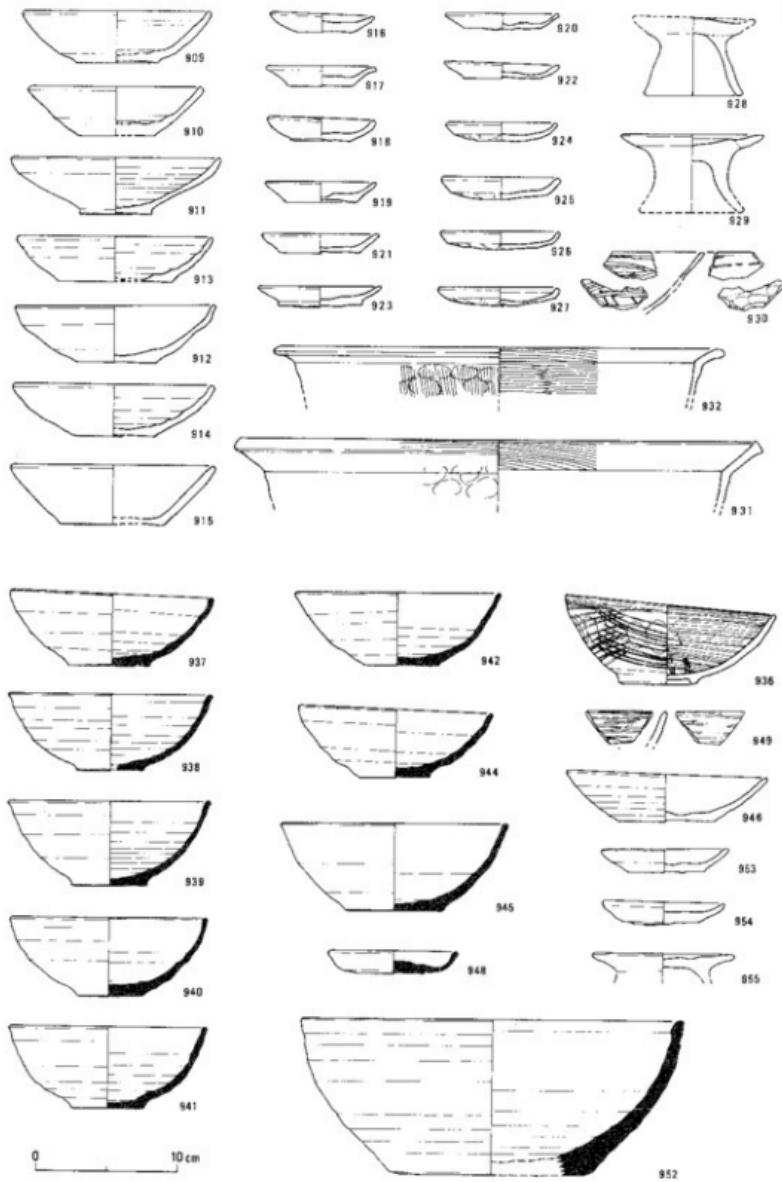


Fig.19 上器実測図(上段 SE 708、下段 SK 709)

器種	遺構		SK701(T3.3)		SK702(T3.3)		SK703(T3.3)		SK704(T3.3)	
	個体数	比率	個体数	比率	個体数	比率	個体数	比率	個体数	比率
須恵器・中國製造器等	輪A (C) 輪B (D)	31 2	59.7 3.8	34	49.4	49 3	55.5 4.2	24	49.1	
	輪C 輪D	6 45	11.5 82.7	17	24.6	15 4	30.7 5.6	15 41	30.6 83.8	
	白磁輪	3 1	5.8 1.9	8 2	11.6 2.9	2 3	2.8 4.2	2 3	4.1	
	白磁組	4		10		5				
前漢後漢	甌	5 3	9.6 5.8	15.4 3	2 4.3	7.2 4	2.8 2.8	1 5.6	2.0 4.0	
	盤	1	1.9	3	4.3	1	1.4	6	12.2	
	小計	52	100.0	69	100.0	72	100.0	49	100.0	
土器・瓦器	环I 环II 环III 环IV 环V 环VI 环VII	7 3 13 1 2 1	35.2 16.9 35.1 2.7 5.4 2.7	8 5 8 2 9	29.0 12.5 35.0 97.5 22.5	25 6 23 40 3	35.3 15 56.3 95.8 4.2	11 1 3 3 4	30.9 2.4 35.7 90.4 9.5	
	瓦器輪							2	4.8	
	甌				1(瓦質)	2.5		3	4.2	
	盤 碗 器							2 3	4.8 9.6	
合計	小計	37	100.0	40	100.0	71	100.0	42	100.0	
	合	89		109		143		91		

Tab. 2 土器組成表1

器種	遺構		SK705(T3.3)		SK706(T3.3)		SK709(T3.3)	
	個体数	比率	個体数	比率	個体数	比率	個体数	比率
須恵器・中國製造器等	輪A (C) 輪B (D)	10 1	93 2	60.7 1.3	41	60.7		
	輪C 輪D	5 19	42 141	27.5 92.1	11 57	17.5 90.4		
	白磁輪	2 3	2 4	1.3 1.3				
	白磁組	1			2	3.2		
前漢後漢	甌		5 1	3.3 0.7	1 3	1.6 4.8	6.4	
	盤		6	3.9	2	3.2		
	小計	19	153	100.0	63	100.0		
土器・瓦器	环I 环II 环III 环IV 环V 环VI 环VII	1 1 2 1 1 3	90 11 47 16 106 5	43.8 3 2.1	16 4 4 12 60 95	16.8 4.2 4.2 63.2 100.0		
	瓦器輪		1	0.4	3	3.2		
	甌		1	2.5				
	盤 碗 器	1 1	2					
合計	小計	19	242	100.0	95	100.0		
	合	32	395		158			

Tab. 3 土器組成表2

須恵器には塊A(894-896)・B(897,898)、皿C(899-902)、壺(904,905)、甕、鉢(906-908)がある。磁器には白磁碗と平底皿(903)がある。

土師器には坏A I(909-914)・A II(915)・B、皿A I(916-918)・A II(919-923)・A III(924-927)・B I a・B II(928,929)、鍋B(931,932)がある。皿A IIIは、丸みを帯びた無調整の平底をもち、口縁部付近と内面だけを横ナデ調整したもので、底部外面には掌紋らしい隆線を含む押圧痕が認められるので、掌上で粘土塊を成形したと考えられる。

瓦器塊は浅手のもので外面に暗文がまばらに施されている。鍋Bの口縁部は丸くおさめるものと、ハケ目によって端面を形成するものとがある。

SK709出土土器(PL.48, Fig.19下段-25) 須恵器、中国製磁器、土師器、瓦器がある。

須恵器には塊A(937-945)、皿C(947-948)、壺、甕、鉢(952)がある。皿Cと塊Aには底部内面に糸切り痕をとどめるものがある(註5)。白磁の皿小片2点がある。

土師器には坏A I(946)・A II・B、皿A I(953)・A II(954)・B I a・B II(955)がある。

瓦器は、口縁内面に凹線を施す楠葉型の塊(936)と、口縁端部をそのまま丸くおさめるもの(949)とに分かれる。936の底部には逆台形のしっかりした高台を貼り付ける。

2 瓦

軒丸瓦と多量の丸・平瓦、そして少量の道具瓦が出土した。瓦は、ほとんどすべてのトレンドで出土したが、出土量については上層遺構のSD102およびSA108の区画内に最も多く集中し、次いでその南方のT36・12に出土する。それに対して区画から離れた西方のT27・11・16、東方のT34では皆無あるいは微量である。上層区画内でもSB101周辺に最も多く、SA108周辺でもかなりの量が出土した。このことから両遺構は瓦葺きであったと考えられる。

すべての瓦は上層遺構あるいは国府期以降の遺構及び堆積土中から出土し、下層遺構に明確に伴うものは無い。

いくつかの型式あるいは種類毎に胎土、焼成、色調の特徴が対応する。

A 軒丸瓦(PL.49, Fig.20)

4型式6種、合計24個体が出土した。

I型式 複弁8弁蓮華文で、直線的に傾斜した外区外縁に凸鋸歯文、外区内縁に2重圓線をめぐらす。大形の中房内には1+8の子葉を配し、複弁は中央に界線を作り各弁ごとに子葉を置く。細長い蓮弁の基部は中房を取り巻く圓線に接するいっぽう、弁端は外区外縁の圓線に接しない。a・bの2種に細分される。

a種(C102)は、間弁がY字形に開く形態で、蓮弁の形状は高く隆起する。瓦当部と丸瓦部の接合は、瓦当裏面に溝をほり、それに丸瓦をさしこんだ後に上下に粘土を置いて行うようである。瓦当部凸面は丁寧な縱方向のヘラ削りの後、ナデ調整を加えるものがあり、瓦当裏面は

丸瓦部との接合部をなでつけた後に丁寧にヘラ削り調整を加える。丸瓦部凸面を残すものが多く調整は不明。砂粒を含まない精良な胎土を使用し、断口は灰白色ないし淡褐色に焼成されている。表面が暗灰色のものがあるが、ほとんどが表面の磨滅によって灰白色を呈する。最も多く出土した。

b種(C114)の間弁は楔形を呈する。弁の磨耗により、蓮弁の隆起は少なく木目が目立ち、範傷も進行している。石英・長石などの砂礫に富む胎土を使用し、断口は灰色、表面は黒褐色に焼成する。瓦当部と丸瓦部との間に接合のひび割れがみられるが、1点のみの出土で接合方法は不明。瓦当裏面は丸瓦との接合部を継になでた後、下端から3分の1程度をヘラ削りする。丸瓦凸面は縦方向にヘラ削りする。

Ⅱ型式 単弁16弁蓮華文で、断面が丸みを帯びる傾斜外縁をもつ。外区には1重ないし2重の圓線をめぐらせる。蓮弁中には彫りの浅い子葉をもち、その基部は中房をとりまく圓線に達する。中房内を残すものはないが、他遺跡の同範例では1+8の蓮子を配する。a・bの2種が認められ、各1点ずつ出土した。

a種(C115)は、b種に比べて弁幅が広く、弁端は尖り氣味である。外区の圓線は1重で、外縁外側の平坦面は顕著である。胎土、色調、焼成はTbと同じ。2種とも1例ずつの出土である。

Ⅲ型式(C122) 単弁蓮華文で、低い外縁の上を板で叩いて平坦面を形成するため、外縁の形態はいびつだが直立縁に分類できる。外区に1重の圓線をめぐらせ、13ないし14と推定される蓮弁は、細く高く隆起する。楔形の間弁をもつ。小形の中房には1+5ないし6の蓮子を配する。砂礫をあまり含まない精良な胎土を使用し、焼成は良好である。丸瓦との接合部以下の瓦当凸面は横方向のヘラ削りを施す。瓦当裏面は丁寧にヘラ削りされ、瓦当は薄く仕上げられているが、内面中央に布目痕を残す。布目は丸瓦接合部の破面の一部にも観察されるので、一本造りではない。他に1点出土している。

IV型式(C116) 素弁6弁蓮華文。直立した外縁の上部は平坦面をなし、幅は狭い。外区には1重の圓線がめぐる。蓮弁は丸みをおび、先端に反転を示す隆起した切り込みがはいる。弁中央がわずかに隆起する。蓮弁の外には3条の隆線をもつ。小形の中房をとりまく圓線は4分割され花文状を呈していて、1+4の蓮子が対応する。瓦当凸面はナデ調整を施し、裏面には布目痕が広く残り、隆起した外周をヘラ削りする。中央付近に布の紋目が残り、忤型一本造りによるものである。

須恵質の焼成で、胎土には長石の砂礫を含み、断口は灰色、表面は暗灰色を呈する。

瓦当面をほぼ完全に残す表面採集品が1例ある(C121)。

B 軒平瓦(PL.49-50, Fig.21)

4型式7種、合計19個体が出土している。

I型式 均整唐草文。内区は花頭のまわりに中心葉をおき、その左右に3単位ずつの唐草を配する。内区と外・脇区の境界に2重の圓線をめぐらす。a、b、c、eの4種が出土した。

a種(D101-103)は、花頭基部が上外区界線に接し、中心葉は花頭端部に接しない。各単位の第2子葉は肉太である。中心葉左端と花頭部の間に範傷の認められるものがある。頸の形態は曲線顎II(註6)で、顎面と瓦当面のなす角度はわずかに鈍角をなす。顎面は横ヘラ削りし、観察可能な9例の顎面幅は1.3cmから1.6cmまで、単純平均値は1.39cmである。平瓦部の凹面は横ヘラ削り、凸面は丁寧に斜めない縦方向にヘラ削りする。両面ともヘラ削り調整の範囲は広く、布目痕や叩き目痕を残さない。胎土、焼成、色調は軒丸瓦I aと同様。

b種(D113)は、1点の出土で、左上外区の圓線間に特徴的な範傷をもつ。他遺跡出土の同範例では中心葉が花頭端部に接する。曲線顎IIだが、顎幅は約2.8cmとI aにくらべて広い。平瓦部凸面から顎にかけてやや荒い斜めヘラ削り調整を、凹面には横ヘラ削りを施す。やや砂粒に富む胎土を使用する。

c種(D114)は、唐草文が纖細である。1点が出土した。左第2単位主葉から第3単位にかけて範傷をもつ。他遺跡の同範例では中心葉は花頭端部に接する。曲線顎IIに分類されるが、段顎に近い形態となる。顎面幅は4.3cmに達する。平瓦部凸面は縦方向のヘラ削り、顎近くは横方向に近い斜めヘラ削りを行う。凹面には横ヘラ削りを施すが、範囲は狭い。砂粒に富む胎土を利用し、焼成、色調ともに軒丸瓦I bないしIIに共通する。

e種(D115-116)は、いずれも瓦当下半部、剥落した顎部の破片である。内外区境界に2重の圓線をもつが、採集資料例では下外区は3重となっている。範傷が認められる。D115は曲線顎の可能性がある。D116は段顎で、顎面には横方向に平行叩きした後、縦の平行叩き目を施す。平瓦部凸面には縦の平行叩き目を施している。D116の瓦当面には離れ砂が付着する。砂粒を含む胎土で、黒灰色を呈する。

II型式(D117) 均整唐草文。上外区に1重の、下外区に2重の圓線をもち、下圓線間に珠文をめぐらす。主葉から派生する子葉は肉太で圓線に沿って反転する。直線顎で、平瓦部凸面から顎にかけて縦方向にヘラ削りし、瓦当面から2.5cmの幅で凹面を横ヘラ削りする。砂礫に富む胎土で、断口灰色、表面黒灰色に軟質に焼成されている。1点だけの出土。同型式の瓦は、中国綫貫自動車道の建設に先立つ発掘調査で出土している。

III型式(D118) 均整唐草文と思われる。直立した高い外線の内側には断面三角形の圓線を1重にめぐらせる。曲線顎で、平瓦との接合部で剝離する。砂礫をあまり含まない胎土を使用し、灰白色の軟質焼成。1点の出土である。

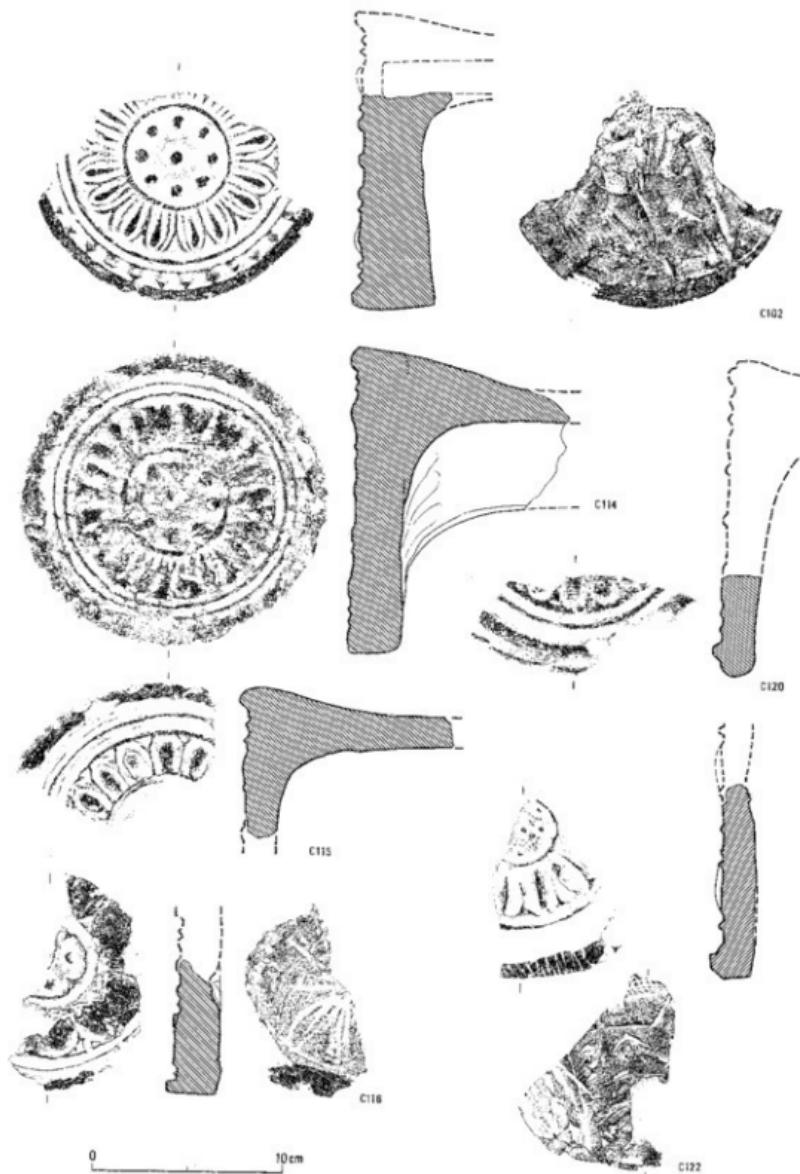


Fig. 20 軒丸瓦尖測図(C102 I a, C114 I b, C115 II a, C120 II b, C122 III, C116 IV)

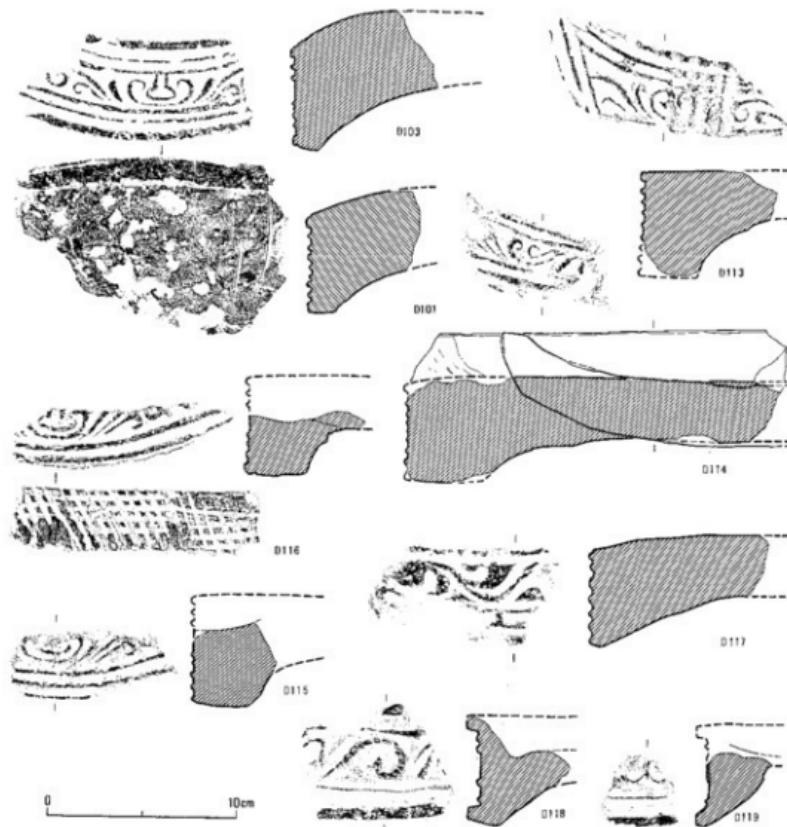


Fig.21 軒平瓦実測図(D101-103 Ia, D113 Ib, D114 Ic, D115-116 IIe, D117 II, D118 III, D119 IV)

IV型式(D119) 均整唐草文と思われる。段頸で、高い頸斜縁の上部には平坦面をもつが、横ナデ調整を施した頸部は丸みを帯び、平坦な頸面を形成しない。1重の園線をめぐらせる。園線は唐草文と同様、低く繊細である。胎土には白色砂礫を含み、須恵質に焼成される。1点の出土である。

C 丸 瓦 (Fig.22)

破片のみで完形品の胎土はなかった。すべて玉縁をもつもので、行基丸瓦はない。

第1次成形技法はすべて粘土板巻きつけである。第2次成形技法は、その後の調整により痕跡を残さないものがほとんどで、これをV類と呼ぶ。締叩き目を残すI類が1点だけ認められ

調査区	型式	軒 丸 瓦						軒 平 瓦								
		I a	I b	II a	II b	III	IV	不明	小計	I a	I b	I c	I e	II	III	IV
T 1	4							1	5	1						1
T 2	1								1							
T 6	1								1							
T 10													1			1
T 13															1	1
T 14														1		1
T 20	1					1			2							
T 21	1								1							
T 25	1								1							
T 28	5	1						2	8	7					1	8
T 29										1						1
T 31				1					1	1						1
T 33	1		1			1	1		4	2	1	1	1			5
合 計	15	1	1	1	2	1	3	24	12	1	1	2	1	1	1	19
比率(%)	62.4	4.2	4.2	4.2	8.3	4.2	12.5	100.0	63.0	5.3	5.3	10.5	5.3	5.3	5.3	100.0

Tab. 4 軒瓦一覧表

た。これは縦方向のもの(A種)に限られる(1)。

凸面調整技法にはb類ナデ調整、c類ハケ目調整(2)の2種があるが、cは微量である。

D 平 瓦 (Fig.22)

破片が大部分で、完形に復元でき全形を知ることのできる個体はわずかで特定の種類に限られる。

第1次成形技法は、すべて粘土板貼りつけによると思われ、桶巻き作りを示す確実なものは認められない。第2次成形技法によりIからVまでに分けられる。凸面の調整技法はおおむねa類(不調整)に限られる。

I類は、縄叩き目のもので、縄目の方向が側縁に平行するA種(3)、側縁に斜行するB種(4)がある。砂礫を含まない精良な胎土で灰白色焼成のものが多い。縄目は細かく密だが、A類には間隔の荒いものが少數認められ、これは砂粒を含む胎土を使用する。凹面は不調整のまま布目を残すものと、ナデ消すものがある。4は軒平瓦の可能性がある。

II類は、平行叩きのものである。T 1のSA108付近で出土した5は、築地盤に用いられたと思われるやや幅狭のもので、長さ35.0cm、広端幅23.3cm、狭端幅22.5cm、厚さ3.5cmをはかる。砂粒を含み、暗褐色焼成。凹面に縦のハケ目調整を加える。

III類は、斜格子叩き目のもののうち、最大対角長が1cm未満のものをさす。

IV類は、最大対角長が2cm前後の大形斜格子叩き日のもの。III・IV類ともに須恵質焼成のも

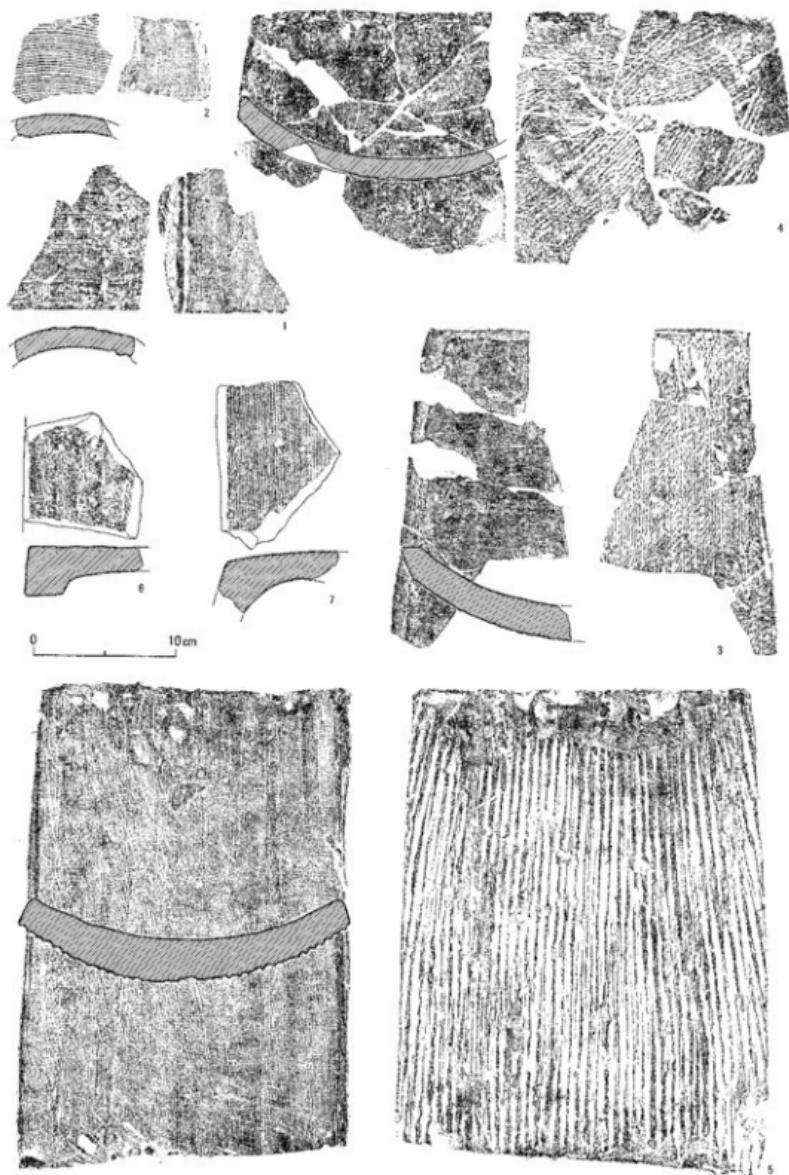


Fig. 22 丸·平·道具瓦大图(1 丸瓦Ib, 2 丸瓦Vc, 3 平瓦IAa, 4 平瓦IBa, 5 平瓦IIe, 6 隅木盖瓦, 7 不明)

のがほとんどで、出土数も微量である。

V類は、叩き目を残さないもので、凸面に離れ砂が付着した例がある。微量。

以上の平瓦のうち I A の出土量が圧倒的で、I B と II がそれに続く。

E 道具瓦 (Fig.22)

隅木蓋瓦の可能性のあるものが1点(9)、不明品1点(10)が出土した。

3 砥 (PL.48, Fig.23)

陶硯(1-4)と石硯(5)がある。1は円面硯で、T27で耕作土中から出土した。直径27.5cm。2は二面硯でT13の第2層から出土。裏面に脚台を削り出している。3はT8の小柱穴から出土した。硯面に布目痕を残し、裏面には脚台を削り出す。3と同じ風字硯の4にも脚台の一部が認められる。SE703出土。陶硯はいずれも須恵質。5は粘板岩製の硯でSK709出土。四方に蝶文を刻んでいる。以上のはかに、おもに須恵器坏B蓋を利用した転用硯がかなりの数認められるが、点数は未確認である。

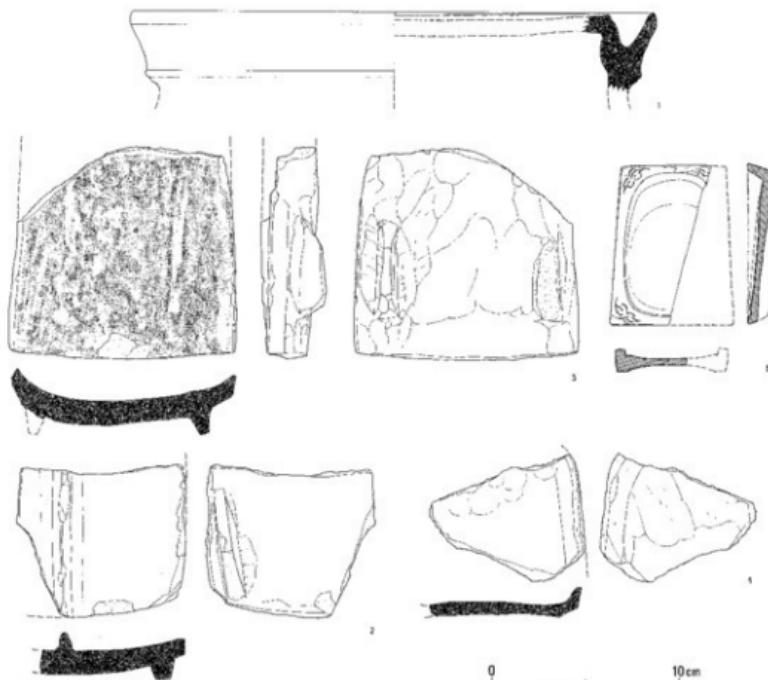


Fig. 23 砥実測図

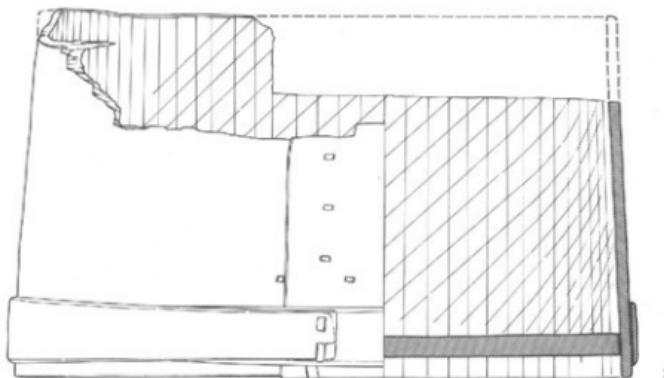
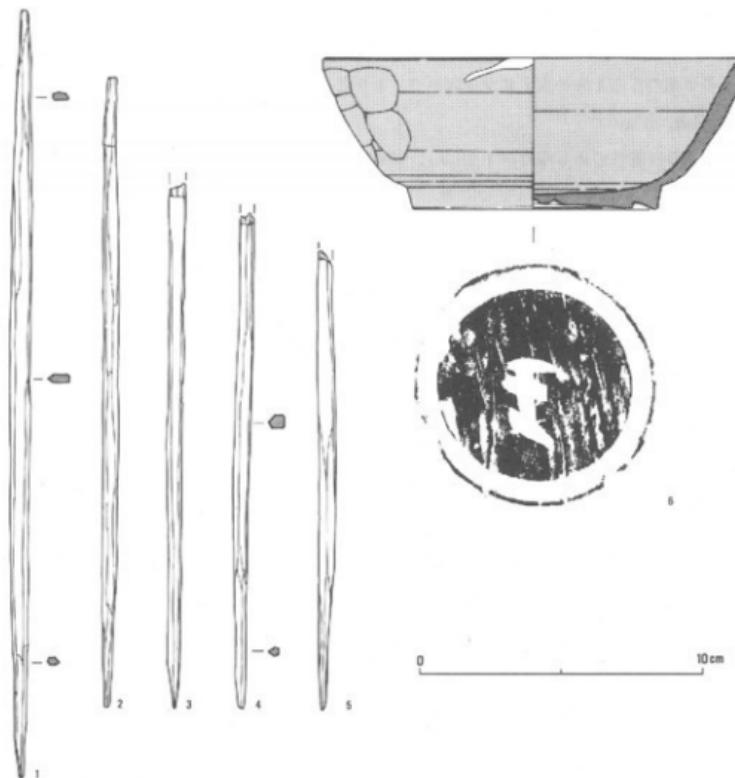


Fig. 24 木製品実測図

4 木製品(PL.50, Fig. 24)

全体として木製品の出土は少ない。特に国府期においては、わずかにSD102から桧はだや木片が、SX605などから木片が出土した程度である。これらの出土材も断片のため、形態や用途は不明である。比較的多くの木製品を出土したのは、T33の国府期以降の井戸SE708であり、これらを図示した。

漆塗り椀(6) 口径14.9cm、底径8.4cm、高さ6.4cmをはかる。底部を除く内外面に黒漆を塗り、口縁の一部を赤漆で塗布するが、破片のため意匠は明かでない。底部の外縁に沿って浅い溝をめぐらせる。底部外面の中央近くに「王」と読める陰刻を施す。

箸(1-5) 1は、長さ27.2cm、幅0.8cm、厚さ0.3cmをはかり、両端を尖らせる。概して薄手のものが多く、これらは楊子の可能性もある。

曲物(7) 直径22.2cm、高さ13cmをはかる桶で、平面形は正円をなさずやや歪む。底部近くに幅2cmの補強板を巻く。

註

- (1) 7世紀から9世紀代の土器の分類は、おおむね古代の土器研究会編「古代の土器1 都城の土器集成」1992にしたがった。
- (2) これらについては、倉浦式に相当し、製作地は主として備讃瀬戸地域にもとめられると考えられる。香川県植石島大浦浜遺跡出土土器について実見して比較したが、胎土、色調が異なる。資料の実見にあたっては香川県埋蔵文化財センター渡部明夫氏にお世話になった。
- (3) SX605およびSK706出土の土器について、奈良国立文化財研究所の西口寿牛氏から教示を得た。
- (4) 福岡市教育委員会「博多出土貿易陶磁分類表」福岡市埋蔵文化財調査報告書第105集別冊 1984
- (5) 須恵器(鶴間田焼)皿Cの内面にみられる糸切り痕については、かつてその存在を確認し、ロクロ水挽成形の証拠と考えた(II章註6文献)。当時予想していたとおり碗A(943)についても同様の現象を確認することができた。碗Aの成形技法については、同様にロクロ水挽き成形の可能性が考えられるが、この種の碗については円筒形の粘土柱上に粘土紐を巻き上げた後にロクロ回転を利用して調整をしたという見方もある。興津一郎「古代窯業生産の展開 西日本を中心として」『文化財論叢』同朋社出版 1983
- (6) 奈良国立文化財研究所「平城宮発掘調査報告ⅩⅤ」奈良国立文化財研究所学報第50号 1991



Fig.25 土器内面に残る糸切り痕
(T33, SK709出土)

V 考 察

1 遺構の変遷と年代

美作国は、周知のように和銅6(713)年に成立したことが文献資料によって知られている。発掘で検出した遺構の変遷と年代を理解するため、まず遺構の変遷を整理し、次に遺物の年代を検討する。

A 遺構の変遷

発掘によって検出した国府関連と思われる官衙遺構は前章までに述べてきたように上層、下層の両者に分かれる。これを時期順にⅠ期、Ⅱ期と呼ぶ。

I 期 Ⅰ期の遺構については遺構間の切り合いはなく、また建物などの建替等も明確ではないので、現状ではⅠ期を細分できない。この時期を特徴づけるのは、第1に遺構の示す方位で、真北からかなり東偏する。柱穴等の埋土は黒褐色を呈していて瓦の出土のみられないことが2番目の特徴である。

II 期 Ⅱ期の遺構については、いくつかの変遷が認められる。SB101では、2回の建替が認められ、最終の建替で礎石建物となっている。SA108でも3回の作り替えが認められた。最終には築地塀になったと考えられる。これら両者の変遷は対応すると考えられ、A、B、Cの小期に細分できる。SA108西端部の南北塀SA108は縮小されてSA108Bとなるが、これらはいずれも掘立柱による板塀なので、それぞれⅡA期、ⅡB期に対応すると考えられる。区画内の建物のひとつSB601はSA108に接近して位置するが、柱穴の位置はSA108に対応せず不規則なことからⅡC期以降に建てられたものと考えられる(ⅡD期)。SB601には1回の建替が認められるものの、現状では他の遺構の変遷と連動するかどうかは不明であり独立した小期を設定できない。SA712、SB711については方位からⅡ期に属することは明らかだが、小期との関係は不明である。以上のことからⅡ期はⅡA期からⅡD期までの4期に細分される。

B 遺物の年代

SX605出土土器 出土した遺物の中で最も古く位置づけられるのはSX605出土土器の一群である。須恵器壺G蓋内面の返りは明確で7世紀後半に屬し、飛鳥(4)期にさかのほる可能性がある。須恵器壺B・同蓋、土師器壺Aの一部は飛鳥V(平城宮I)に屬し、7世紀後半から8世紀前葉にかけてのものとみられる。

SK706出土土器 次に続くのがSK706とSX707出土の一群である。土師器壺Aのうち128は他の土器と胎土を異にし、搬入品の可能性のあるもので、飛鳥Vに屬するとみられる。須恵器壺Bの高台は外方へ踏み出したものが顕著で、これらについてもおおむね古相を示すものである。しかしながら、胎土を同じくする在地産と考えられるすべての土師器壺壺類はいずれも赤色頬

料を塗彩したもので、内面に1段斜放射暗文を施す。いっぽうSK605にはこれが全く存在しないことから、本群は、SX605に続く8世紀前葉から中葉のものとみることができる。SK706とSX707からはわずかだが瓦が出土しているが、SX605には存在しないことも新しい様相である。

SD309出土土器 須恵器壺Gと壺B蓋があるが、少量のため時期を決定するのは困難である。

7世紀後半から8世紀前半頃と思われる。

SD102出土土器 7世紀後半から9世紀前半頃までの時期幅が認められる。

SD503出土土器 SD503はSB101の付属施設で、II C期に属する。出土土器は9世紀前半とみられる

古代末～中世の土器 T33出土の一括遺物群は、本地域の当該期の土器編年にとって重要な資料となった。一括資料中、相対的に古く位置づけられるのはSK709で、出土した瓦器塊の年代は12世紀初頭に属する(註1)。これらのうち、須恵器のほとんどは勝間田焼と呼ぶものである。勝間田焼については、勝央町戸岩窯のものを最古とし、その年代をこれまで11世紀後半と考えた(註2)。その根据のひとつは進上窯例の12世紀中葉という年代観にあった(註3)。SK709の須恵器塊Aは今回の資料中でも比較的器高が高いもので、口径14cm、器高5.5cm前後。進上窯例に比べてやや新相をもつ。このため、進上窯段階の年代をやや繰り上げて11世紀後葉に置くことができる。また、戸岩窯と進上窯の間にはすくなくともひとつの段階が想定されるので、ここでは戸岩窯段階の年代を変更し、11世紀前半ないし中葉とみておく。SK709に続くのはSK701で、須恵器塊Aの器高は低くなりながらも依然として体部はやや湾曲気味である。いっぽう口径は15.3cm前後に拡大するが器高は5cmに減少する。土師器皿AⅢの出現をもってSE708をSK701に後続する段階とみる。SE708の須恵器塊Aの体部は湾曲度を失う。

C 遺構の年代

SX605出土土器の年代からI期の年代は、7世紀後半から8世紀前葉頃と推定される。初現は7世紀第3四半期にさかのほる可能性がある。いずれにせよI期遺構は、美作国成立以前の官衙遺構と考えられる。

SK706とSX707からは、壁土を含む焼土や木炭片が出土した。出土土器や瓦には2次的な焼成を受けた痕跡が認められることから、これらの遺構は火災にともなう廃材等を埋めた土坑と考えられる。SX210については、木炭片の出土からみて同種のものであった可能性が高い。では、こうした土坑の形成時期は遺構の変遷との関係でどう位置づけられるだろうか。ふたつの見方が可能である。第1はI期とII期との間に置くもので、この場合、II期の開始は和銅6年の美作分国の時期よりいささか遅れることとなる。第2は、II A期とII B期の間に位置づける解釈である。土坑群から微量とはいへ平瓦、丸瓦が出土し、中には火を受けたものが存在することは、I期遺構から瓦がまったく出土しないことと矛盾するので、ここでは後者の見解をとる。

SB101柱穴の断ち割り調査の際、P3の創建柱(II A期)抜取痕中から平瓦 I A、丸瓦が出土した。また、P16の新柱穴(II B期)根固めに平瓦 I A、丸瓦が用いられていることから、SB101はII B期から瓦葺き建物となった可能性が高い。軒瓦の最も古く位置づけられるのは、軒丸・平瓦 I aである。これは美作国分寺、国分尼寺と同範囲関係にあり、モデルとなった最も近い同型式の軒平瓦平城宮6663 C b型式は、745(天平17)年の平城京遷都後に製作されたとする見解がある(註4)。これにしたがいII B期の始まりを8世紀中葉頃と考える。美作国分寺の軒平瓦 I aは、いずれも曲線顎IIだが、顎面幅の平均値は約2.5cmで国府例よりも幅広となり、新しい特徴を示している。したがって両寺の創建は8世紀後半頃に求められることとなる(註5)。

II C期の始まりについては、SB101P16の礎石掘え付け痕から軒丸瓦 II bが出土しているので、8世紀末以降と考えられる。SB101はII期を通じて存在したとみられるが、その終末はSD503の土器が示す9世紀中葉頃と考えられる。

以上のことから、II期の開始を8世紀前葉の美作分国時期、土坑群の成立を8世紀中葉頃と捉えておく。II期すなわち国府期のあともSD102の両端には東西溝が付け替えられた。SD320およびSD721である。出土した土器のうち215は10世紀代、216は進上谷に先行する11世紀後半頃とみられ、国府II期遺構SD102に起源をもつ東西地割線は、すくなくともこの段階までは存続している。

3 遺跡の性格

I期 調査地区の創約等からI期遺構の本来の広がりは不明だが、現状で東西約100m、南北約70mに達する。中心と思われる的是、SC502およびSB602からなる区画である。この区画の西端はT10以西には達していないので、東西規模50m以内と推定される。南北規模については、地形からみて60m以内とみられる。区画内にはT31の所見では井戸SX605が検出されただけで建物は発見されていない。一定の空間をともなうものであったことが知られる。SX605が区画にともなうかどうかについては確証はないが、SX605の時期の遺構が他に認められないことから、その可能性が高いと考えられる。これらの遺構は、方位が一定し、柱穴規模が大きいこと、SX605出土土器の器種構成、遺跡の広がりなどから官衙と判断される。したがって、美作国分寺以前という時期からみて郡(評)衙と思われる。その場合、分立後の地名からみて苦田郡衙に相当する。

II期 II期遺構の主体を占めるのは、SD102とSA108からなる区画である。区画内に存在した建物のうちSB101とSB406の柱穴規模は最も大きく、3期にわたる建替が認められる。両者は瓦葺建物で、第2次の建替で礎石建物となる。これらの特徴から、この2棟が区画内の主要建物であったことが知られる。区画施設と両建物の位置関係は、SB101北側柱列からSA108までが45尺、SD102中心までが55尺をはかる。両建物間の距離は、SB101の南庇とSB406北庇

間が150尺(44.98m)の完数となり、両建物が区画設計に当初から組み込まれていたことを示している。

II A期における区画東西規模は、現状で88m以上。T34の所見では150mには達さない。本来は100mから120m程度の規模と推定され、II B期以降、西側は約10.8m縮小されている。南北規模は78m以上、約100m以内。先にみたSB101とSB406の位置関係からみて約88mと推定される。東西にやや幅広の形態をなすようである。

区画の存在するのは、東西250m、南北200mの広がりをもつ台地のほぼ中央部にあたる。この北方には東北東から小谷があり組み、南方のX座標-10300の付近では東から小谷が入っている。そして東側は、SB101から80m程の地点で北高差約10mの急斜面となっている。このように、この区画が周辺の地形の中で最も良好な一帯を占地して形成されていることが知られる。

この立地と、先に述べた中央に空間をもつ計画的配置からみて、本区画が美作国府のなかで中心的位置を占めることはあきらかである。今回の調査結果は、本区画の性格を断定するには不十分だが、現状ではどう評価することが可能だろうか。

本区画を国府(国衙)とする見方については、区画の規模からみてこの区画内に政府を位置づけるのは不可能であり、成り立たない。上記の諸特徴をふまえれば現状で最も蓋然性が高い解釈は、政府とする理解である。この場合、相対するSB101とSB406を脇殿に相当すると考えれば、東向の政府という類例のない構造となる。また政府内の建物配置は「コ」の字形よりも「品」字形となり、この点も西日本の政府類型と異なる。

国府の構造に関して、SD102・SA108の区画南方にSD1001とSA1004からなる区画の存在が認められた。この区画の広がりについては明かでないが、いくつかの曹司の存在が推定されることとなり、美作においては国府—国衙—政府という3重の区画形態は想定できない。

以上、美作国府跡の発掘調査結果について簡単に説明してきた。全体として遺跡の保存状態は良好で、さまざまな可能性を考慮しながら今後検討を積み重ねていく必要があると考えられる。

註

- (1) 岡山大学山本悦世氏に教示いただいた。
 - (2) II章註6文献
 - (3) 伊藤 晃「山陽路(岡山・広島・山口)の古代中世窯」『日本やきものの集成9』平凡社 1981 p.96
 - (4) 奈良国立文化財研究所「平城宮発掘調査報告XIV」奈良国立文化財研究所四十周年記念学報第51巻 1993 pp.107-127
 - (5) 美作国府軒瓦Iaと美作国分寺軒瓦Iaとの間に胎土の違いを認め、精良な胎土を用いる国府の方を古く位置づける見解がある。濱 哲夫「古代の美作—国府と国分寺を中心として—」『古代史を歩く4 吉備』毎日新聞社 1987。
- 今回の胎土分析結果(付録)と軒平瓦顕形態の観察から、この見解の正しさが裏づけられた。

付編 美作国府跡出土瓦の胎土分析

白 石 純

1 はじめに

美作国府跡出土の軒丸瓦・軒平瓦の中には美作国分寺跡・国分尼寺跡のものと同範囲を有するものが出土し、知られている（註1）。小稿では、これら同範囲を有する一群の瓦を胎土分析し、以下の点について検討した。

(1) 美作国府跡出土の軒丸瓦・軒平瓦の I a 型式は、肉眼的な観察から緻密で砂粒をあまり含まない胎土であるが、それに対して美作国分寺・国分尼寺の軒丸・軒平瓦の I a 型式は砂粒を多く含み、やや荒い胎土である。そこで、これら肉眼観察結果による違いが蛍光 X 線分析によつてもみられるのか、検討を行つた。

(2) 肉眼観察では、軒丸瓦・軒平瓦の I a 型式以外は美作国府・国分寺・国分尼寺の 3 遺跡ともほぼ同じような胎土であるが、胎土分析ではどのような結果になるか検討した。

2 分析方法・結果

(1) 分析方法、資料

分析方法は、蛍光 X 線分析装置（波長分散型）を使用し、9 元素（Si, Ti, Al, Fe, Mg, Ca, K, Sr, Rb）の定量値を測定した。

測定方法、資料などは、現在まで筆者が行つてゐる方法である（註2）。

分析した瓦資料は、表 1 に掲載した 58 点である。個々の遺跡の分析点数は、国府跡軒丸瓦・軒平瓦 I a 型式 6 点、I b 型式 2 点、I c・I e・II a 型式各 1 点、平瓦・丸瓦（註3）6 点の計 17 点。国分寺跡軒丸瓦・軒平瓦 I a 型式 8 点、I b 型式 6 点、I c・I e・II a・II b 型式各 1 点、平瓦・丸瓦 3 点の計 20 点。国分尼寺跡軒丸瓦・軒平瓦 I a 型式 8 点、I b 型式 6 点、I c・I e・II a・II b 型式各 1 点、平瓦・丸瓦 3 点の計 21 点である。

(2) 分析結果

Tab. 1 に示した分析値のように Ca, K, Mg, Sr に顕著な差がみられた。そこでこれらの元素を用いて、Fig. 1 K-C a、Fig. 2 S r-R b、Fig. 3 K-M g、Fig. 4 M g-S r の各散布図を作成し検討した。

Fig. 1 K-C a では国府 I a 型式・平瓦 1 , 丸瓦 4・5・6 と国分寺 I a 型式 (C-128, D-2, D-38)、国分尼寺 I a 型式 (C-8, C-49, D-71) がほぼ一つにまとまる。そして、その他の国府、国分寺、国分尼寺の瓦も一つにまとまり、大きく二つのグループに分かれた。

Fig. 2 S r - R b では、国府 I a 型式、軒半 I b 、平瓦 1 とその他の国府、国分寺、国分尼寺の二つに大きく分かれるようである。そして、これら二つに分かれたグループの中間部分に国分寺 I b 型式 (C-47) 、国分尼寺 I a 型式 (C-49,D-71) がプロットされた。

Fig. 3 K-M g では、全体的にやや散漫な分布であるが、国府 I a 型式、平瓦 1 がほぼ一つにまとまるようである。また、国分寺 I a 型式 (C-128,D-2,D-38) 、国分尼寺 I a 型式 (C-49,D-71) がまとまり、他の国分寺、国分尼寺と分かれる傾向にある。

Fig. 4 M g - S r では、国府 I a 型式、平瓦 1 が一つのグループをつくり、国府の他の瓦および国分寺、国分尼寺もほぼ一つにまとまり大きく二つに分かれた。

このように、各散布図とも二つないし、三つのグループをつくり分かれるようである。特に、国府軒丸・軒平 I a 型式がどの散布図でもほぼ一つにまとまる傾向を示している。

また、国府、国分寺、国分尼寺の I a 型式以外の軒丸瓦・軒平瓦もほぼ一つにまとまる結果となった。

3 ま と め

今回の分析結果で検討したことおよびわかったことについてまとめる。

- (1) 国府軒丸瓦・軒平瓦 I a 型式と国分寺、国分尼寺の軒丸瓦・軒平瓦 I a 型式は肉眼観察で違いがみられ、この違いは胎土分析（蛍光X線分析）でもほぼみられた。
- (2) 国府、国分寺、国分尼寺の軒丸瓦・軒平瓦 I b 型式以後は肉眼観察でほとんど差がみられず識別できないが、胎土分析（蛍光X線分析）でも分析値がほぼひとつにまとまり、 I a 型式以外の瓦にはほとんど差がみられなかった。

以上のように、今回の分析では肉眼観察とほぼ一致した結果となった。しかし、中には Fig. 1-2-3 のように国分寺 I a 型式 (C-128,D-2,D-38) 、国分尼寺 I a 型式 (C-49,D-71) の軒丸瓦・軒平瓦などが、国府 I a 型式個に分布しており、分析資料を増やすことによりグループ分けが難しくなることも十分考えられる。今後、資料点数を増やして改めて検討する必要がある。

最後になりましたが、この分析を行うにあたり、亀田修一先生には終始ご指導、ご教示頂いた。また、資料の収集では濱 哲夫、安川豊史の両氏にお世話をになりました。記して深謝の意を表します。

註

- (1) 濱 哲夫「美作国分尼寺跡発掘調査報告」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第12集 津山市教育委員会 1983
- (2) 白石 純「蛍光X線による須恵器の同一個体内の科学的不均質性について」蒜山研究所報告第15号 蒜山理科大学 1989
- (3) 安川豊史より国府跡出土の平瓦・丸瓦のうち、平瓦 1 は繩目叩きで軒瓦 T a 型式に伴い、丸瓦 4-5-6 は繩目叩きのあと横位のハケ調整が行われており、古い様相を呈していることを教示頂いた。

施 設 名	種類	型 式	番 号	Si	Ti	Al	Fe	Mg	Ca	K	Sr	Rb
美作四分守跡	軒丸	I a	C-25	70.79	0.97	16.20	3.33	0.49	0.43	1.56	81	81
	軒丸	I a	C-128	65.78	0.84	19.73	5.10	0.72	0.46	2.29	89	103
	軒丸	I a	C-156	72.69	0.01	17.85	4.27	0.51	0.30	1.62	72	65
	軒平	I a	D-2	66.88	0.97	20.05	2.43	0.40	0.45	2.29	95	97
	軒平	I a	D-14	61.07	1.08	22.88	4.97	0.61	0.39	1.71	87	77
	軒平	I a	D-25	68.48	0.98	17.96	3.69	0.71	0.41	1.80	86	82
	軒平	I a	D-38	62.11	0.96	21.5	3.71	0.82	0.53	2.32	99	96
	軒丸	I b	C-9	75.32	1.06	14.70	2.36	0.66	0.30	1.54	70	79
	軒丸	I b	C-47	66.90	0.97	20.29	4.03	0.53	0.39	1.30	124	86
	軒丸	I b	C-114	70.06	1.06	18.55	4.18	0.59	0.35	1.60	63	85
	軒平	I b	D-4	66.51	1.06	18.45	4.35	0.84	0.37	1.25	74	89
	軒平	I b	D-49	69.04	0.95	16.02	5.21	0.30	0.30	1.40	69	63
	軒平	I b	D-181	67.24	1.19	18.20	5.58	0.40	0.36	1.32	58	74
	軒平	I c		74.55	1.14	15.65	2.58	0.86	0.42	1.63	84	104
	軒平	I e	D-112	78.94	1.21	17.58	3.11	0.99	0.31	1.34	60	66
	軒丸	II a	C-69	66.17	1.20	17.69	6.05	0.73	0.31	1.48	61	70
	軒丸	II b	C-5	61.30	1.17	17.28	4.68	0.88	0.38	1.48	72	81
	平瓦	繩叩き目	1	62.53	0.97	21.13	5.57	0.48	0.42	1.86	91	80
	平瓦	平行叩き目	2	76.10	0.93	18.03	3.10	0.99	0.43	1.84	95	84
	丸瓦		3	69.03	1.09	19.71	2.48	0.72	0.34	1.58	89	77
美作国分尼寺跡	軒丸	I a	C-8	65.09	1.04	22.99	5.26	0.95	0.51	1.95	96	86
	軒丸	I a	C-9	70.20	1.01	17.05	4.11	0.48	0.30	1.58	87	77
	軒丸	I a	C-35	74.08	1.14	18.43	4.23	0.87	0.31	1.48	70	70
	軒丸	I a	C-49	64.98	1.06	23.00	5.46	0.90	0.64	2.21	108	86
	軒平	I a	D-49	69.09	1.05	16.99	4.23	0.55	0.24	1.60	75	71
	軒平	I a	D-71	68.53	1.00	22.22	3.74	0.82	0.54	2.32	113	93
	軒平	I a	D-72	72.71	1.07	19.05	4.54	1.04	0.35	1.54	71	75
	軒平	I a	D-73	73.39	1.18	15.91	7.02	0.75	8.33	1.53	69	69
	軒丸	I b	C-5	64.55	1.15	19.97	4.70	0.79	0.35	1.44	77	85
	軒丸	I b	C-56	64.72	1.24	20.72	4.87	0.61	0.23	1.37	63	83
	軒丸	I b	C-60	63.98	1.21	19.29	4.95	0.87	0.45	1.59	80	84
	軒平	I b	D-21	61.51	1.20	21.60	6.22	0.44	0.40	1.58	56	71
	軒平	I b	D-42	73.38	1.19	14.73	2.64	0.54	0.26	1.59	72	91
	軒平	I b	D-79	75.73	1.13	13.57	1.86	0.53	0.27	1.52	64	96
	軒平	I c	D-5	70.49	1.25	15.05	5.13	0.39	0.27	1.65	57	80
	軒平	I e	D-39	66.83	1.23	19.87	4.34	0.58	0.27	1.56	54	93
	軒丸	II a	C-20	61.66	1.17	21.14	7.04	0.22	0.22	1.27	49	51
	軒丸	II b	C-18	71.66	1.12	16.12	5.34	0.38	0.43	1.63	74	68
	平瓦	繩叩き目	1	63.43	1.03	20.92	5.92	0.75	0.38	1.78	86	80
	平瓦	平行叩き目	2	72.47	1.11	16.45	7.85	0.96	0.33	1.55	67	78
	丸瓦		3	72.14	1.06	17.31	3.62	0.55	0.26	1.51	70	72
美作国府跡	軒丸	I a	C103	67.54	1.00	17.15	4.76	1.49	0.64	2.21	141	87
	軒丸	I a	C108	64.51	1.01	19.73	3.17	1.14	0.41	2.29	107	111
	軒丸	I a	C111	68.01	0.89	16.00	4.78	1.47	0.59	1.97	124	100
	軒平	I a	D103	66.44	0.98	20.37	4.39	1.86	0.59	2.24	129	126
	軒平	I a	表焼04	62.64	0.9	18.87	6.51	1.104	0.814	2.02	164	94
	軒平	I a	D108	66.37	0.99	18.51	4.53	1.41	0.74	2.12	153	107
	軒丸	I b	C114	77.56	1.07	12.53	2.51	0.67	0.34	1.58	72	80
	軒平	I b	D113	72.49	1.17	14.54	3.63	0.80	0.42	1.76	131	91
	軒平	I c	D114	67.61	1.18	15.97	4.42	0.67	0.68	1.53	219	78
	軒平	I e	D115	60.95	1.12	17.32	10.36	0.31	0.35	1.56	68	59
	軒丸	II a	C115	70.55	1.17	17.02	3.25	0.87	0.43	1.60	81	92
	平瓦	繩叩き目	平6	66.05	0.96	18.26	4.48	1.60	0.55	2.12	127	103
	平瓦	平行叩き目	平7	66.98	1.24	18.40	3.63	0.75	0.36	1.49	64	77
	丸瓦	ナデ	丸4	69.24	1.23	18.91	5.64	1.09	0.48	1.52	78	79
	丸瓦	繩叩き目	丸1	63.20	1.01	21.18	4.88	0.53	0.39	2.03	76	84
	丸瓦	丸3	64.76	0.99	21.28	6.07	1.10	0.47	2.42	92	87	
	丸瓦	カキ目状	丸2	65.91	0.99	21.85	5.53	1.04	0.47	2.45	89	101

Tab. 1 分析資料一覧表および結果（%、ただしSr,Rbはppm）

この分析資料一覧表の瓦種類、型式、調整などは安川農史の観察による。

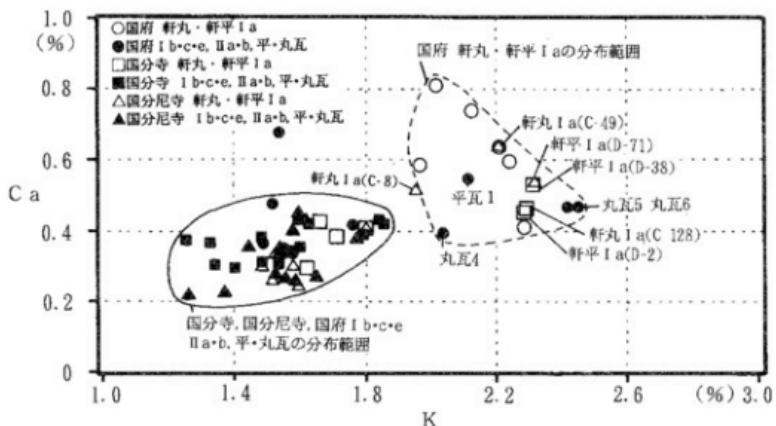


Fig. 1 K-Ca散布図 美作国府、国分寺、国分尼寺出土瓦の比較

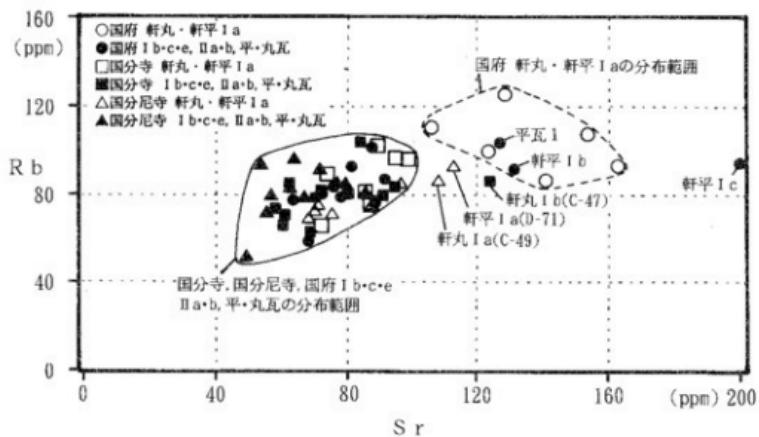


Fig. 2 Sr-Rb散布図 美作国府、国分寺、国分尼寺出土瓦の比較

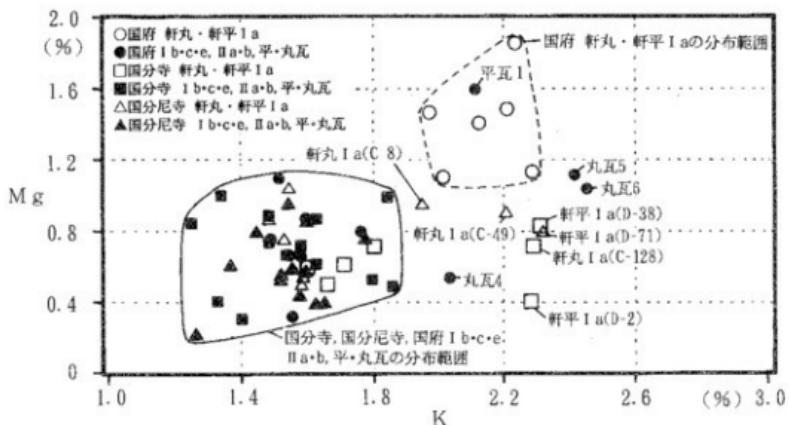


Fig. 3 K-Mg散布図 美作国府、国分寺、国分尼寺出土瓦の比較

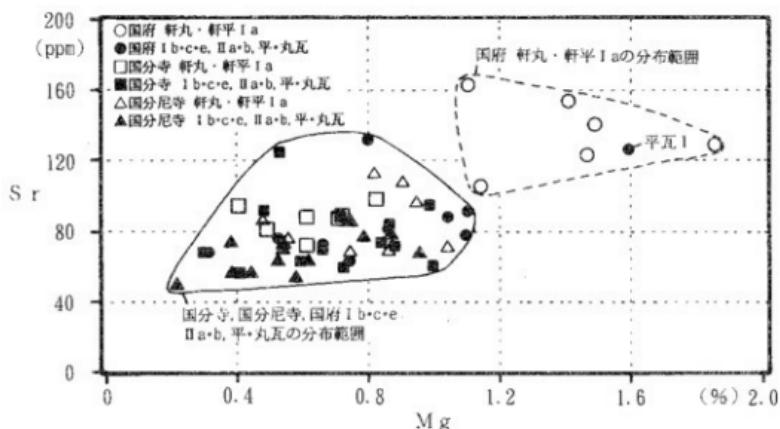


Fig. 4 Mg-Sr散布図 美作国府、国分寺、国分尼寺出土瓦の比較

図面・図版

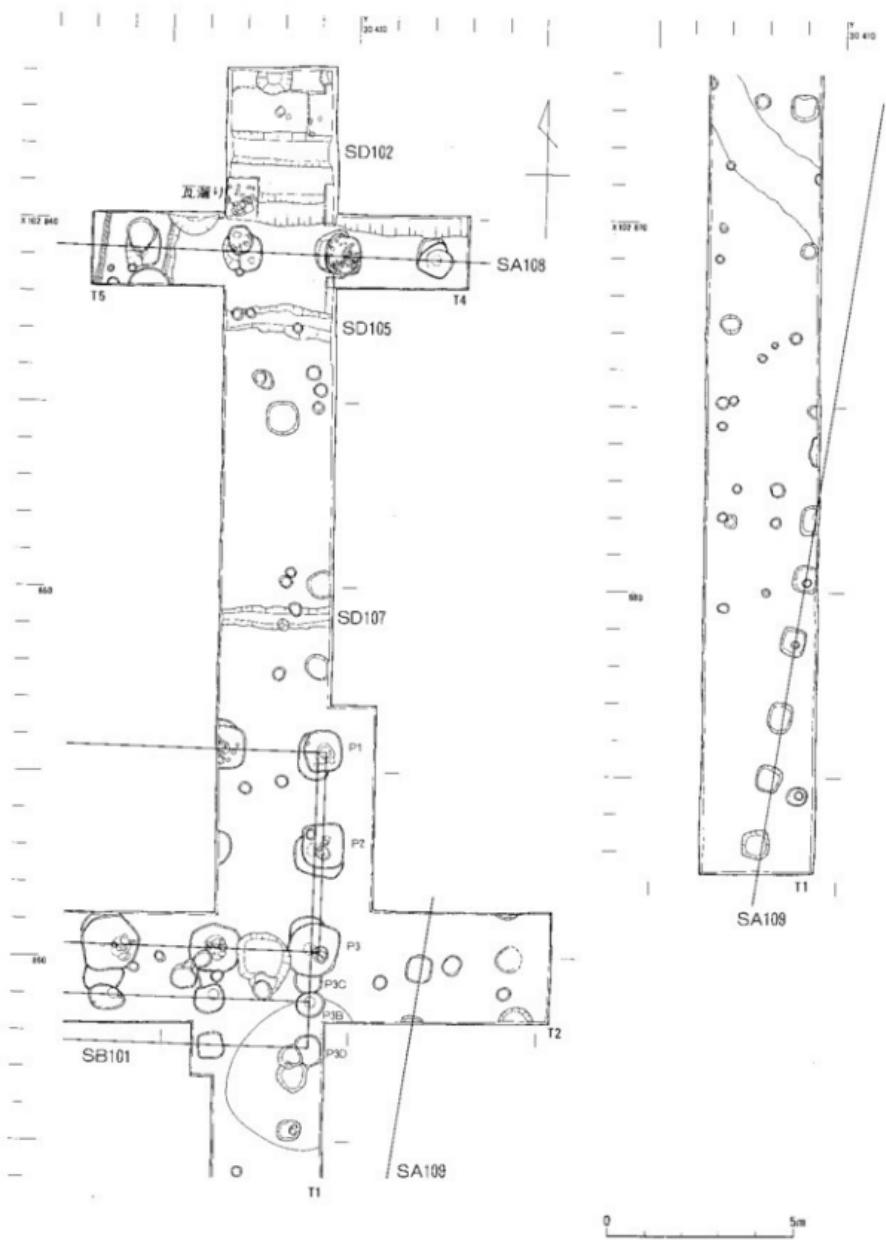
周辺地形図

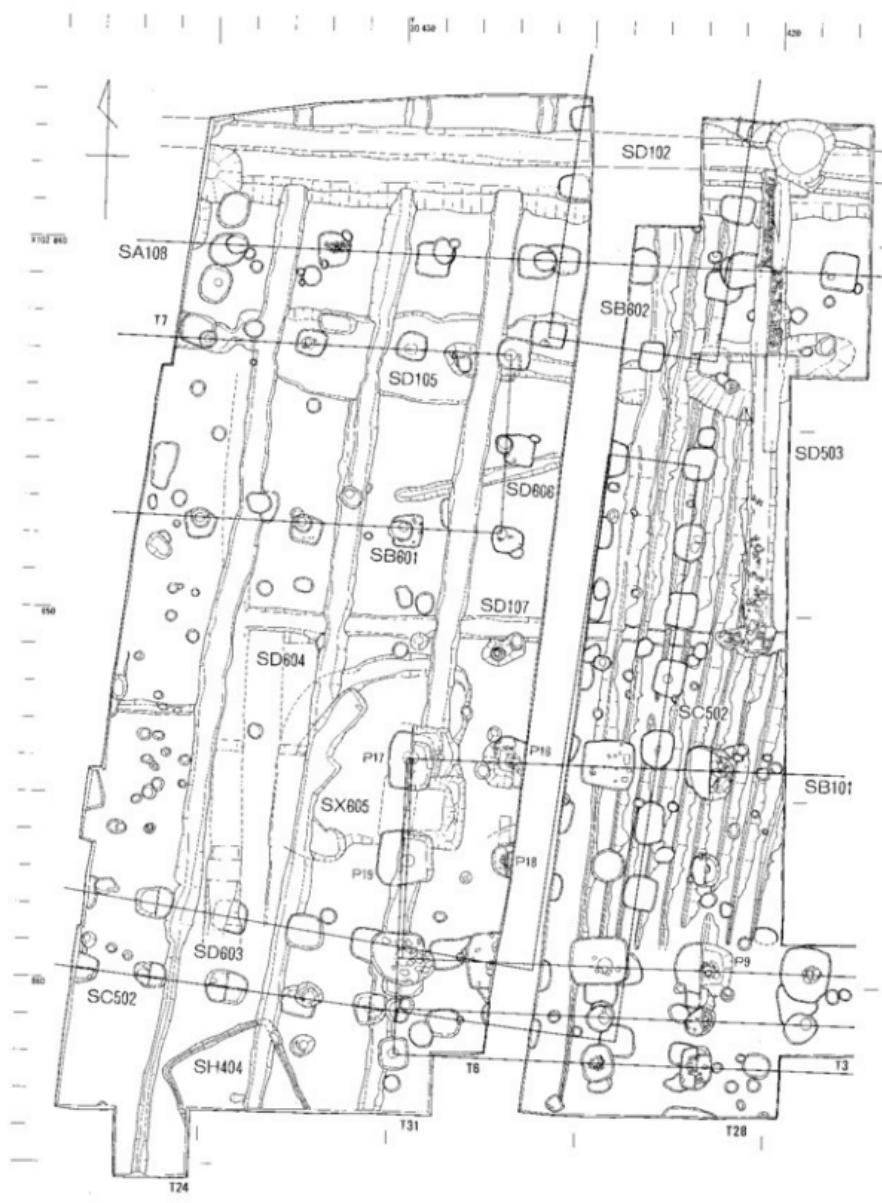
PLAN1

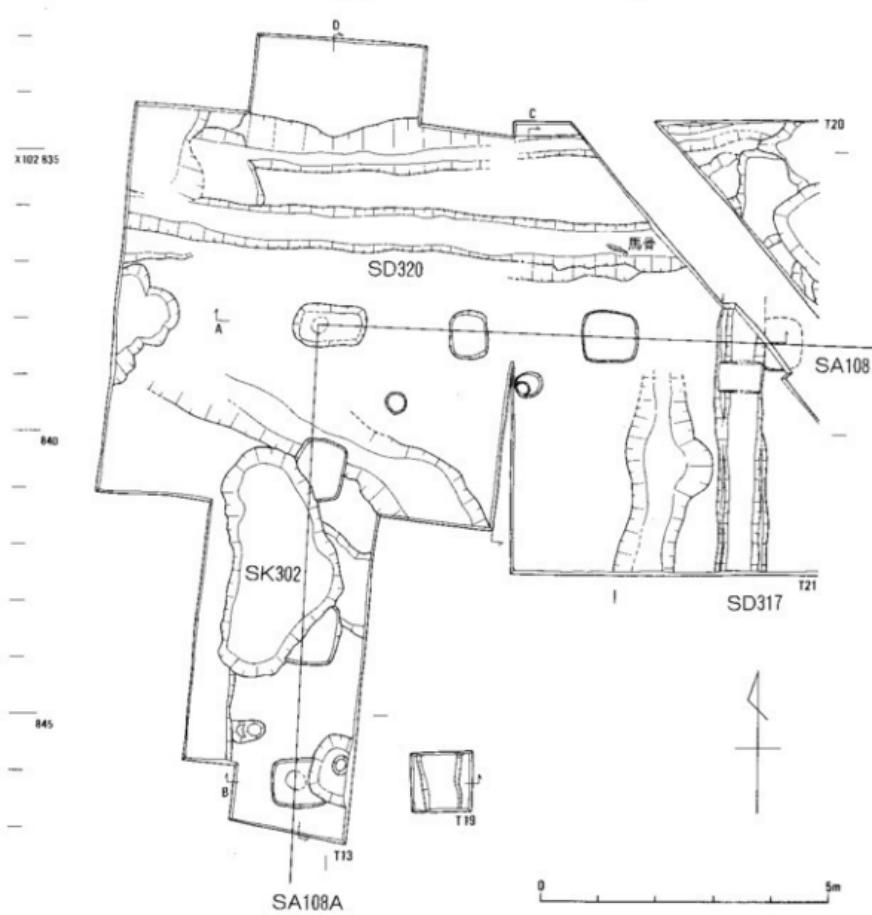


発掘調査区域図

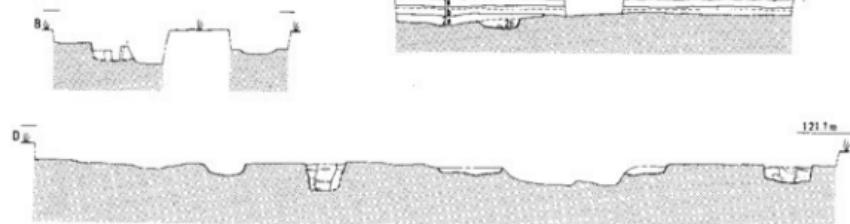


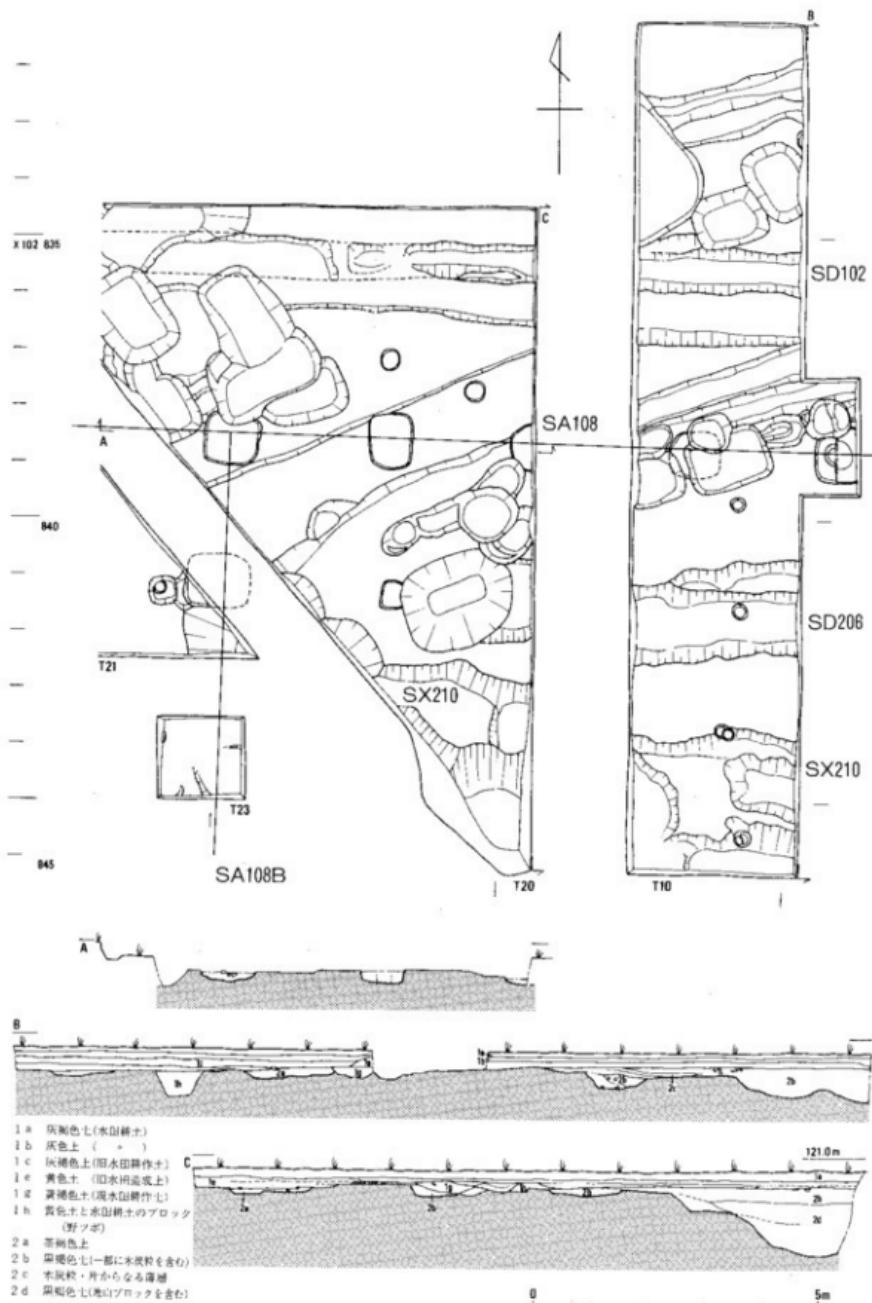




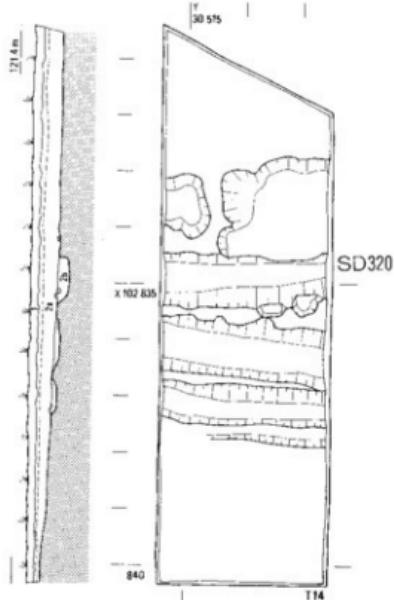


- 1 a 灰褐色土(水田耕土)
- 1 b 灰黃褐色土(上部酸化鉄泥化)
- 2 a 灰黃褐色土
- 2 b 灰茶褐色土
- 3 a 晴褐色土(S A108柱抜取扱)
- 3 b 嘉麗色土(地山ブロックを含む)

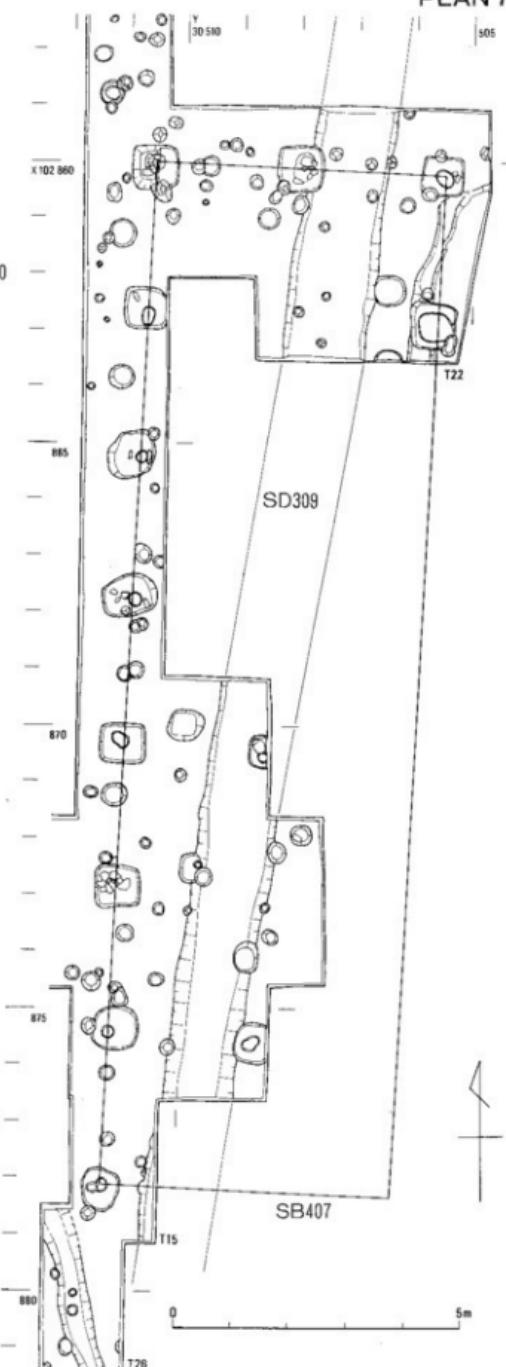
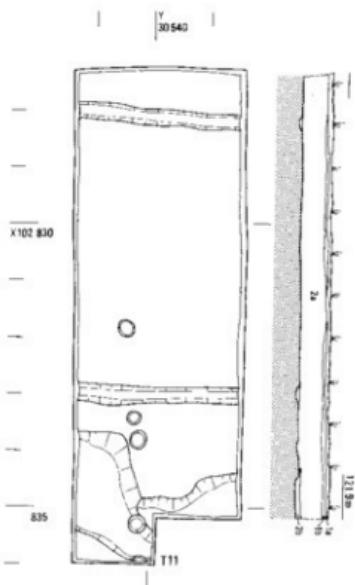


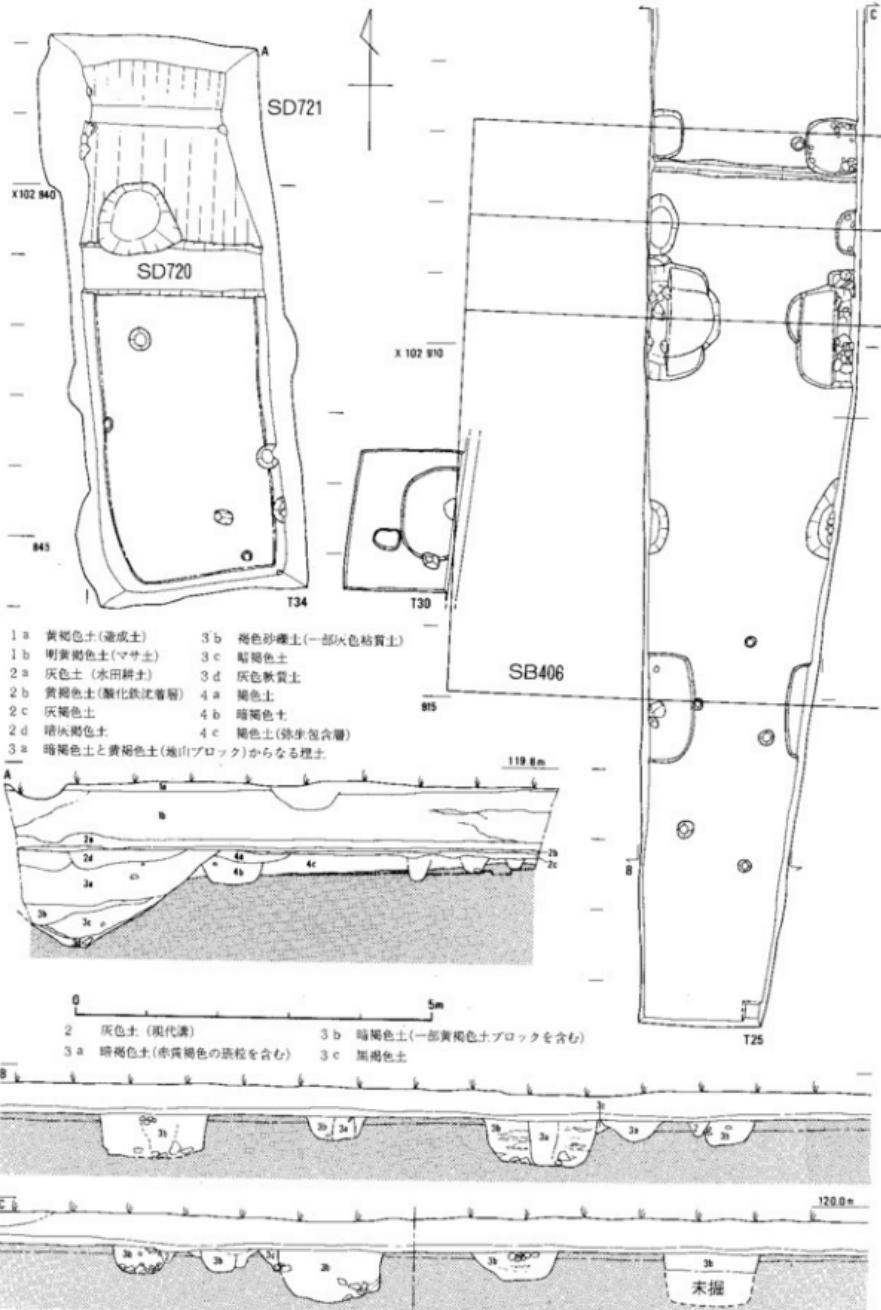


PLAN 7

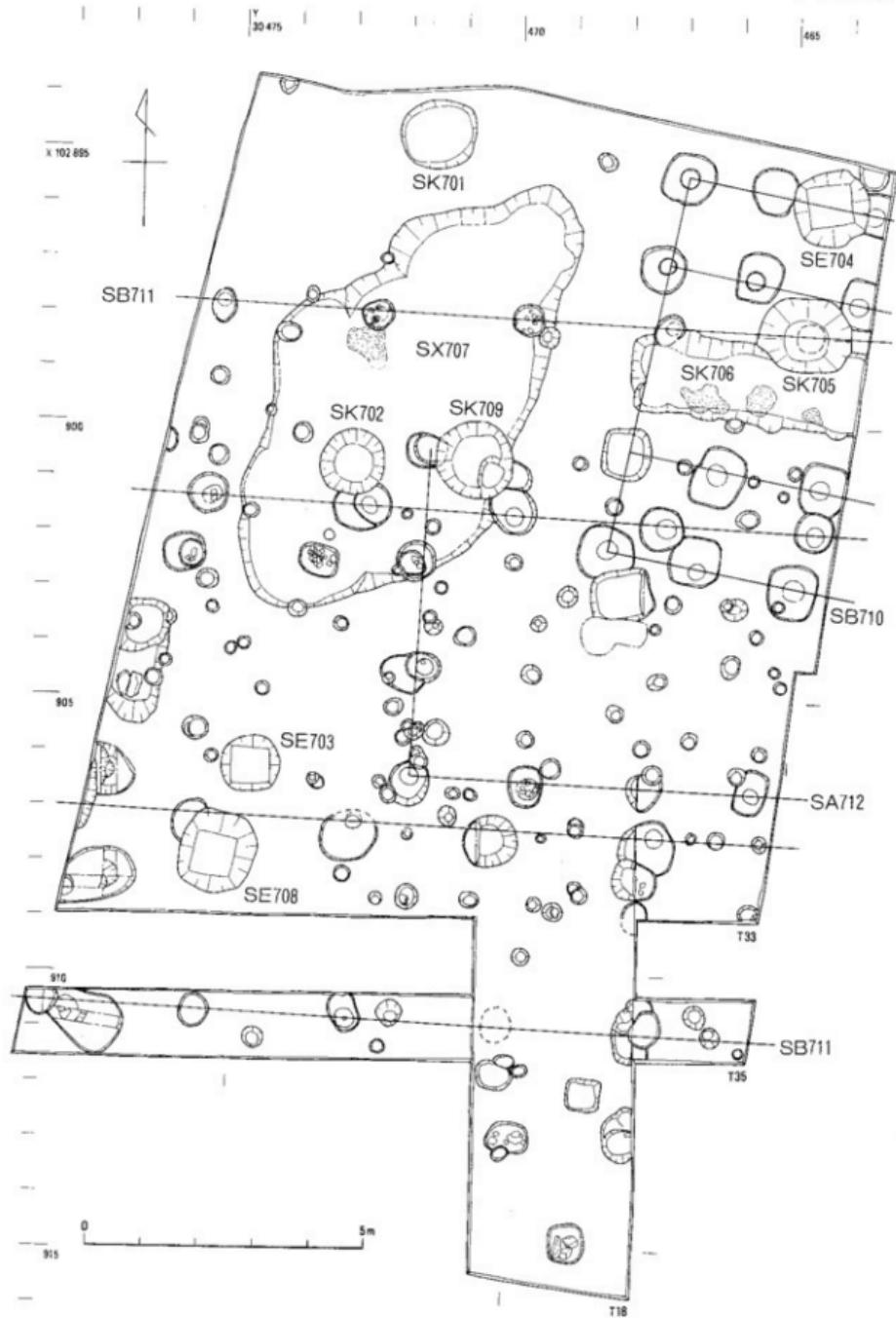


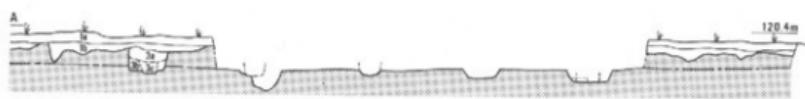
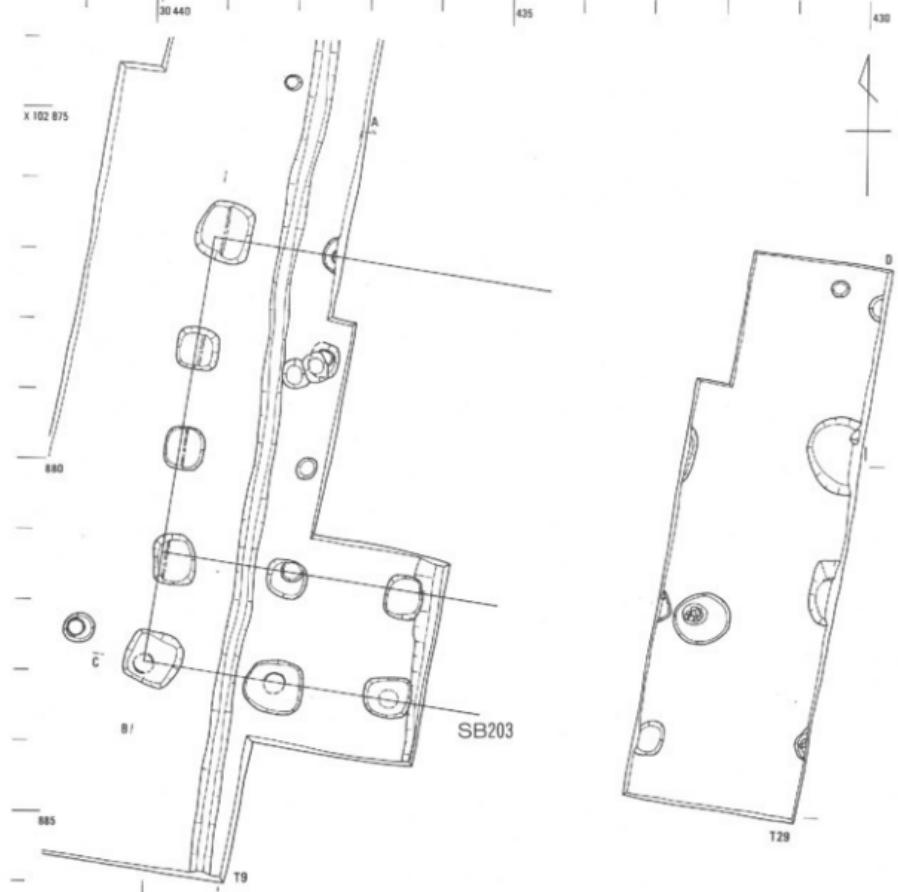
- 1 a 灰褐色土(水田耕土)
- 1 b 灰黄褐色土(酸化歴沈着層)
- 2 a 灰色粘質土
- 2 b 黄色土



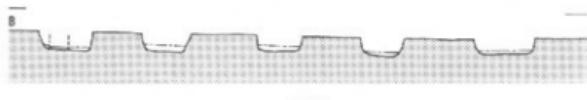


PLAN 9



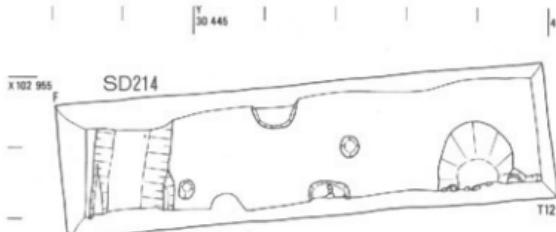
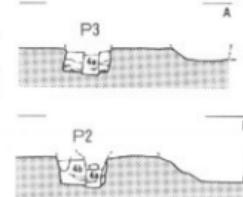
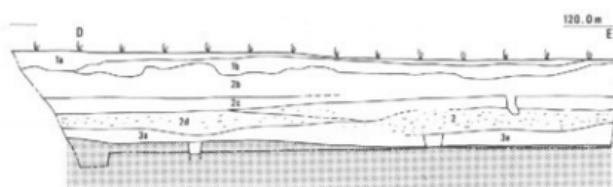
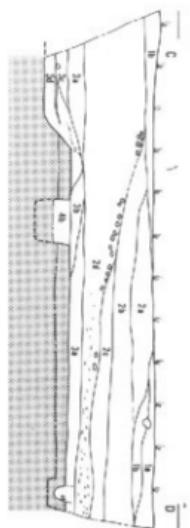


- 1 a 灰褐色土 (烟耕作土)
- 1 b 茶褐色土 (耕作による擾乱土)
- 3 a 緑茶褐色土 (基盤ブロックを含む)
- 3 b 緑茶褐色土
- 3 c 黒褐色土

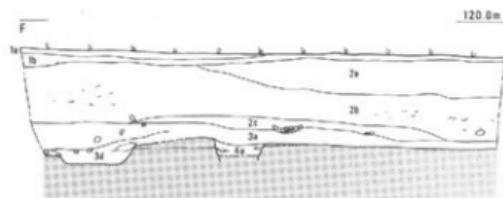


- 1 灰褐色土 (烟耕土)
- 2 緑茶褐色土 (木炭粒・土器片・粒を含む)
- 3 黑褐色土 (土器片・粒を含む。基盤の黒褐色土よりもやや明るい)





- 1 a 黄褐色土(マサ土)
- 1 b 砂石
- 2 a 黒褐色土(硬く縮まっている)
- 2 b 茶褐色土(土壌器小片を多く含む)
- 2 c 淡褐色土
- 2 d 褐色土(円錐、土壌器片・網紋を含む)
- 3 a 灰褐色土
- 3 b 灰褐色土(赤褐色斑点を含む)
- 3 c 灰褐色土
- 3 d 細褐色土(基盤の黄褐色土ブロックを含む)
- 4 a 細褐色土(柱状取直)
- 4 b 培育褐色土(基盤上ブロックを含む)



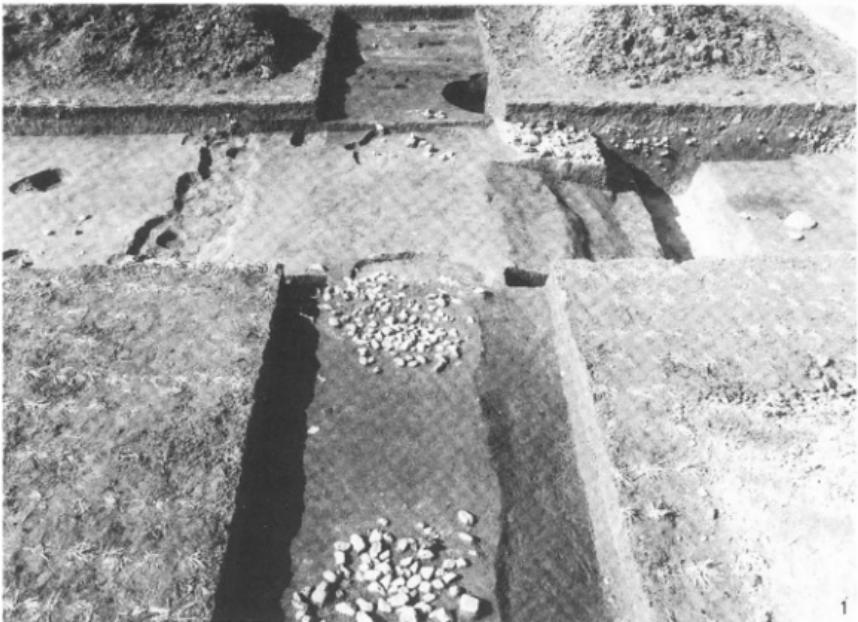
0 4m



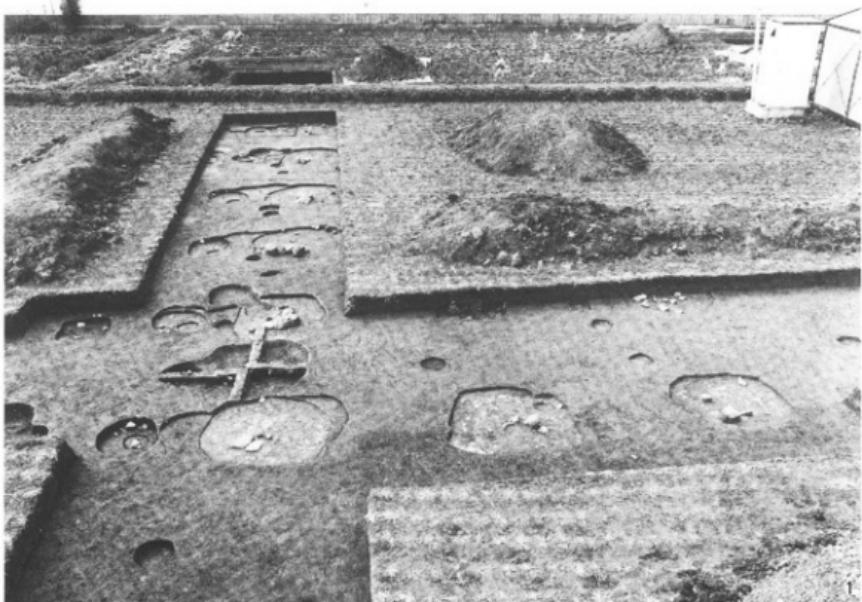
T31全景(空中写真)



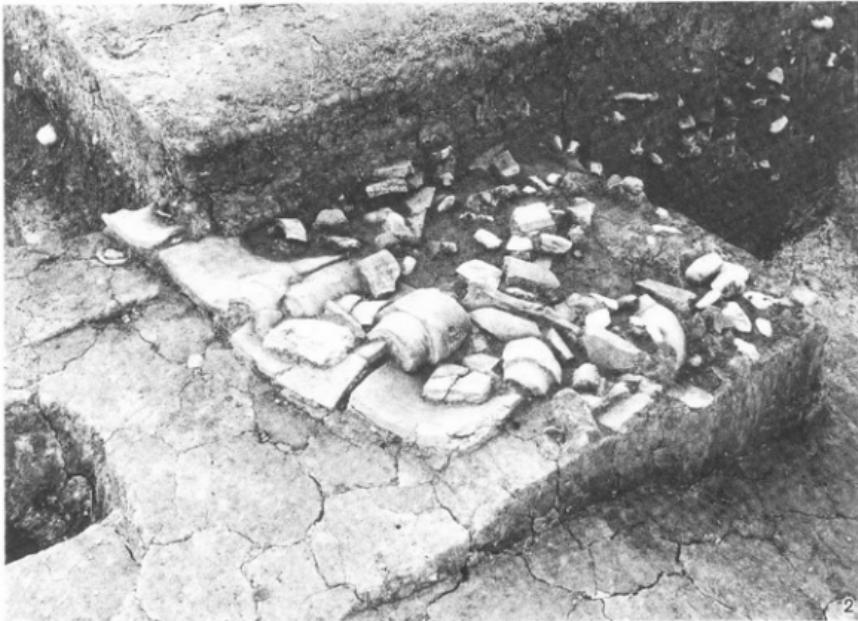
航空写真(向って左が北)



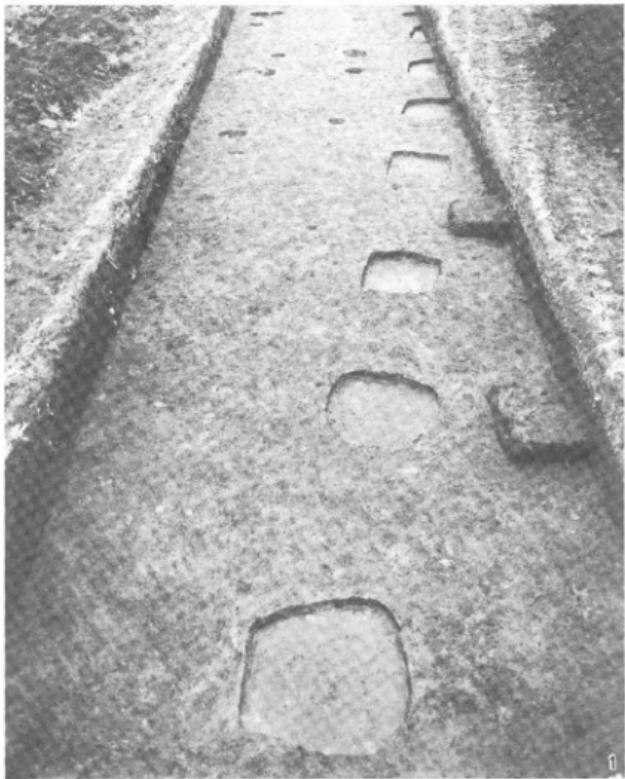
1 SA108(T1・4・5, 東から) 2 SA108柱穴断面(T1東壁, 西から)



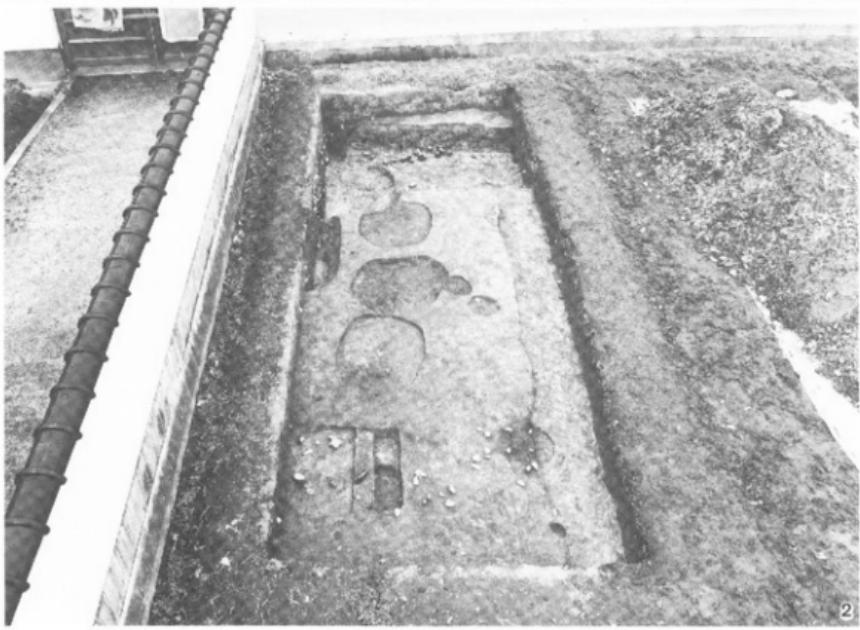
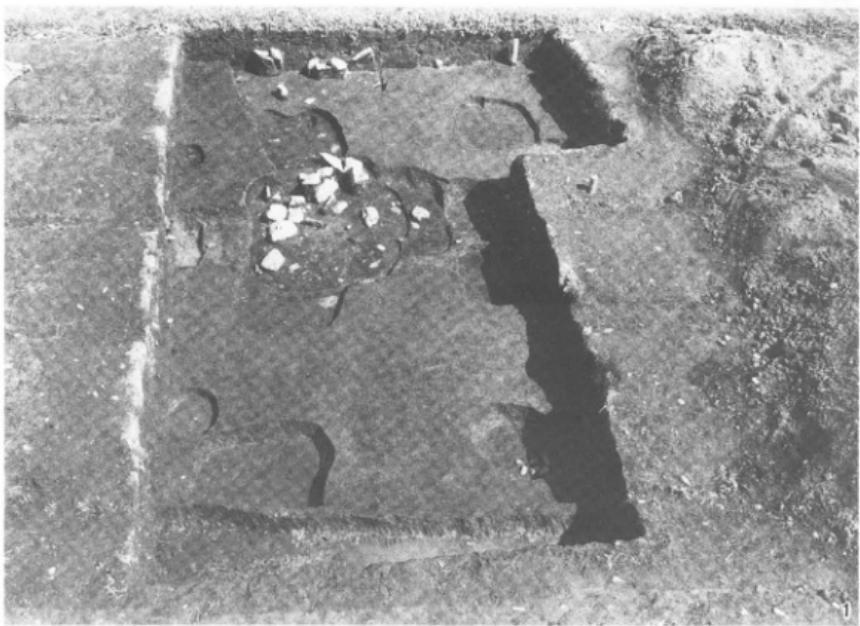
1 SB101(T1・2・3、東から) 2 SB101東側柱列(T1、北から)



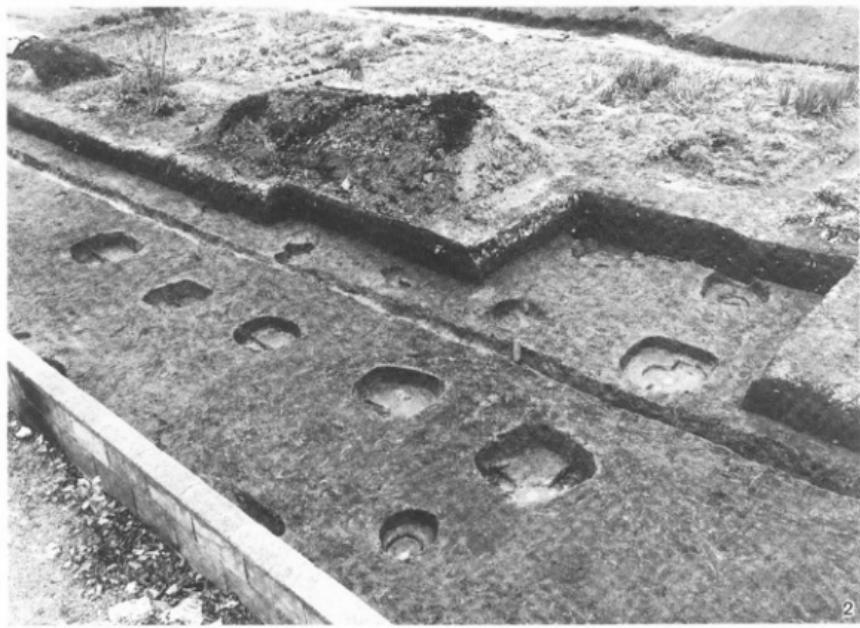
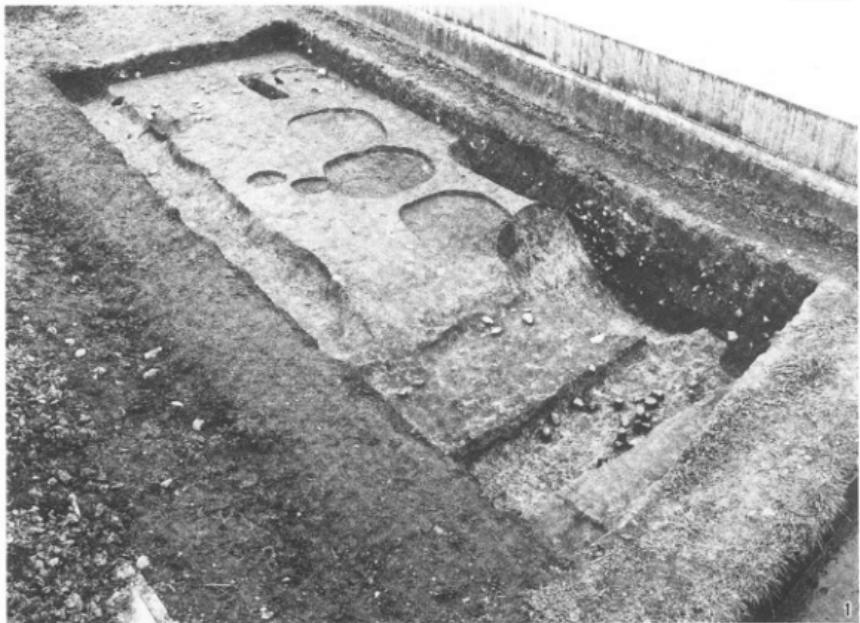
1 SD102(T1.北から) 2 SA108北側瓦出土状況(T1.南東から)



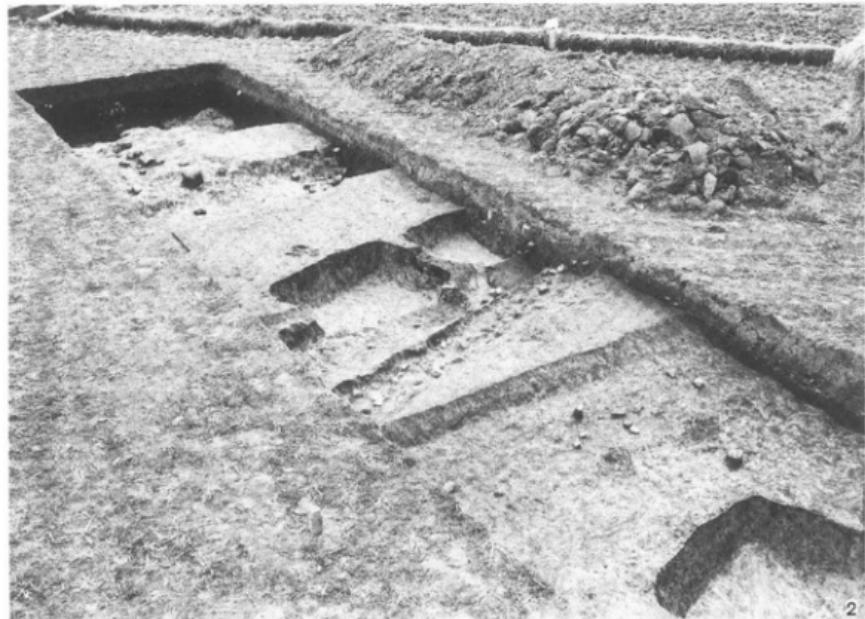
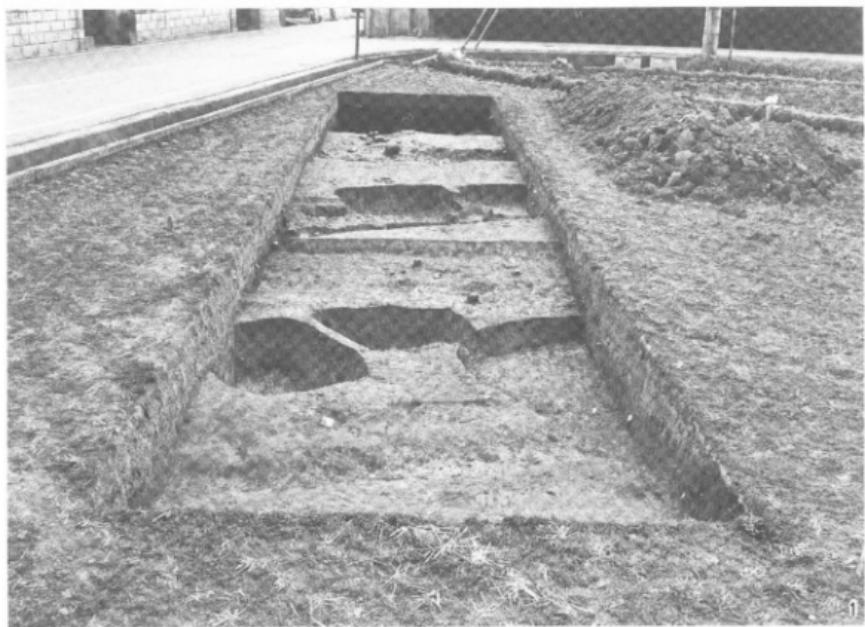
1 SA109(T1.南から) 2 SD105軒瓦出土状況(T1.北東から)



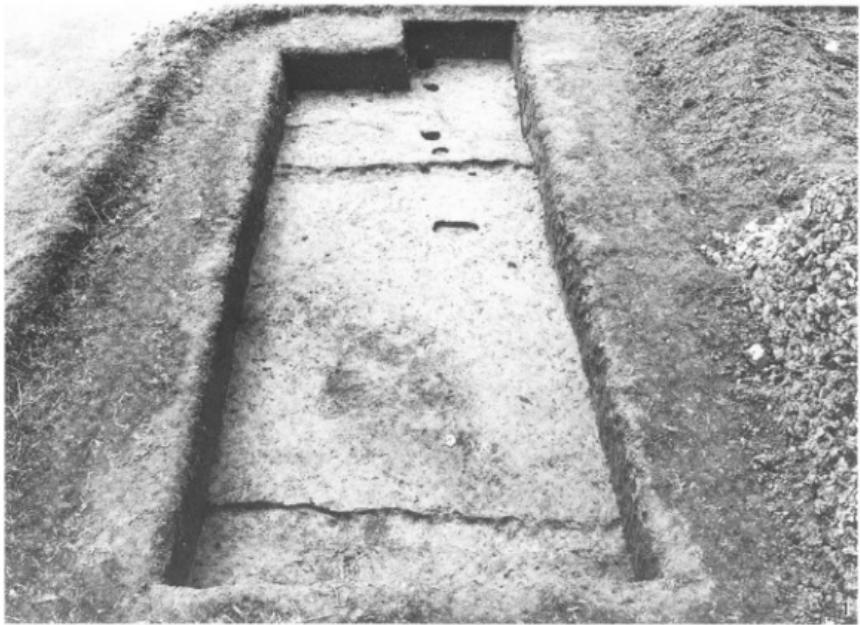
1 T6.全景(西から) 2 T7.全景(南から)



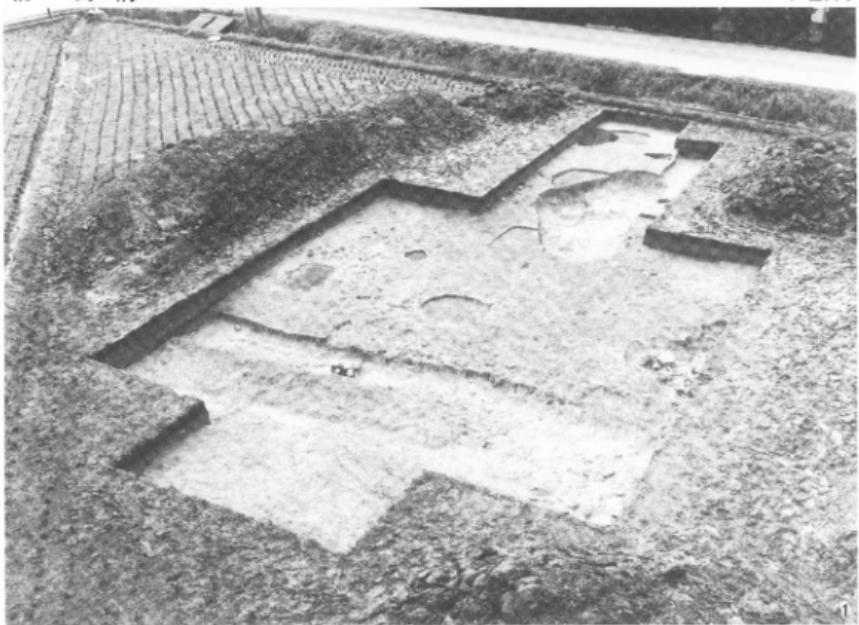
1 SD102(T7, 北東から) 2 SB203(T9, 南西から)



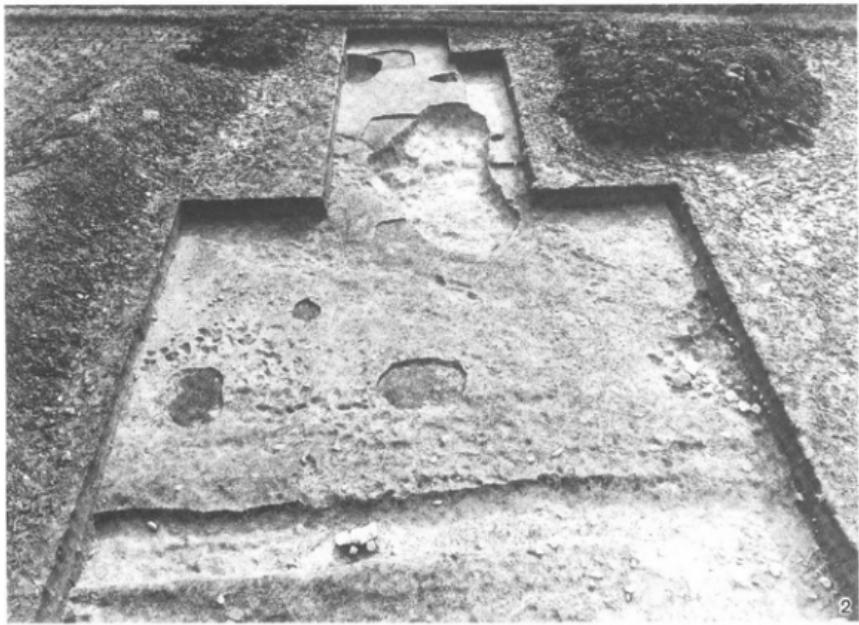
1 T10全景(北から) 2 SD102(T10.北東から)



1 T11全景(北から) 2 T12全景(東から)

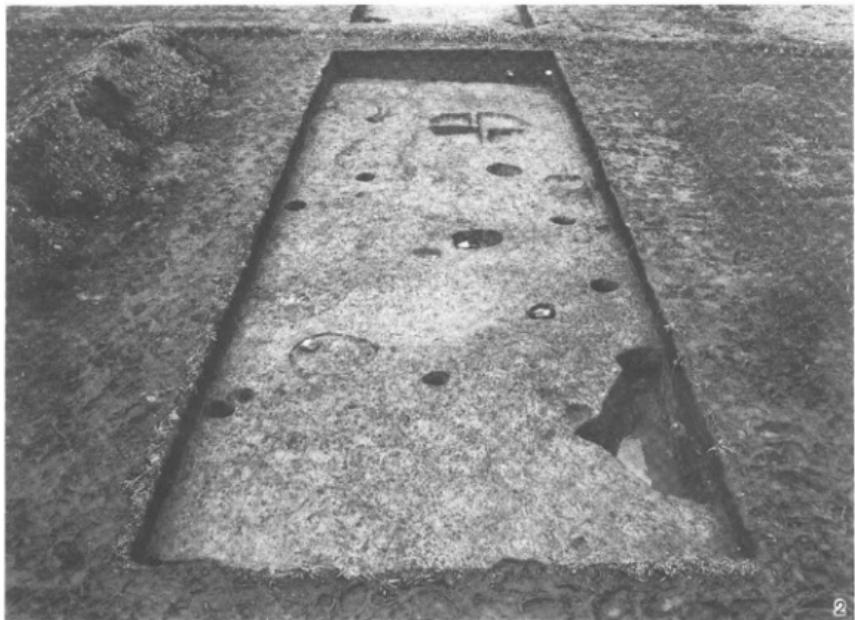


1

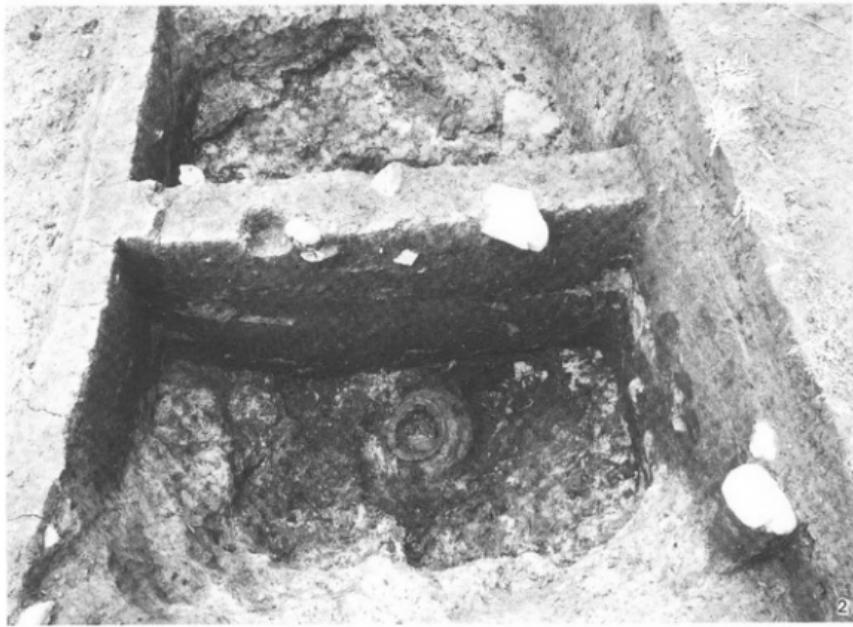
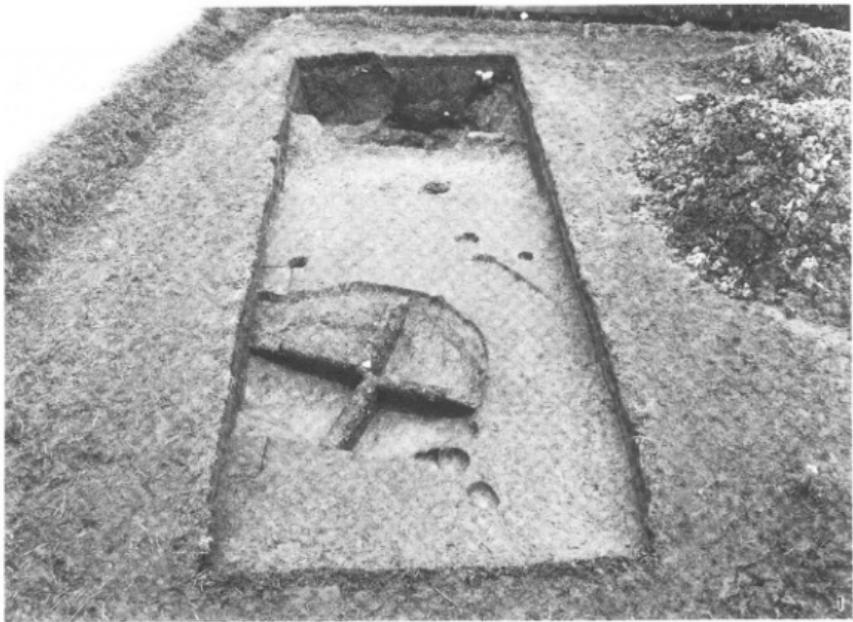


2

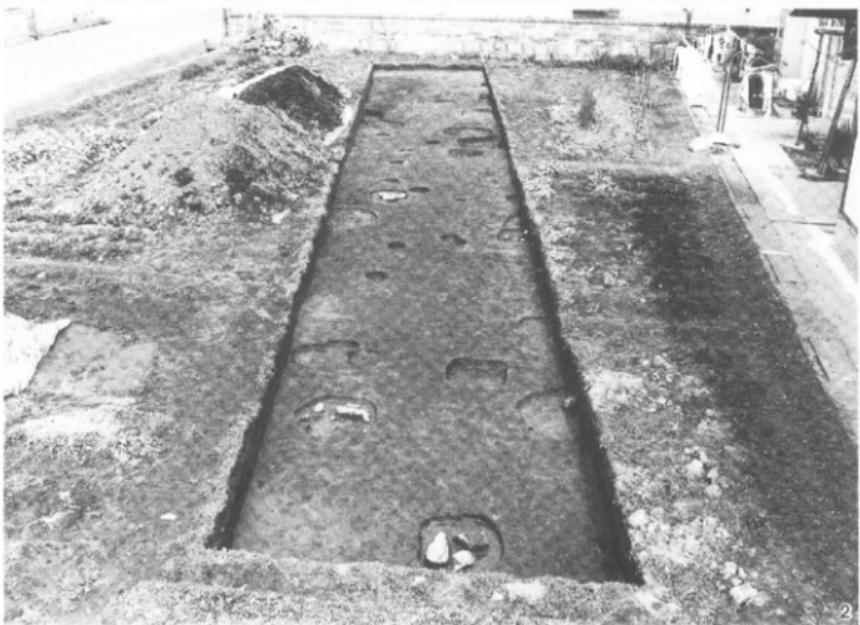
1 T13全景(北西から) 2 SA108・北西隅・SD320(北から)



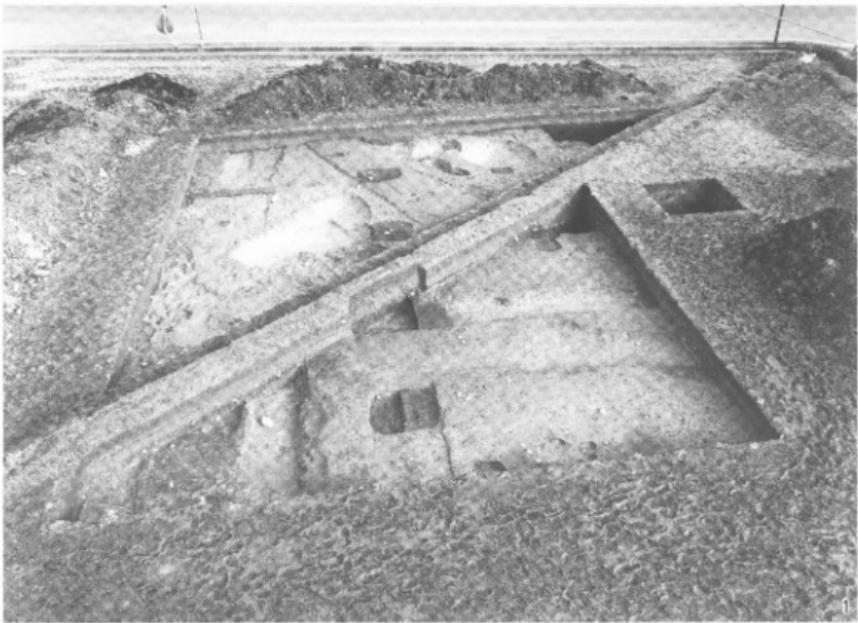
1 SK310(T15.西から) 2 T16全景(西から)



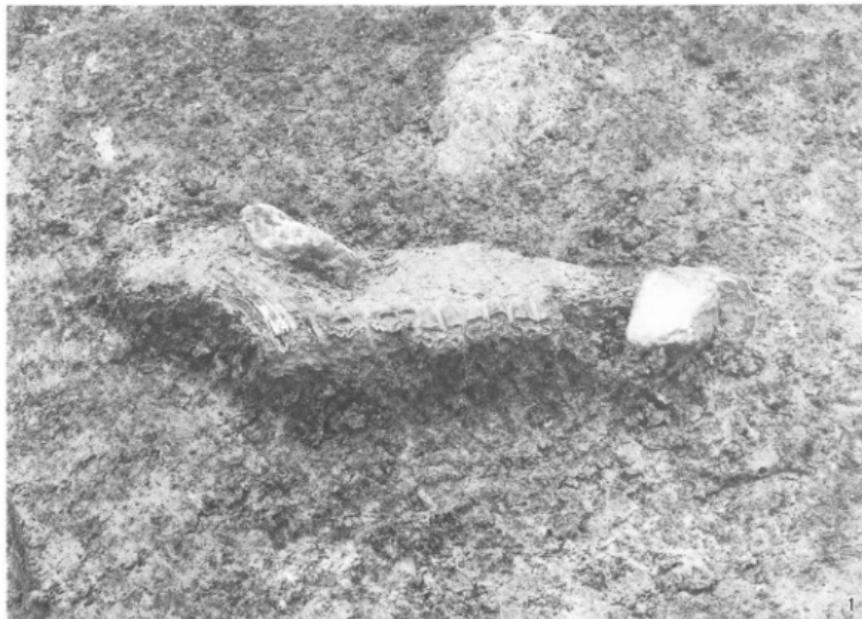
1 T17全景(西から) 2 SK316(T17.南から)



1 SD309調査状況(T17、北東から) 2 T18全景(南から)



1 T20・21・23.全景(西から) 2 SD317(T21.南から)

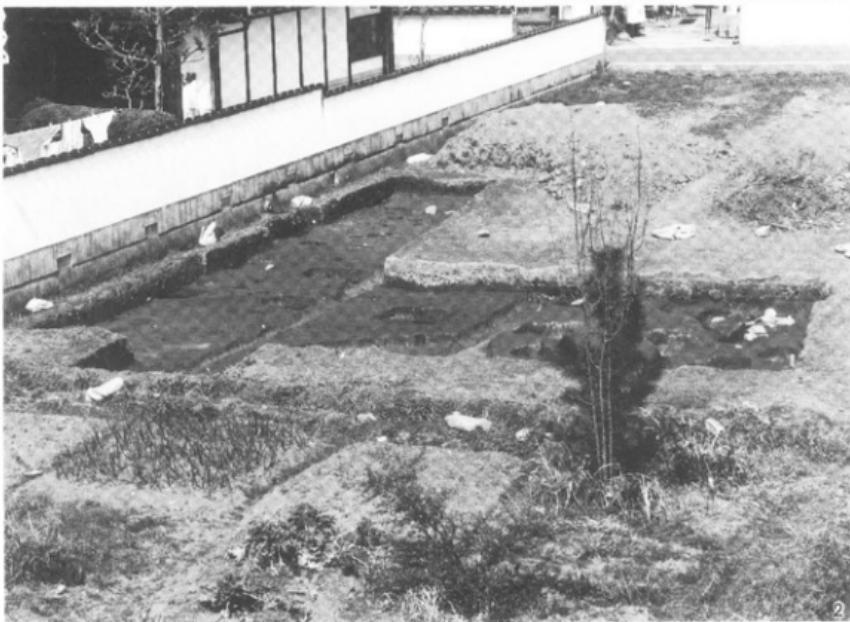


1

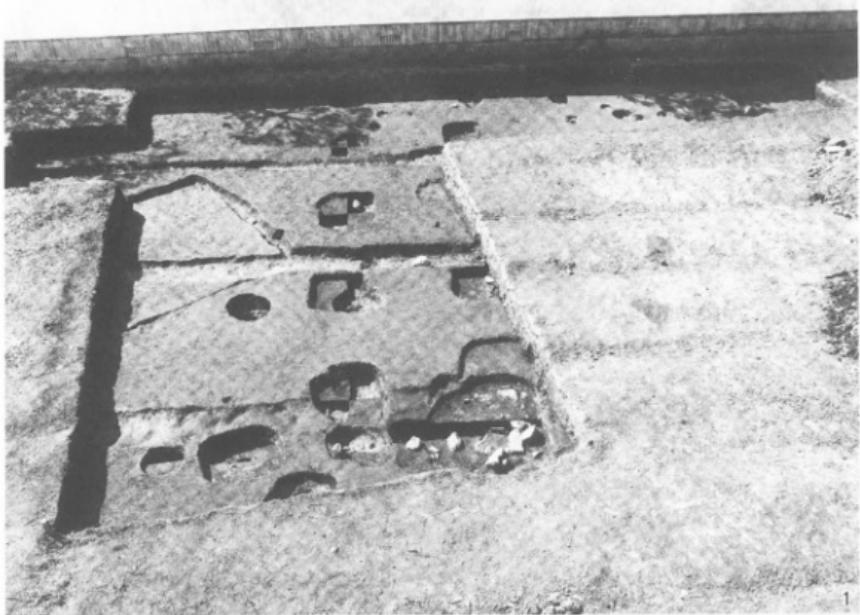


2

1 SD320馬歯骨出土状況(T21.南から) 2 T23全景(南東から)



1 SB407北側柱列・SD309(T22.西から) 2 T24全景(南東から)

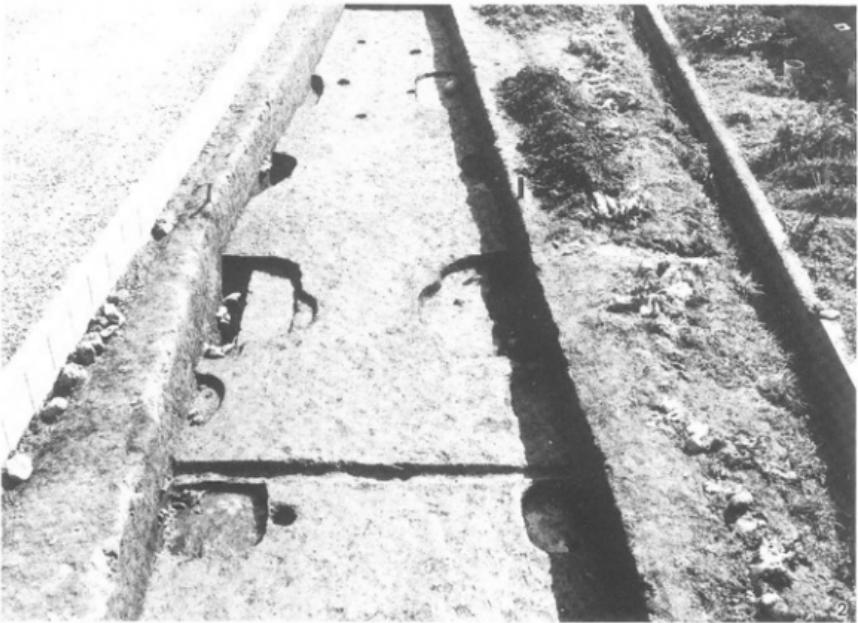


1



2

1 SC502-SB101(T24. 東から) 2 SB101南西隅柱断削状況(T24. 西から)



1 T25全景(北から) 2 SB406(T25. 北から)